

十六年第二十號布告ヲ以テ金澤治安裁判所管内越中關波郡ヲ富山始審裁判所管内高岡治安裁判所ノ管轄トナス

十六年第二十號布告ヲ以テ富山支廳ヲ本廳トナス

十六年第二十號布告ヲ以テ田邊ニ支廳ヲ設ク

訴 裁

和歌山	富山			金澤				福井																	
				七尾				小濱																	
和歌山	高岡	魚津	富山	輪島	七尾	小松	金澤	敦賀	小濱	大野															
和歌山縣	富山縣			石川縣				福井縣																	
紀伊	越中			能登		加賀		若狹	越前	若狹															
海部	和歌山區	伊都	那賀	名草	射水	礪波	下新川	上新川	婦負	珠洲	鳳至	鹿島	羽咋	能美	江沼	金澤區	河北	石川	若狹	越前	敦賀	三方	遠敷	大飯	大野

判 所

松山						高知		徳島		田邊																																					
高松	宇和島					中村		脇町		田邊																																					
丸龜	高松	宇和島	大洲	西條	松山	中村	高知	脇町	徳島	田邊																																					
愛媛縣						高知縣		徳島縣																																							
讚岐		伊豫				土佐		阿波																																							
阿野ノ内	那珂多度	三野	豊田	鶴足	小豆	阿野ノ内	大内	寒川	三木	山田	香川	北南東	宇和	喜多	西宇和	宇摩	新居	周布	桑村	越知	伊豫	温泉	野間	久米	風早	上浮穴	和氣	幡多	安藝	香美	長岡	土佐	吾川	高岡	美馬	三好	麻植	阿波	名東	名西	勝浦	那賀	海部	板野	日高	西東	牟婁

十六年第二十號布告ヲ以テ高山ニ支廳ヲ置ク

十六年第二十號布告ヲ以テ赤間關ニ支廳ヲ置ク

裁判所位置

判		裁		訴		控		島		廣		所	
松江				山口				廣島					
				赤間關				尾道		高山		御嵩	
今市	松江	萩	赤間關	岩國	山口	尾道	三次	廣島	高山	御嵩			
島根縣		山口縣		廣島縣									
石見	出雲	出雲	長門	周防	長門	周防	備後	備後	安藝	安藝	飛彈		
安濃	神門	大原	赤間關區	熊毛	美禰	都濃	沼隈	御調	高田	山縣	全國三郡	加茂	惠那
	出雲	能義	厚狹	大島	佐波	吉敷	安那	甲奴	三上	高宮	安藝	土岐	惠那
	橋	秋鹿	豐浦	玖珂			神石	世羅	三次	加茂	佐伯		
	飯石	島根						深津	惠蘇	豐田			
		仁多						品沼					

七百六十五

審

判		裁		訴		控		屋		古		名	
岐阜				安濃津				名古屋					
				山田				岡崎					
大垣	岐阜	山田	上野	四日市	安濃津	豐橋	岡崎	一宮	熱田	名古屋			
岐阜縣		三重縣		愛知縣									
美濃	伊勢	伊賀	伊勢	三河	尾張								
本巢	厚見	桑名	河曲	八名	額田	丹羽	知多	名古屋區	海西	愛知	內	東	春日井
席田	武儀	員部	鈴鹿	北設樂	碧海	葉栗	愛知	西	愛知	內	東	春日井	海東
安八	郡上	朝明	奄藝	南設樂	幡豆	中島	愛知	西	愛知	內	東	春日井	海東
池田	多藝	三重	安濃	寶飯	西加茂		愛知	東	愛知	內	東	春日井	海東
大野	不破		飯高	渥美			愛知	東	愛知	內	東	春日井	海東

七百六十四

十九年勅令第四十五號ヲ以テ若松治安裁判所管轄ノ田治安裁判所管轄ニ改メ

十七年第二十七號布告ヲ以テ越岡ニ治安裁判所ヲ

十八年第三十二號布告ヲ以テ福岡ニ治安裁判所ヲ

十六年第二十號布告ヲ以テ大曲ニ治安裁判所ヲ置キ大町ニ治安裁判所ヲ置キ大曲及ヒ大曲治安裁判所管轄郡名ヲ改メ

十六年第二十號布告ヲ以テ大曲ニ治安裁判所ヲ置キ大曲及ヒ大曲治安裁判所管轄郡名ヲ改メ

裁判所位置

館					函					所				
弘前					秋田					秋田				
八戸										大曲				
八戸	五所河原	青森	鯉ヶ澤	弘前	大館町	能代	横手	大曲	本庄	秋田				
青森縣					秋田縣									
陸奥					羽後	羽後								
三戸	北津輕	東津輕	西津輕	南津輕	陸中	北秋田	山本	雄勝	仙北	由利	川邊	南秋田		
		下北			鹿角			平鹿ノ内	平鹿ノ内					
		上北ノ内												

七百七十一

控 訴 裁 判

盛岡		山形					若松		平	
磐井		酒田	米澤			若松		若松	平	
磐井	宮古	鶴岡	酒田	米澤	新庄	山形				
	岩手縣	山形縣								
陸前	陸中	陸中	陸奥	陸中	陸中	羽前	羽後	羽前	岩代	磐城
氣仙	東磐井	北南閉伊	北南九戸	西閉伊	北南岩手	東田川	飽海	最上	南會津	磐前
	膽澤		二戸	紫波	稗貫	西田川			那麻河沼	磐城
	江刺			東和賀					大沼	檜葉
									安積ノ内	菊田
										標葉

七百七十一

(別冊略之)

○囚人護送手續明治十五年二月第十號達

明治六年^{十一月十一}第三百九拾壹號并同十年^{七月}第四拾九號ヲ以テ囚人護送規則及ヒ遞傳方相達置候處今般更ニ別冊ノ通囚人護送遞傳方改正シ本年七月一日ヨリ施行候條從前達中矛盾ノ嫌ハ同日限廢止ス此旨相達候事

(別冊)

囚人護送手續

第一條 甲廳ヨリ乙廳又ハ集治監ヘ送移スル囚人ハ囚籍及ヒ處刑宣告書所持ノ物品ヲ併セ沿道警察本分署ニ於テ遞傳護送スヘシ

但ニ府縣管内本支監獄ノ間ニ護送スル囚人モ其距離拾里以外ニ至ルモノハ本文ニ準スルヲ得

第二條 新タニ就捕セシ犯罪人及ヒ諸令狀ニ據リ引致スル刑事被告人又ハ脫走ノ軍人軍屬ノ遞傳護送ヲ要スル者モ前條ノ手續ニ準スヘシ

但入監後糾問等ノ爲メ所在ノ法衙ニ往復スルハ本條ノ限ニ在ラス

第三條 第一條第二條ノ護送ニ付スル囚人ノ員數及ヒ發出日時ハ其當該官吏ヨリ前以テ沿道警察本分署ヘ遞報スヘシ

第四條 護送囚人ノ數ハ一行拾名以下トス護送警吏及ヒ繩取ノ人員ハ適宜タルヘシ

但便利海路ニヨルトキハ適宜囚人ヲ増加スルヲ得

第五條 遞傳護送ハ日出ヨリ日没マテヲ限トス

第六條 警察本分署ニ於テハ護送囚人ノ郷貫氏名刑名又ハ犯罪見込書ノ要領及ヒ着發日時ヲ記載シ置クヘシ

第七條 護送ノ囚人ハ沿道警察本分署ニ宿セシムヘシ若シ支障

アルトキハ該地戸長ニ照會シ宿所ヲ定メ適宜取締ヲナスヘシ
 第八條 護送途中囚人病發スルトキハ沿道警察本分署ニ付シ治
 療スヘシ若シ死去スルトキハ該地戸長ニ埋葬ヲ囑シ引取人ア
ニ下醫師ニ死去證書ヲ作ラシメ戸長及ヒ護送警吏連印シ書類
 物品ヲ併セ送達スヘキ衙署ニ遞付シ仍ホ發出衙署ニ報知スヘ
 シ

第九條 護送途中囚人逃亡スルトキハ先ツ緝捕方ヲ最寄警察本
 分署ニ報告シ仍ホ發出衙署及ヒ送達スヘキ衙署へ報告スヘシ
 但第八條及ヒ本文ノ手續ヲ爲スタメ他囚護送ヲ遲緩ス可ラ
 ス若シ速ニ手續ヲ了シ難キ場合ハ最寄警察本分署ノ助力ヲ
 請フコトヲ得

第十條 遞傳護送スル警察官吏ノ旅費ハ都テ沿道地方ノ警察費
 ヲ以テ支辨スヘシ
 但繩取ノ雇給ハ第十一條第十二條ノ區別ニ依リ囚人ニ屬ス

十四年第十七號布告第八
 五類ニ載ス參看

ル費用中ニテ支辨スヘシ

第十一條 第一條ニ掲クル囚徒ニ屬スル護送中ノ費用ハ明治十
 四年第拾七號布告ニ依リ區分シ集治監ニ送ルトキハ沿道府縣
 ノ仕拂ニ立テ其他ハ出發府縣ノ監獄費ヨリ支拂フヘシ

第十二條 第二條ニ掲クル各犯人ニ屬スル護送中ノ費用ハ沿道
 地方警察費ヲ以テ支辨スヘシ

第十三條 護送囚人死歿シ引取人ナキモ其所持金錢物品埋葬費ニ足ル
モアル者及陸軍隊付下士卒海軍下士卒ノ埋葬費ハ第十一條第
 十二條支辨ノ限ニアラス尤モ其費額ハ都テ拾圓以內タルヘシ
 但下士卒ノ分ハ追テ陸軍省海軍省ヨリ各自ニ拂戻スヘシ(十五年十

二月第六十八號達
ヲ以テ本條改正)

第十四條 遞傳ニ係ル囚人犯罪人ノ賄費額ハ警察本分署ニ於テ
 ハ都テ拘留人ノ例ニ依ルヘシ他ニ宿泊セシムルトキハ一宿ニ
 賄臥具點燈手數料ヲ合セテ金貳拾五錢以下一晝食金七錢以下

藥價診察料等ハ實費支辨スヘシ

○沖繩縣人徒流刑ニ處セラレタルモノノ發配及取扱方第十六年一月
第四號達

沖繩縣人民ニ限り徒刑流刑ニ處セラレタルモノハ同縣下八重山島ニ發配ズルヲ得ヘシ此旨相達候事

但囚人取扱方ハ舊慣ニ因リ「沖繩縣令」之ヲ管理スヘシ

○十二類 警察

集會條例明治十三年四月
第十二號布告

集會條例別冊ノ通被定候條此旨布告候事

(別冊)

集會條例

第一條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ公衆ヲ集ムル者ハ開會二日前ニ講談論議ノ事項講談論議スル人ノ姓名住所會同ノ場所年月日ヲ詳記シ其會主又ハ會長幹事等ヨリ管轄警察署ニ届出テ其認可ヲ受クヘシ

第二條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ結社何等ノ名義ヲ以テスルモ其實政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ結合スルモノヲ併稱スル者ハ結社前其社名社則會場及ヒ社員名簿ヲ管轄警察署ニ届出テ其認可ヲ受クヘシ其社則ヲ改正シ及ヒ社員ノ出入アリタルトキモ同様タルヘシ此届出ヲ爲スニ當リ

警察署ヨリ尋問スルコトアレハ社中ノ事ハ何事タリトモ之レニ答辯スヘシ(十五年第廿七號 布告ヲ以テ改正)

前項ノ結社及其他ノ結社ニ於テ政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メニ集會ヲ爲サントスルトキハ仍ホ第一條ノ手續ヲ爲スヘシ(十五年第廿七號 布告ヲ以テ本項追加)

第三條 講談論議ノ事項講談論議スル人員會場及ヒ會日ノ定規アル者ハ其定規ヲ初會ノ二日前ニ警察署ニ届出認可ヲ受クルトキハ爾後ノ例會ハ届出ニ及ハスト雖モ之ヲ變更スルトキハ第一條ノ手續ヲ爲スヘシ

第四條 管轄警察署ハ第一條第二條第三條ノ届出ニ於テ治安ニ妨害アリト認ムルトキハ之ヲ認可セス又ハ認可スルノ後ト雖モ之ヲ取消スコトアルヘシ(十五年第廿七號 布告ヲ以テ改正)

第五條 警察署ヨリハ正服ヲ着シタル警察官ヲ會場ニ派遣シ其認可ノ證ヲ検査シ會場ヲ監視セシムルコトアルヘシ

警察官會場ニ入ルトキハ其求ムル所ノ席ヲ供シ且其尋問アルトキハ結社集會ニ關スル事ハ何事タリトモ之ニ答辯スヘシ(十五年第廿七號 布告ヲ以テ本項追加)

第六條 派出ノ警察官ハ認可ノ證ヲ開示セサルトキ講談論議ノ届書ニ掲ケサル事項ニ亘ルトキ又ハ人ヲ罪戾ニ教唆誘導スルノ意ヲ含ミ又ハ公衆ノ安寧ニ妨害アリト認ムルトキ及ヒ集會ニ臨ムヲ得サル者ニ退去ヲ命シテ之ニ從ハサルトキハ全會ヲ解散セシムヘシ(十五年第廿七號 布告ヲ以テ追加)

但(十五年第廿七號 布告ヲ以テ追加) 前項ノ場合ニ於テ解散ヲ命シタルトキ地方長官(東京ハ警視長官)ハ其情狀ニ依リ演說者ニ對シ一箇年以内管轄内ニ於テ公然政治ヲ講談論議スルヲ禁止シ其結社ニ係ルモノハ仍ホ之ヲ解散セシムルコトヲ得「内務卿」ハ其情狀ニ依リ更ニ其演說者ニ對シ一箇年以内全國内ニ於テ公然政治ヲ講談論議スルヲ禁止スルコトヲ得(十五年第廿七號 布告ヲ以テ本項追加)

第七條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル集會ニ陸海軍人常備豫備
後備ノ名籍ニ在ル者警察官官立公立私立學校ノ教員生徒農業工藝
ノ見習生ハ之ニ臨會シ又ハ其社ニ加入スルコトヲ得ス

第八條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ其旨趣ヲ廣告シ又ハ
委員若クハ文書ヲ發シテ公衆ヲ誘導シ又ハ支社ヲ置キ若クハ他ノ
社ト連結通信スルコトヲ得ス(十五年第廿七號
布告ヲ以テ改正)

第九條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ屋外ニ於テ公衆ノ集
會ヲ催スコトヲ得ス

第十條 第一條ノ認可ヲ受ケスシテ集會ヲ催スモノ會主ハ貳圓以上
貳拾圓以下ノ罰金若クハ十一日以上三月以下ノ禁獄ニ處シ其會席
ヲ貸シタル者並ニ會長幹事及ヒ其講談論議者ハ各貳圓以上貳拾圓
以下ノ罰金ニ處シ第二條ノ規程ヲ犯シタル者モ亦本條ニ依ル

第十一條 第二條第一項ノ規程ニ背キテ届出ヲ爲サス又ハ尋問スル
所ノ事項ヲ開答セサルトキ社長ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處

十四年第七十二號布告別
例附錄方參君以下條之第
十二類ニ載ス

シ詐欺ノ届出ヲ爲シ或ハ尋問ヲ得テ偽答スルトキ社長ハ右罰金ノ
外尙ホ十一日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處ス(十五年第廿七號
布告ヲ以テ改正)

第十二條 第五條ノ規程ニ背キ派出所警察官ノ臨席ヲ肯セス又ハ其求
ムル所ノ席ヲ供セサルトキ會主會長及社長幹事ハ各五圓以上五拾
圓以下ノ罰金若クハ一年以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ警察官ノ尋
問ニ答ヘス又ハ偽答スル者ハ同罪ニ處ス再犯ニ當ル者ハ拾圓以上
百圓以下ノ罰金若クハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス(十五年第
廿七號布
告ヲ以
テ改正)

第十三條 派出所警察官ヨリ解散ヲ命シタル後尙退散セサル者ハ貳
圓以上貳拾圓以下ノ罰金若クハ十一日以上六月以下ノ禁獄ニ處ス
第十四條 第七條ノ制限ヲ犯シタルトキ會主會長及ヒ社長幹事ハ貳
圓以上貳拾圓以下ノ罰金若クハ十一日以上三月以下ノ禁獄ニ處シ
其他情狀ノ重キモノアレハ其社ヲ解散セシム其制限ヲ犯シテ入社
シ又ハ臨會スル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條 第八條ノ制限ヲ犯シタルトキ會主會長及ヒ社長幹事ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金若クハ一月以上一年以下ノ禁獄ニ處シ其社ヲ解散セシム此事ニ關スル者モ亦同罪ニ處シ脅迫スル者及ヒ罪再犯ニ當ル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金若クハ二月以上二年以下ノ禁獄ニ處シ其社長幹事ハ一年以上五年以下結社又ハ入社ヲ禁ス

第十六條 學術會其他何等ノ名義ヲ以テスルニ拘ハラヌ多衆集會スル者警察官ニ於テ治安ヲ保持スルニ必要ナリト認ルトキハ之ニ監臨スルコトヲ得若シ其監臨ヲ肯セサルトキハ第十二條ニ依テ處分ス(十五年第廿七號 布告ヲ以テ改正)

學術會ニシテ政治ニ關スル事項ヲ講談論議スルコトアルトキハ第十條ニ依テ處分ス(十五年第廿七號 布告ヲ以テ本項追加)

第十七條 前條ノ場合ニ於テ治安ヲ妨害スト認ムルトキハ第六條ニ依テ處分ス(十五年第廿七號 布告ヲ以テ追加)

第十八條 凡ソ結社若クハ集會スル者「内務卿」ニ於テ治安ニ妨害アリト認ムルトキハ之ヲ禁止スルコトヲ得若シ禁止ノ命ニ從ハヌ又ハ仍ホ秘密ニ結社若クハ集會スル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金若クハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス(十五年第廿七號 布告ヲ以テ追加)

第十九條 成法ニ制定スル所ノ集會ハ此限ニ在ラス(十五年第廿七號 布告ヲ以テ追加)

○官吏ノ講談演說ヲ許サス十二年五月 號外達
凡ソ官吏タル者其職務ニ係ル外政談講學ヲ目的トシテ公衆ヲ聚メ講談演說ノ席ヲ開ク等不都合ノ儀ニ付右等ノ儀無之様各長官ニ於テ取締可致此旨相達候事

○富興行ヲ禁ス明治元年十二月 布告

富興行ノ儀ハ兼テ御禁制ニ有之處近年諸國ニ於テ金錢融通ヲ名トシ或ハ社寺再建等ニ托シ興行致候向モ有之趣元來淺季ノ弊風僥倖ノ利

ヲ以テ民心ヲ誘惑スルヨリ自然農工商共其職業ヲ惰リ往々是カ爲メニ家産ヲ破候者モ不少哉ニ相聞以ノ外ノ事ニ候斯御一新ノ折柄右様ノ所業殊ニ御趣意ニ相戻リ候儀ニ付更ニ嚴禁被仰出候事

○富籤買賣者等處分 明治十五年五月 第廿五號布告

明治元年十二月二十三日ノ布告ニ原ツキ富籤買賣ノ牙保幫助ヲ爲シ及富籤ヲ購買シタル者處分方左ノ通制定ス

第一條 凡富籤買賣ノ牙保若クハ幫助ヲ爲シタル者ハ一月以上

六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二條 凡富籤ヲ購買シタル者ハ其價ヲ拂ヒタルト未タ拂ハサルトナ問ハス二十日以上四月以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四

拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス他人ノ名ヲ借リテ購買シタル者及他人ヨリ讓リ受ケタル者亦同シ

第三條 第一條第二條ノ罪ヲ再犯シタル者ハ同條ニ定メタル刑

期金額ノ二倍ニ處ス但初犯ニ科シタル刑期金額ニ下ルヲ得ス

第四條 富籤ニ關スル犯罪ヲ告發シタル者ニハ其徵スル所ノ罰金ノ半額ヲ給與ス

第五條 富籤ニ關スル罪ヲ犯シ事未タ發覺セサル前ニ於テ官ニ

自首シタル者ハ其罪ヲ免ス

再犯ニ係ル者ハ自首スト雖モ其罪ヲ免セス

第六條 富籤ニ關スル犯罪ニ因テ得タル財物ハ之ヲ沒收ス

自首ニ因テ罪ヲ免シタル者ト雖モ財物沒收ハ仍ホ前項ニ依ル

○賭博犯處分規則 明治十七年一月 第壹號布告

賭博犯ノ儀ハ刑法第二百六十條第二百六十一條ニ明文有之候ヘトモ

當分ノ内行政警察ノ處分ニ屬シ東京ハ警視廳其他ハ地方官ヲシテ別紙賭博犯處分規則ニ依リ取締懲罰ノ事ヲ行ハシム

(別紙)

賭博犯處分規則

第一條 賭博ヲ爲シタル者ハ一月以上四年以下ノ懲罰及ヒ五圓以上貳百圓以下ノ過料ニ處ス家屋ヲ貸與シ及ヒ見張ヲ爲シ其他總テ幫助ヲ爲シタル者亦同シ

博徒ニシテ黨類ヲ招結シ又ハ賭場ヲ開張シ又ハ兇器ヲ携帯シ又ハ四隣ニ横行スル者ハ一年以上十年以下ノ懲罰及ヒ五拾圓以上五百圓以下ノ過料ニ處ス其招結ニ應シタル者ハ賭博ヲ爲サスト雖モ前項ニ依テ處分ス

第二條 賭具及賭場ニ現存スル財物ハ何人ノ所有ヲ問ハス之ヲ沒入ス

第三條 賭博犯ヲ取押フルニハ何人ノ家宅ヲ問ハス何時タリトモ之

ニ立入ルコトヲ得但警察官巡查ハ其證票ヲ携帯スヘシ

第四條 此規則ヲ施行スルノ方法細則ハ警視總監府知事東京府「縣令」ニ於テ便宜之ヲ定メ「内務卿」ノ許可ヲ得テ施行スルコトヲ得

九年內務省乙第九號達ヲ以テ密賣淫ノ過料ヲ三拾圓以內トシ懲戒ヲ六ヶ月以內トス

○ 密賣淫取締懲罰 明治十四年十二月第六拾四號布告

密賣淫ノ儀ハ刑法第四百二十五條第十項ニ明文有之候ヘトモ當分ノ内其取締懲罰ハ從前ノ通東京ハ警視廳其他ハ地方官へ委任ス

○ 石油取締規則 明治十六年二月第六號布告

沿革略記 明治十四年八月第四十號布告ヲ以テ石油取締規則ヲ制定メ○十六年第六號布告ヲ以テ改定ス是レ現行法

明治十四年八月第四十號及同年九月第五十號布告石油取締規則左ノ通
改定ス

但施行日限ノ儀ハ明治十五年八月第四十四號布告ノ通りタルヘシ(十年第十號布告ヲ以テ施行日限ノ儀ハ追テ布告ナスマテ延期)

第一條 石油ヲ分テ二種トシ閉塞發焔試驗法ヲ用ヒ攝氏驗温器三十度(華氏八十六度)以上ノ温度ニ達セザレハ發焔セサルモノヲ第一種トシ三十度ニ達セスシテ發焔スルモノヲ第二種トス

第二條 點燈用ニ供スルハ第一種ノ石油ニ限り第二種ノ石油ハ醫療製藥調劑及ヒ物理學化學工藝上ニ於テ業用ニ供スルノ外之ヲ用フルヲ許サス

第三條 石油營業者ヲ分テ墾業者精製者問屋及ヒ小賣商ノ四類トス其營業者ハ都テ管轄廳(東京府下ノ警視廳)ノ許可ヲ受クヘシ但二類以上兼業スルトキハ別ニ其許可ヲ受クヘシ

第四條 石油ノ種類ハ「内務卿」ノ必要トスル地方ニ於テ検査員ヲシテ之ヲ検査セシムヘシ

石油ハ検査済ノ證アルモノニアラサレハ之ヲ販賣スルヲ許サス但墾業者ヨリ精製者ニ販賣スルハ此限ニアテス

第五條 検査済ノ石油ヲ家屋内ニ貯藏スルヲ得ルハ第一種ノ石油五石以内第二種ノ石油五斗以内トシ容器ハ漏出ノ虞ナキ不燃質物ニ限ルヘシ

第六條 石油營業者前條制限外ノ石油井ニ検査未済ノ石油ヲ貯藏スル場所建物及ヒ精製所ノ構造方ハ都テ管轄廳(東京府下ノ警視廳)ノ認可ヲ受クヘシ

第七條 第二種ノ石油ハ精製者問屋ヨリ直ニ需用者ニ販賣シ小賣商ハ第一種ノ石油ニ限り販賣スルヲ得ルモノトス

第八條 第二種ノ石油ヲ販賣スル者ハ購買者ヨリ其數量及ヒ需用ノ趣意年月日住所氏名ヲ詳記シタル書付ヲ取り置キ一年間保存スヘシ

シ但販賣時限ハ日出ヨリ日没マテトス

第九條 石油ヲ運搬スルトキハ其石油タルコトヲ表記スヘシ但其積卸ニ必用ナル時間ノ外物揚場又ハ路傍ニ置クヘカラス

第十條 此規則ヲ犯シタル者ハ貳圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ處ス

○銃砲取締規則 明治五年正月 第二十八號布告

銃砲取締規則別紙之通被定候條來ル四月ヨリ規則之通可相守事

(別紙)

銃砲取締規則

第一則 大小銃「并彈藥」類商賣ノ儀ハ府縣共定員商賣ノ外取扱致間敷右定員ノ商賣ハ其地方管廳ニ於テ精選ノ上免許狀可差遣事
但東京大坂ノ儀ハ「武庫司」ニ於テ管轄スヘキ事

十七年第三十一號布告
以テ火藥取締規則ヲ制定ス故ニ本則中彈藥ニ關スル件ハ總テ消滅ス

八年第一百十一號達ヲ以テ
銃砲取締ヲ内務省管理ニ屬ス

八年第十二號布告ヲ以テ
陸軍省中武庫司ヲ廢ス

免許商賣ノ定員

- 一 府下 各五員
- 一 縣下 各二員
- 一 鎮臺本分營下 各一員
- 但府縣廳下開港場等ニアルハ別ニ設ケス
- 一 開港場 各五員

右免許差遣候商賣ノ姓名住所等東京「武庫司」ヘ届クヘキ事

第二則 免許商人タリトモ軍用ノ銃砲「彈藥」類ヲ竊ニ賣買不相成賣渡候節ハ買主ヨリ官ノ免手形ヲ受取其員數ヲ照シ賣渡可申又買入ノ節ハ其管廳ヘ願出免手形ヲ受其員數ヲ以テ買取可申事
但東京大坂ノ儀ハ「武庫司」ヘ願出事

免許商人ハ陸海軍准士官以上ノ武官ヨリ其所有ノ軍用銃「并ニ其彈藥」類ヲ買入レントスルトキハ買入願書ニ其賣主ノ連署ヲ爲サシムヘキ事(十三年第八號布告)以テ本項追加

八年內務省乙第百四十四號達ヲ以テ管轄ヨリノ届出テ前後半年分チ區別シ毎年一月七月兩度トナス

第三則 免許ノ商人其實買ノ銃砲「彈藥」類ハ多少ヲ論セス買取賣渡共其主人ノ姓名其物品ノ員數等明細附記シ軍用ノ物ハ免手形相添毎月其管廳へ可差出其廳ヨリ毎月十日ヲ限リ管轄「鎮臺」へ差送可申事

但「諸鎮臺」ヨリ毎歲正月七月兩度半ケ年明細帳ヲ以テ東京「武庫司」へ差送可申尤東京大坂ノ儀ハ「武庫司」ニ於テ取締可致事

第四則 「彈藥」ノ儀ハ假令些少ノ品タリトモ唯便利ノミヲ計リ勝手ノ場所へ差置間救兼テ其地方管廳へ願出差圖ヲ受相圍可申事

但東京大坂ノ儀ハ「武庫司」へ願出ヘキ事

第五則 華族ヨリ平民ニ至ル迄免許銃類ヲ除クノ外軍用ノ銃砲并彈藥「類」ホストールニ至ル迄私ニ貯蓄不相成就テハ是迄銘々所持致居候軍用銃砲ハ一々其管廳ニ持出東京大坂ハ武庫司へ持出別紙銃砲改刻印式ノ通り番號官印ヲ受可申他人へ譲リ與ヘ候節ハ第二則ノ手續ニ從フヘシ

「但彈藥買入致シ度者モ亦二則ノ通りタルヘシ」

銃砲改刻印ノ式

千支何番 「武庫司」或ハ何府縣

右所持ノ人名番號等逐一書記シ置管轄「鎮臺」へ届出「鎮臺」ヨリ東京「武庫司」へ差送リ可申事

免許ノ銃類

一和銃四文目八分玉以下

一各國諸獵銃

但西洋獵銃ノ儀ハ其玉目稍大ナレトモ霰彈ヲ用ユルモノハ之ヲ許ス

右獵用銃所持ノ者ハ其銃名員數等巨細附記シ其管廳へ届出其廳ヨリ東京「武庫司」へ差出可申東京大坂ハ所持ノ者ヨリ直ニ武庫司へ届出ヘシ萬一軍用獵用銃ノ差別難相辨者官へ尋出候得ハ検査ノ上免許ノ證印ヲ据ヘ可相渡事

第六則 (六年第二十五號布告鳥獸獵
免許取締規則ニ本則ヲ引換)

第七則 銃砲「彈藥」下々ニ於テ猥リニ製造不相成候尤モ新ニ奇巧便
利ヲ發明シ爲試製作致度者ハ其管廳へ相願管轄「鎮臺」へ届出免許
ヲ可受事

但製作其宜キニ適ヒ最モ便利ナル者ハ「鎮臺」ヨリ「武庫司」へ差送
リ検査ヲ遂ケ採用可相成分ハ西洋免許ノ法ニ倣ヒ何分ノ御沙汰
可有之事

是迄銃砲「并彈藥」類賣買致來候者ハ現今所持ノ物品員數等無遺漏書
記シ管轄廳へ爲差出其廳ヨリ東京「武庫司」へ可差出事
但東京大坂ノ儀ハ賣買ノ者ヨリ直ニ「武庫司」へ可届出事
右之通ニ候事

○銃砲取締規則違犯者處分 明治五年九月
第二百八拾二號布告
銃砲取締ノ儀ニ付別紙ノ通被相定候條此旨相達候事

(別紙)

一 銃砲取締規則ニ違銃砲「彈藥」類ヲ竊ニ所持シ且致取扱候者有
之節ハ各地方ニ於テ其品取上ケ更ニ五十錢ノ過料可申付候事
但取締向ニ關係無之者見當リ訴出候ニ於テハ犯人過料ノ半
金ヲ可被下候事

一 免許ヲ得スシテ銃砲「彈藥」ヲ製造スル者ハ其品取上ケ更ニ三
圓以内ノ過料可申付事 (七年第百三拾二號
布告ヲ以テ追加)
但書同前

右取上候品東京大坂ハ「武庫司」其他ハ所管ノ「鎮臺」へ可差出事
○銃砲外國人ヨリ買入手續 明治五年六月
第百八十五號布告
銃砲取締規則中第二則開港開市場ニ限リ自今左ノ通可取扱事
一 開港開市場ニ於テ免許商人ノ輩銃砲「并彈藥」類外國人ヨリ買
入度儀願出候節ハ其管轄廳ニ於テ嚴重取調へ一旦管廳へ買上
然ル後願出ノ商人へ可相渡賣拂ノ節モ同様管廳ニ於テ致取引

可遣事
 但免許商人ヨリハ買入賣渡共其都度々々員數書ヲ以テ開港
 開市場管廳へ願出處置ヲ可受事

○銃砲取締管理ヲ定ム第八年六月十一號達
 今般銃砲彈藥取締ノ儀內務省へ管理被仰付候ニ付テハ追テ相違
 候儀モ可有之候得共差向キ從前規則ノ通相心得取締可致尤右規
 則中是迄陸軍省及ヒ各鎮臺等へ申出候分ハ總テ內務省へ可申出
 其他管理替ニ付抵觸ノケ條ハ廢シ候儀ト可心得此旨相違候事
 ○武官所有ノ軍用銃賣買取規則第十三年三月二十二號達
 陸海軍武官所有ノ軍用銃ハ明治五年正月二十八號布告ニ依リ管
 轄廳ノ検査番號ヲ受來候處自今准士官以上ノ武官ハ左ノ規則ニ
 據ルヘシ此旨相違候事

武官所有ノ軍用銃賣買取規則

第一條 陸海軍省ニ於テハ武官所有ノ軍用銃并其彈藥類買入ノ
 節交付スヘキ買入免狀ヲ定メ置キ豫メ其印影等照會ノヲ使
 府縣廳東京ハ警視廳へ通知ス可シ

第二條 武官軍用銃並其彈藥類ヲ買入ル、時ハ前款ノ免狀ヲ受
 取之ヲ該地ノ免許商人ニ交付シテ其買入ヲ爲スヘシ

十四年第一號達ヲ以テ警
 視廳ヲ置ク以下倣之

第三條 武官轉任又ハ免官スル時ハ其奉職中所有セシ銃器ハ其
 銃名按印アラフヲ記載シ使府縣廳東京ハ警視廳へ届出常則ニ從ヒ其
 取締ヲ受クヘシ

第四條 武官奉職中所有ノ軍用銃及ヒ其彈藥類ヲ人民へ賣渡シ
 ントスル時ハ買受人ヨリ其使府縣廳東京ハ警視廳へ差出スヘキ願
 書へ連署スヘシ

○銃砲類外國人ト賣買出願取扱方第七年七月十九號達

銃砲並彈藥類外國人ヨリ買入ノ儀ニ付明治五年六月第百八十五
 號布告ノ趣モ候處自今銃砲并彈藥類外國人ト賣買ノ儀免許商人
 ヨリ願出候節ハ其管廳ヨリ陸軍省へ申請ノ上可取計此旨相違候
 事

○外國人へ獵用銃器類賣渡手續第十一年五月十七號達

銃砲彈藥賣買免許商人外國人ト銃砲彈藥類賣買願出候節取扱方
 ノ儀ハ明治七年七月第九十九號八年六月第百拾壹號達ノ趣有之候處
 今般第拾壹號布告ノ趣モ有之ニ付自今銃獵免狀付與有之外國人
 へ獵用ノ銃器彈藥類賣渡シ候儀ハ其廳限リ聞届候儀ト可心得此
 旨相違候事

但免許商人ヨリハ其姓名數量等ヲ記載シ其時々爲届出候様可
 取計事

○火藥取締規則 明治十七年十二月 第三十一號布告

沿革略記 明治四年十月兵部省達ヲ以テ火藥運送規則ヲ定ム○
五年正月第二十八號布告ヲ以テ銃砲取締規則ヲ定メ
彈藥類賣買モ該則ニ因テ取締ラレム○同年六月第百八十五
號布告ヲ以テ彈藥外國人ヨリ買入手續ヲ定ム○十一年五月第
十一號布告ヲ以テ銃獵免許ノ者等ト彈藥雷管賣買手續ヲ定
ム○十四年六月內務省乙第廿九號達ヲ以テ爆發物ダイナマ
イトノ類モ銃砲取締規則及火藥運搬規則ニ據リ取扱ハシム
○十七年十二月第三十一號布告ヲ以テ前令ヲ廢シ火藥取締
規則ヲ制定ス是レ現行法ナリ

火藥取締規則別冊ノ通制定ス

但從前ノ成規中此規則ニ矛盾スルモノハ總テ廢止ス

(別冊)

火藥取締規則

第一章 總則

第一條 凡火藥劇發火藥棉火藥、ナイトログリセリン、ダイナマイト、雷汞、其他劇發質ノ物品ハ人民ニ

於テ製造スルコトヲ禁ス但烟火マツチノ類ハ此限ニ在ラス

第二條 火藥類火藥、劇發火藥ノ賣買營業ヲ爲サントスル者ハ管轄廳東京府、警視廳

ニ願出免許鑑札ヲ受ク可シ但營業者ハ一管内ニ十五人以內トス

第三條 火藥類ハ營業者ニ限り陸軍海軍兩省ヨリ其貯藏品ヲ拂下ク可キモノトス

第四條 管轄廳東京府、警視廳ニ於テ火藥類ノ検査ヲ必要ト認ムル時ハ營業者タルト否トヲ問ハス警察官ヲシテ之ヲ検査セシムルコトアル可シ

第五條 戰時若クハ事變ニ際シテハ「陸軍卿海軍卿」ハ火藥類ノ拂下ケヲ停止シ「內務卿」ハ其實買運搬ヲ停止スルコトアル可シ

第六條 火藥類ハ官許ヲ得ルニ非サレハ日出前日没後ニ於テ賣買運搬其他荷造等ヲ爲ス可カラズ

第二章 賣買

第七條 營業者ハ毎月買受ケタル火藥類ノ種類數量ヲ記シ證書アレハ之ヲ添翌月十日迄ニ所轄警察署ニ届出可シ

第八條 營業者ニ非スシテ所有ノ火藥類ヲ賣ラントスル者ハ營業者ニ之ヲ賣渡ス可シ營業者ハ其賣渡證書ヲ取り置ク可シ

第九條 營業者ハ銃砲用又ハ坑業土工烟火其他職業用ニ限り火藥類ヲ賣渡ス可キモノトス但十六歳未滿若クハ白痴風癲ノ者ニハ之ヲ賣渡スコトヲ許サス

第十條 火藥類ヲ買受ントスル時銃獵若クハ烟花製造ノ免許ヲ得タル者ハ其免狀ヲ營業者ニ示シ銃砲用ノ爲ニスル者ハ所轄警察署ノ許可證ヲ受ケ之ヲ營業者ニ渡シ陸海軍軍人ノ射的用ニ供スル者ハ其省ノ許可證ヲ受ケ之ヲ營業者ニ渡シ坑業土工其他職業用ニ供スル者ハ其旨趣及種類數量并使用ノ場所ヲ記シ所轄警察署ノ許可證ヲ受ケ之ヲ營業者ニ渡ス可シ但一回ニ左ノ數量ヲ超ルコトヲ許サス(十九年勅令第六十七號ヲ以テ本條并各項トモ改正)

小銃用

火藥 三百目

雷管 五百箇

船舶設備銃砲用

大砲一門ニ付 火藥 五十發分

導火管類 七十箇
小銃一挺ニ付 火藥 百發分 雷管 百五十箇

烟火製造用

火藥 五貫目

坑業土工其他職業用

火藥 二百貫目
劇發火藥 三十貫目

坑業土工用ノ爲メ特ニ多量ノ火藥類ヲ要スル者ハ其旨趣數量并使用ノ場所等ヲ詳記シタル書面ヲ以テ内務大臣ノ特許ヲ受クヘシ此場合ニ於テハ直ニ陸海軍兩省ヨリ火藥類ノ拂下ヲ受クルコトヲ得

第十一條 營業者ハ買受人ノ免狀ヲ檢シ若クハ許可證ヲ受取り火藥類ヲ賣渡ス可シ但第十條ノ數量ヲ超ルコトヲ許サス

第十二條 營業者ハ毎月火藥類買受人ノ住所氏名及其賣渡シタル種類數量年月日ヲ記シ證書アレハ之ヲ添翌月十日迄ニ所轄警察署ニ届出可シ

第二章 貯藏

第十三條 火藥類ハ火藥二百目雷管導火管類五百個迄ハ安全ナル場所ニ之ヲ貯藏スルコトヲ得

營業者ハ前項制限ノ外火藥拾貫目劇發火藥壹貫目雷管導火管類壹萬個迄烟火製造人ハ火藥五貫目劇發火藥五百目迄ハ管轄廳東京府ハ警視廳ノ許可ヲ受ケ倉庫ニ之ヲ貯藏スルコトヲ得其數量ヲ超ル時ハ火藥庫ノ外之ヲ貯藏スルコトヲ許サス火藥五百貫目以上劇發火藥五拾貫目以上ハ火藥庫ト雖モ之ヲ貯藏スルコトヲ許サス

第十四條 火藥類ヲ一庫内ニ貯藏スル時ハ其種類毎ニ不燃質物ヲ以テ之ヲ區畫ス可シ

第十五條 火藥庫ヲ建設セントスル者ハ其位置并ニ建設ノ方法書及近傍ノ地圖ヲ添へ管轄廳東京府ハ警視廳ニ願出許可ヲ受ク可シ

第十六條 火藥庫ハ皇居離宮ノ區域ヲ距ル十町以内ノ地ニ建設スルコトヲ許サス

第十七條 火藥庫ハ皇陵社寺公園家屋火ヲ取扱フ場所宅地國道縣道

鐵道電信柱汽船ノ通スヘキ河湖及他ノ火藥庫境界トノ中間ニ五十四間以上ノ距離ヲ有ツ可シ

第十八條 火藥庫ハ土藏又ハ煉瓦造ニシテ家根ハ輕量ノ不燃質物ヲ用ヒ内部ニハ鐵釘石瓦ヲ露ハサス窓ニハ透明ノ硝子ヲ用フ可カラズ又避雷針ヲ設ケ庫外ノ周圍ニ二間以上ヲ隔テ、高サ六尺以上ノ土堤ヲ築キ其入口ニ火藥庫ト書シタル標木曲尺六尺以上コンテナ五寸角以上ノモノ建ツ可シ

第十九條 火藥庫ヨリ十四間以内ノ地ニ材木草秣其他燃質物ヲ蓄積ス可カラズ又五十間以内ニ於テ火ヲ取扱フ建造物ヲ設ケ若クハ瓦斯ノ傳送管ヲ施シ若クハ發火質ノ物品ヲ蓄積ス可カラズ

第二十條 坑業土工其他職業用ニ供スル火藥類ノ爲メ其事業中假貯藏所ヲ設ケントスル者ハ第十七條ニ掲ケタル距離ヲ二倍シ第十五條ニ據リ管轄廳東京府ハ警視廳ニ願出許可ヲ受ク可シ但第十條制限以上ノ火藥類ヲ貯藏セントスル者ニ對シテハ管轄廳ニ於テ特ニ其距離

ヲ指定スルコトアル可シ(十九年勅令第六十
七號ヲ以改正)

第二十一條 烟火製造所ハ家屋若クハ火ヲ取扱フ場所ヨリ十間以上ノ距離ヲ有ツ可シ又五貫目以上ノ火藥類ヲ置ク可カラズ

第四章 運搬

第二十二條 五貫目以上ノ火藥類ヲ運搬セントスル時ハ其種類數量運搬ノ日時場所及水陸通路ノ名稱ヲ記シ所轄警察署ノ許可證ヲ受ケ之ヲ携帯シ運搬畢ラハ直ニ之ヲ返納ス可シ若シ其警察署管轄外ノ地ニ運搬スル時ハ其地ノ警察署ニ之ヲ納ム可シ

第二十三條 五貫目以上ノ火藥類ヲ運搬スル時ハ鐵釘鐵輪ヲ用ヒサル木製銅製若クハ亞鉛製ノ器ニ入レ其外部ハ筵包若クハ繩卷ト爲シ毛布類ヲ以テ之ヲ覆ヒ赤地ニ火藥ノ二字ヲ白書シタル小旗陸路ニハ曲尺縱二尺横二尺五寸水路ノ小旗ニハ曲尺縱三尺五寸横五尺ヲ建テ護送人ヲ附ス可シ但船積スル時ハ明治六年八月第貳百九十貳號布告危害品船積法ニ從フ可シ

第二十四條 火藥類ヲ運搬スルニハ火氣ニ注意シ休泊ノ時ハ安全ナル場所ヲ撰ヒ看守人ヲ附ス可シ

六年第百九十二號布告
危害品船積法則ハ第三類ニ載ス

第五章 罰則

第二十五條 私ニ火藥類ヲ製造シ若クハ販賣シタル者ハ軍用品ニアラスト雖モ刑法第百五十七條ヲ適用シ私ニ之ヲ所有シタル者ハ刑法第百六十條ヲ適用ス

第二十六條 刑法第百五十八條第百五十九條第百六十一條ハ前條ノ犯罪ニ關シタル者ニモ亦之ヲ適用ス

第二十七條 私ニ火藥庫又ハ假貯藏所ヲ建設シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十八條 第四條ノ検査ヲ拒ミ又ハ第五條ノ停止ヲ犯シテ賣買運搬シ第九條第十條第十一條第十三條第十九條ニ違犯シ又ハ第二十一條ニ違犯シタル者又ハ營業者賣買ヲ除クノ外火藥類ヲ讓受若クハ讓渡シタル者ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス(十九年勅令第六十七號ヲ以テ本條中十五字ヲ削ル)

第二十九條 第六條第七條第八條第十二條第十四條第十八條第二十二條第二十三條第二十四條ニ違犯シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第三十條 營業者此規則ニ違犯シタル時ハ其情狀ニ因リ行政ノ處分ヲ以テ營業ヲ禁止シ又ハ停止スルコトヲ得

附則

一從前免許ヲ得タル火藥製造人ハ來ル明治十八年二月二十八日迄其營業ヲ差許シ又同日迄ニ火藥製造諸器械及火藥類ノ現貯藏數量ヲ記シ管轄廳東京府ハ警視廳ニ願出ルニ於テハ相當ノ代價ヲ以テ之ヲ買上ク可シ

一從前免許ヲ得タル彈藥免許商人ハ來ル明治十八年二月二十八日迄火藥賣買營業ヲ差許シ從前免許ヲ得タル烟火製造所ハ右同日迄其製造ヲ差許ス又從前火藥類ヲ貯藏シタル者ハ來ル明治十八年一月三十一日迄其貯藏ヲ差許ス其日限ヲ過クルトキハ總テ此規則ニ從

フヘシ

○ 古物商取締條例明治十六年十二月第五十號布告

古物商取締條例別冊ノ通制定シ明治十七年二月一日ヨリ施行ス

(別冊)

古物商取締條例

第一條 古物商トハ古道具、古本、古書畫、古着、古銅鐵、瀆金銀ヲ賣買スル營業者ヲ云フ

袋物屋小間物屋鼈甲屋時計屋飾屋泊打屋煙管屋ニシテ其營業ニ屬スル古物ヲ賣買交換スル者及ヒ刀劍商ハ此條例ニ準據スヘシ

第二條 古物商ハ管轄廳東京府ハ警視廳ノ免許ヲ受クヘシ

第三條 古物商物品ヲ賣買シ又ハ交換シタルトキハ警察官ニ於テ其

物品及ヒ賣主讓主ヲ調査スルニ差支ナキ様簿冊ニ記載シ且買主讓受主ヲ詳ニスルコトヲ得タルトキハ之ヲ記載スヘシ

第四條 身元詳ナラサル者ヨリ物品ヲ買取リ又ハ交換スルコトヲ得ス但身元詳ナル者其證人タルトキ又ハ警察官若クハ巡查ノ認可ヲ受ケタルトキハ此限ニアラス

第五條 十五年未滿ノ者白痴風癪者及ヒ雇人雇主ノ家ヨリ物品ヲ買取リ又ハ交換スルコトヲ得ス但父母後見人雇主又ハ身元詳ナル者其證人タルトキハ此限ニアラス

官廳、町村、學校、病院、社寺、會社ノ印章記號アル物品ハ其實却シ得ヘキコトヲ證明スル證人貳名以上アルニ非サレハ之ヲ買取リ又ハ交換スルコトヲ得ス

前二項ニ違背シタル者ハ警察官ノ命ニヨリ無代價ニテ物品ヲ取戻サル、コトアルヘシ

第六條 古物商ハ營業者タルト否トヲ問ハス盜罪詐欺取財ノ罪又ハ

刑法第二百九十九條第四百一條ノ處斷ヲ受ケタル者ヨリ物品ヲ買取リ又ハ交換シ及ヒ寄藏スルトキハ警察官ノ許可ヲ受クヘシ違フ者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮又ハ三十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第七條 古物商ハ自宅又ハ許可ヲ受ケタル市場及ヒ賣主讓主ノ居宅ノ外ニ於テ物品ヲ買取リ又ハ交換スルコトヲ得ス

第八條 刀劍又ハ之ヲ仕込ミタル器具ハ身元詳ナラサル者及ヒ盜罪賭博ノ處斷ヲ受ケタル者ニ賣渡讓渡シ又ハ露店及ヒ路傍ニ於テ賣渡讓渡スコトヲ得ス

第九條 古物商物品ヲ他府縣ニ運送セントスルトキ又ハ他府縣ヨリ受取りタルトキハ其物品ノ目錄ヲ所轄警察署ニ届出ツヘシ
警察官ハ時宜ニ依リ荷作ヲ解キ物品ヲ検査シ之ヲ差押フルコトアルヘシ但費用ハ届人之ヲ擔當スヘシ

第十條 贓物ノ品觸アルトキハ到達シタル年月日時ヲ其品觸寫書ニ

附記スヘシ

第十一條 品觸到達以後一年内ニ類似ノ物品ヲ買取リ又ハ交換シ及ヒ寄藏シタルトキ若クハ其以前ニ之ヲ得タルマ、所持シタルトキハ直ニ所轄警察署ニ届出ツヘシ若シ届出テスシテ其理由ヲ辨解スルコト能ハサル者ハ第六條ノ刑ニ同シ

第十二條 物品ノ賣買交換ヲ記載シタル簿冊及ヒ品觸寫書ハ十年間保存スヘシ若シ亡失シタルトキハ直チニ所轄警察署ニ届出ツヘシ

第十三條 警察官ハ何時ダリトモ古物商ノ店舖ニ臨ミ物品及ヒ簿冊ノ検査ヲ爲シ時宜ニ依リ其物品ヲ差押ヘ又ハ時々簿冊ヲ差出サシメ之ヲ検査スルコトアルヘシ古物商ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第十四條 第二條第三條第四條第五條第七條第八條第九條第十條第十二條第十三條ニ違背シ又ハ詐偽ノ届出ヲ爲シタル者ハ貳圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條 第六條第十一條第十四條及ヒ刑法第二百九十九條第四百

一條ノ處斷ヲ受ケタル古物商ハ管轄廳東京府ハニ於テ三月以上三年以下ノ特別取締ニ付スルコトヲ得

第十六條 特別取締ニ付セラレタル者ハ尙ホ左ノ項目ニ從フヘシ

一 物品ヲ買取リ又ハ交換シタルトキハ其賣主讓主ノ住所氏名年齢及ヒ物品ノ形状徽章番號編柄模様損所ノ類ヲ云フ價額年月日時ヲ簿冊ニ記載スヘシ

二 日出前日没後ハ物品ヲ買取リ又ハ交換シ及ヒ寄藏スルコトヲ得ス

三 營業者ニアラサル者ヨリ物品ヲ買取リ又ハ交換シタルトキハ其物品ヲ原狀ノ儘五日間保存スヘシ

四 物品ヲ賣渡シ又ハ交換シタルトキハ其物品ノ形状價額年月日時ヲ簿冊ニ記載シ且買主讓受主ノ住所氏名年齢ヲ知り得タルトキハ之ヲ記載スベシ

五 毎月一度物品賣買交換ノ簿冊ヲ所轄警察署ニ差出シ其検査ヲ

受クヘシ

六 住所ヲ移轉シ又ハ旅行シ又ハ他人ヲ宿泊同居セシメントスルトキハ所轄警察署ノ認可ヲ受クヘシ

第十七條 前條ニ違背シタル者ハ三圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十八條 特別取締ニ付セラレタル者第六條第十一條第十四條第十

七條ニ依リ罰金ニ處セラレタルトキハ直ニ之ヲ完納セシム若シ納完セサル者ハ留置セラル、コトアルヘシ

第十九條 古物商一年内ニ此條例ヲ再犯シタルトキハ行政ノ處分ヲ以テ其營業ヲ禁止シ又ハ停止スルコトヲ得

第二十條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第二十一條 此條例ヲ犯シテ買取り又ハ交換シタル物品贓物ニ係ルモノハ營業者ニ依ルト否トナ間ハス警察署ニ於テ之ヲ追徴シテ被害者ニ還付スヘシ若シ被害者知レサルトキハ之ヲ領置シ一年ノ後官没ス

第二十二條 商業上ニ付テハ家屬又ハ雇人ノ所爲ト雖モ營業者其責ニ任スヘシ

第二十三條 此條例ヲ施行スルノ方法細則ハ警視總監府知事東京府ヲ除ク「縣令」ニ於テ便宜取設ケ「內務卿」ニ届出ヘシ

○ 質屋取締條例 明治十七年三月九號布告

質屋取締條例別冊ノ通制定シ明治十七年五月十五日ヨリ施行ス

(別冊)

質屋取締條例

第一條 質屋營業ヲ爲ス者ハ管轄廳東京府ハ警視廳ノ免許ヲ受クヘシ

第二條 質屋ハ質物臺帳ヲ備ヘ其紙數ヲ記シ所轄警察署ノ檢印ヲ受クヘシ

第三條 質物臺帳ニハ警察官ニ於テ質物、貸金、質入主及質入受戻入換ノ年月日ヲ調査スルニ差支ナキ様記載スヘシ但證人ヲ要スルトキハ質入主及證人ノ實印ヲ押捺セシメ置クヘシ

第四條 身元詳ナラサル者ヨリ質物ヲ取ルコトヲ得ス但身元詳ナル者證人タルトキハ此限ニアラス

第五條 十五年未滿ノ者白痴風癲者及雇人雇主ノ家ヨリ質物ヲ取ルコトヲ得ス但父母後見人雇主又ハ身元詳ナル者證人タルトキハ此限ニアラス

官廳、町村、學校、病院、社寺、會社ノ印章記號アル物品ハ其質入シ得ヘキコトヲ證明スル證人二名以上アルニ非サレハ之ヲ質物ニ取ルコトヲ得ス

前二項ニ違背シタル者ハ警察官ノ命ニ依リ元利金ヲ償フコト無ク質物ヲ取戻サル、コトアルヘシ

第六條 盜罪詐欺取財ノ罪又ハ刑法第二百九十九條第四百一條ノ處

斷テ受ケタル者ヨリ物品ヲ質ニ取り又ハ寄藏シタルトキハ直ニ所轄警察署ニ届出スヘシ

第七條 賊物ノ疑アル物品又ハ身柄不相應ト認メタル物品ヲ持來ル者アルトキハ直ニ所轄警察署又ハ巡行ノ警察官巡查ニ密告スヘシ

第八條 流質物ヲ賣拂ハントスルトキハ五日以前ニ其物品目錄ヲ所轄警察署ニ差出スヘシ

第九條 流質物ヲ賣拂ヒタルトキハ警察官ニ於テ其物品、代價及買主ヲ調査スルニ差支ナキ様流質物賣拂帳ニ記載スヘシ

第十條 賊物ノ品觸アルトキハ到達シタル年月日時ヲ其品觸寫書ニ附記スヘシ

第十一條 品觸到達以後一年內ニ類似ノ物品ヲ質ニ取り又ハ寄藏シタルトキ若クハ其以前ノ質物及寄藏品中ニ類似ノ物品ヲ發見シタルトキハ直ニ所轄警察署ニ届出ヘシ

第十二條 質物臺帳流質物賣拂帳及品觸寫書ハ十年間保存スヘシ若

シ亡失シタルトキハ直ニ所轄警察署ニ届出ヘシ

第十三條 警察官ハ何時タリトモ質屋ノ店舗ニ臨ミ質物及帳簿ノ検査ヲ爲シ時宜ニ依リ其質物ヲ差押ヘ又ハ時々帳簿ヲ差出サシメ之ヲ検査スルコトアルヘシ質屋ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第十四條 此條例ニ違背シ又ハ詐偽ノ届出ヲ爲シタル者ハ一圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條 此條例ヲ一年內ニ再犯シタル者ハ行政ノ處分ヲ以テ其營業ヲ禁止シ又ハ停止スルコトヲ得

第十六條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第十七條 營業上ニ付テハ家屬又ハ雇人ノ所爲ト雖モ營業者其責ニ任スヘシ

第十八條 此條例ヲ施行スルノ方法細則ハ警視總監府知事東京府縣令ニ於テ便宜取設ケ「内務卿」ニ届出ヘシ

○ 内國船難破及漂流物取扱規則 明治八年四月 第六拾六號布告

内國船難破及漂流物取扱規則別冊之通相定候條本年六月一日ヨリ施行可致此旨布告候事

但本年同日ヨリ浦高札ハ廢シ候事

(別冊)

内國船難破及漂流物取扱規則

第一條 諸通船海上又ハ川筋ニ於テ難破沈没其他ノ災厄ニ逢ヒ候節救助心得方及ヒ之ニ屬スル諸費用ノ立方ハ總テ左ノケ條ニ從テ取扱フヘシ

第二條 各地浦方ニ於テ難破救助ノ爲メ其管廳ヨリ區戸長其他用掛リ等ノ内ヲ以テ適宜ニ浦役人ヲ申付置クヘシ

第三條 諸通船難風ノ爲ニ困難シ又ハ其他災厄ニ罹リ候節ハ最寄ノ

者見附次第直ナニ浦役人ニ報知シ且ツ浦役人ヨリ指圖無之ニ速カニ助船ヲ出シ救助方精々盡力致スヘシ

但シ救助ノ者困難船ニ漕寄セ候節船長其他重立タル者ヨリ頼談無之内ハ猥リニ船中ノ物品ヲ積ミ移スヘカラス

第四條 浦役人ハ難船ヲ見附或ハ其報知ヲ得ル時ハ速ニ其乗組人及ヒ船體積荷ヲ救助保安スルノ手立ヲ盡スヘシ若シ多人數ヲ要スル程ノ大難船ト見受候節ハ板木半鐘等打鳴シ人數ヲ呼聚メ且近隣ノ船持ニ申付助船ヲ出サシムヘシ

第五條 少人數ニテ救助シ得ヘキ時ハ勿論前條ノ如ク多人數ヲ要スル程ノ大難船ノ節モ浦役人ニ於テ諸事取締ヲ付ケ成丈ケ失費掛カラサル様篤ク注意致シ救助方行届候ハ、早速人數ヲ退散セシム可シ

第六條 保安シタル船具積荷其他ノ物品ハ最安全ニシテ且便利ノ場所ニ之ヲ置クヘシ尤モ小屋掛ケヲ要シ番人ヲ差置クヘキ程ノ場合ニ於テハ夫々其手數ヲナシ諸事懇切ノ取扱ヲ致スヘシ

第七條 難破ニ逢ヒタル船長又ハ乗組ノ者ハ上陸次第直ナニ電信郵便其他ノ急報ヲ以テ之ヲ船主又ハ荷主ニ報知ス可シ

第八條 難船物ヲ保安スル者ヘハ左ノ割合ヲ以テ保安料ヲ遣スヘシ

第一 海面ニ漂流スル物品ハ其二十分一

第二 海中ニ沈没スル物品ハ其十分一

第三 川面ニ漂流スル物品ハ其二十分一

第四 川底ニ沈没ズル物品ハ其十五分一

但シ其所持主ノ都合ニ因リ代價又ハ現物ニテモ妨ケナシ

第九條 浦役人ハ救助ノ爲メ集マリタル人數及ヒ救助ノ爲ニ出シタル小舟現ニ難船品ヲ保安シ及ヒ是レニ就テ盡力シタル證據顯然タラサルニ於テハ保安料及ヒ其他ノ賃錢等ヲ割渡ス可カラス

第十條 保安シタル物品又ハ船滓等ノ餘殘物又ハ汐入り水濡レ等ノ爲ニ腐敗スヘキ恐レアルモノハ二名以上ノ浦役人及ヒ船長其他重立乗組ノ者二名以上合議ノ上其所ニ於テ之ヲ入札拂ヒニ爲スヲ得

可シ

但シ本條ノ場合ニ於テハ浦役人ニテ成ルヘク丈ケ最寄ヘ廣告シ公ケノ場所ニ於テ入札人其他衆人ノ眼前ニテ之ヲ爲シ且其物品ノ目錄及ヒ買人ノ證書并ニ其附直段ハ第三番迄ヲ取置クヘシ

第十一條 保安物ヲ賣拂ヒタルキハ其代價金高ノ内ヲ以テ左ニ掲載シタル諸費用ヲ其船主荷主ヨリ出サシムヘシ

第一 保安料

第二 救助ノ節働人足賃及小舟賃

第三 保安物ノ爲メニ取設ケタル小屋掛ケ入費及ヒ番人ノ賃錢

第四 乗組ノ者怪我人有之節其療養入費

第五 同前ノ者溺死スルキ其搜索入費

第六 同前ノ者溺死ノ節埋葬入費

若シ物品賣拂金高諸費ノ高ヨリ少ナキハ其金高限リ出サシム不足ノ分及ヒ賣拂フヘキモノモ之レナキハ第十五條ニ照準シテ處

十一年第十九號布告ヲ以テ民費ヲ地方稅ト改ム

置ス可シ

第十二條 左ニ掲載シタル諸入費ハ之ヲ三分シ其二分ハ船主荷主ヨリ出サシム其一分ハ之ヲ其管内民費トナス可シ

第一 難船取扱中浦役人ノ日給

第二 浦方ニ於テ難破ノ爲ニ費シタル薪炭蠟燭及ヒ筆紙墨代

第三 浦方ヨリ管廳其外等ヘ發シタル電信郵便及ヒ飛脚賃

第四 救助人溺死シタル時其搜索入費

第五 同前ノ者死傷スル時治療埋葬入費

第十三條 難破ノ節浦方ヨリ乗組人ニ給セシ衣服食物其他ノ必要品代料又ハ歸郷旅費等ヲ貸遣シタル時ハ證書取置キ第十九條ノ通り

精算書中ニ記載シ追テ本人ヨリ償却セシム可シ

第十四條 大難船ノ節諸費用割賦ノ義ハ船体皆破沈没乗組人ノ死去

船主立會決算ヲ現場ノ救助方ヲ除クノ外各般ノ處置ハ其管廳ニ申

要スル等ノモ現場ノ救助方ヲ除クノ外各般ノ處置ハ其管廳ニ申立テ其筋出張官員ノ差圖ヲ受ク可シ尤モ小難船ノ處置ハ二名以上

ノ浦役人及ヒ船長其他重立乗組ノ者二名以上合議ノ上之ヲ決スルヲ得可シ

第十五條 船體積荷ヲ併セテ悉皆沈没ニ至ルノ大難船ハ浦方ニ於テ其救助ノ爲ニ許多ノ雜費相掛リ候トモ船主荷主ヨリ之ヲ取立ルヲ得ス故ニ其差出スヘキ費用ノ分ハ官費ヲ以テ支給スヘキニ付費用明細帳ヲ作り浦役人船長連署押印シテ管廳ヘ差出ス可シ

第十六條 危難ヲ冒シテ乗組人ノ必死ヲ救フ者又ハ救助ノ爲ニ盡力シテ死傷ニ至ル者アルキハ必ス管廳ヘ届出可シ其事實ノ輕重ニヨリ相當ノ賞譽或ハ手當金ヲ給ス可シ

第十七條 總テ浦役人及船長合議ノ上處置シタル時ハ其事柄ヲ詳細ニ記シタル證書ニ通テ作り之レニ連署押印シ其一通ヲ船長ヘ渡シ他ノ一通ヲ浦役人ニテ保テ置クヘシ

第十八條 二名以上ノ浦役人合議ノ時ハ其内一名ハ必ス他村ヨリ出ス可シ

第十九條 難船救助ニ屬スル諸費用ハ二名ノ浦役人及船長其他重立乗組ノ者二名以上立會ノ上第十一條第十二條第十三條第十五條ニ照シテ夫々其費用ノ種類ヲ區別シ成ル可ク速ニ精算書ヲ作り之ニ難破明細書ヲ添テ管廳ニ差出シ其檢査ヲ受ク可シ

但シ精算取調ノ節ハ成丈ケ船主又ハ荷主ノ立會ヲ要ス可シ
第二十條 前條ノ精算書ハ管廳ニ於テ速カニ調査ヲ遂ケ不審ノ廉無之キハ早速下ケ渡ス可シ然ル上浦役人ハ第十五條ニ記スル場合ヲ除クノ外船主荷主或ハ船長ヨリ夫々出金致サスヘシ若シ其即時辨金相成難キ分ハ相當ノ日數ヲ猶豫ス可シ

但シ「民費」ノ分ハ其管廳ヨリ取立浦役人ヘ下渡ス可シ
第二十一條 洋中ニ於テ難破或ハ打荷等有之趣ヲ以テ浦證文ヲ願出ル時ハ二名以上ノ浦役人立會ノ上船長及乗組ノ者二名以上ヲ別々ニ取調ヘ其實跡アルカ又ハ航海日記アルモノハ之レニ照シ各々符合スル時ハ浦證文ヲ作り連署調印シテ之ヲ船長ニ付與シ寫ヲ以テ

十一年第十九號布告ヲ以テ民費ヲ地方稅ト改ム

管廳ニ届出ヘシ

但シ浦證文中左ノケ條ヲ載スヘシ

第一 難破ニ逢タル場所其時日及ヒ風波ノ模様

第二 破損ノケ所

第三 打荷ノ種類箇數并他ノ積荷ノ種類

第四 船號及ヒ免狀ノ番號并船主船長ノ本貫苗字名乗組人數

第五 荷打シタル荷物主ノ苗字名本貫

第六 仕出シ地及ヒ仕向ケ地ノ港名

第七 乗組ノ内死傷有之キハ其本貫苗字名年齢

第二十二條 軍艦其他ノ官有船困難候節ハ早速助船ヲ出シ精々盡力シテ救助ス可シ且其難破ノ大小ニ拘ハラヌ其旨ヲ直チニ管廳ヘ報知ス可シ

第二十三條 前條ノ救助ニ屬スル諸費用ハ船將又ハ其筋ノ士官ヨリ直チニ受取ヘシト雖モ總テ管廳ノ指揮ヲ受クヘシ

但シ第十一條ニ記載スル保安物ニ就テハ別段相當ノ手當ヲ與フ可シ

第二十四條 貢米及ヒ其他ノ官物ヲ積入候船難破ニ及ヒ候節現場救助ヲ除クノ外總テノ處置ハ管廳ヘ申立ノ上其指揮ヲ受ク可シ

但郵便物ヲ積込候船ハ其最寄郵便役所又ハ取扱所ヘ郵便行囊ヲ至急引渡ス可シ

第二十五條 難船取扱ノ間浦役人ノ日給ハ一日五拾錢ヨリ多カラス拾錢ヨリ少ナカラサルモノトス

難破ノ節働人足賃及ヒ小舟賃ハ土地ノ異同ト勞役ノ難易ニ依リテ同シカラスト雖モ各管廳ニ於テ適宜見積リ豫カシメ其額ヲ定メ置クヘシ

第二十六條 船長及ヒ擔任ノ者怠慢ニヨリ難破沈没其他ノ損害ヲ生スル時ハ右損失ヲ其者ヨリ償却セシム可シ若シ其災厄人智ノ前知ス可カラズ人力ノ豫防ス可カラサルニ出ルヲ瞭然明證スル時ハ

此限ニアラス

第二十七條 浦役人船長其他救助ノ者ト申合セ其保安シタル難船物
ヲ沈没ト偽リ竊カニ賣買スル者ハ律ニ照シテ處分スヘシ

第二十八條 凡テ難船ノ節救助ニ托シテ積荷船具其他ノ物品ヲ竊盜
或ハ掠奪スル者又ハ其竊盜掠奪ニ與スル者或ハ其本犯ヲ陰匿スル
者又ハ竊盜物ト知テ之ヲ賣買スル者ハ律ニ照シテ處分ス可シ

以下漂着ノ部

第二十九條 凡原因ノ知レサル難船漂着物及ヒ乗組人ナキ漂着船ヲ
見附ル者ハ之ヲ浦役人ニ報知ス可シ浦役人ハ其調書ヲ作り之ヲ其
管廳ヘ届出可シ

第三十條 乗組人ナキ船ハ其漂着ノ月日船ノ大小破損ノ模様等ヲ精
細ニ書記シ漂着物ハ其品名箇數等精細ニ書記ルシ其漂着近傍人民
輻輳ノ地ノ揭示場及ヒ船政所ヘ六十日間張出ス可シ尤モ漂着物ノ
代價貳拾圓以上ト思量シ或ハ貳拾圓以下タリモ必要ノ品柄ト思量

スル時ハ其管廳ヨリ三府五港ノ管廳及ヒ稅關ヘ報告シテ張出チナ
シ或ハ新聞紙ニ載セテ公告ス可シ

第三十一條 漂着物ノ持主知レタル時ハ左ノ區別ニ循ヒ處置ス可シ

第一 一ケ年以内ハ其見積代價ノ三分一ヲ取揚主ニ與ヘ其現品
ハ持主ニ返還スル事

但シ持主ノ情願ニヨリ現品賣拂ヒ其代金ニテ受取ル
ヲ得可シ

第二 一ケ年ヲ過クレハ之ヲ公賣シ其代價ヲ平分シ一半ハ其取
揚主ニ與ヘ一半ハ官ニ收ムル事

但シ三ケ年以内ニ其持主知レタル時ハ官ニ收メシ部分
ハ下戻ス可シ

第三十二條 乗組人無之漂着船ノ持主知レタル時ハ左ノ區別ニ循ヒ
處置ス可シ

第一 一ケ年以内ハ其見積代價ノ十分一ヲ見附主ニ與ヘ其船ハ

持主ニ返還スル事

但書ハ前條第一項ニ同シ

第二一 一ケ年ヲ過クレハ之ヲ公賣シ其代價ノ三分一ヲ見附主ニ與ヘ其餘ノ二分ハ官ニ收ムル事
但書ハ前條第二項ニ同シ

九年第五十五號布告ヲ以テ改定律例中得遺失物ノ條ヲ刪除シ更ニ罰例ヲ設クテ第九十六號布告ヲ以テ遺失物取扱規則ヲ定ムル事該規則第十三類ニ載ス

第三十二條 前二條ニ記スル場合ニ於テハ「律例得遺失物ノ條」ト牴觸スルコトナカル可シ

第三十四條 凡漂着物ヲ保存シ及ヒ之ヲ公告スル等ノ事ニ付費用アルモノハ第十一條ニ照シ浦役人ノ奥印シタル證書ヲ以テ代價ノ全部中ヨリ之ヲ償却ス可シ

第三十五條 洋中ニ於テ難破致シ桅檣其他ノ船具ニ取附キ海岸ニ漂着致シ候者有之節ハ浦役人ヨリ一通り取調ヘ相當ノ保護ヲ加ヘ置直クニ管廳ニ届出其指揮ヲ受ク可シ尤モ本人歸郷ノ旅費其他ノ手當等償還ハシ候節ハ第十二條ノ通り追テ本人ヨリ償却セシム可シ

第三十六條 凡漂着物ヲ見附ケタル者之ヲ浦役人ニ報知スルコトナク其物品ヲ私カニ使用シ又ハ之ヲ賣買スル者ハ第二十八條ニ照シテ處分ス可シ

第三十七條 暴風雨等ニテ流失ノ材木ヲ取揚クル時ハ此規則第廿九條以下ニ照準シ其代價十分ノ一二過サル取揚料ヲ遣ス可シ(二十年第九號布告ヲ以テ改正)

第三十八條 前條ノ場合ニ於テ取揚タル材木巨大ニシテ領置ニ不便ナルモノハ官之ヲ公賣シ其代價ヲ以テ現物ト看做シ材主ノ有無ニ從ヒ處分スヘシ(十一年第三十二號布告ヲ以テ追加)

○遺失物取扱規則明治九年四月第五十六號布告

沿革略記明治三年十二月新律綱領六年五月改定律例中得遺失物例ヲ設ク○九年第五十五號布告ヲ以テ新律綱領得

遺失物例ヲ改正シ改定律例同條例第二百八十二條以下ヲ刪
除ス○同年四月第五十六號布告ヲ以テ遺失物取扱規則ヲ制
定ス是レ現行法ナリ

遺失物取扱規則左ノ通相定候條此旨布告候事

遺失物取扱規則

第一條 凡遺失物ト稱スルハ自ラ其遺失スルヲ覺ラス及ヒ其所在
ノ明カナラサルモノヲ云フ故ニ若シ其物ヲ得ルニ臨テ物主其場ニ
就テ其主タルヲ證明スルニ於テハ直ニ之ヲ返還シ遺失物ヲ以テ
論スルヲ得ス

第二條 凡遺失ノ物ヲ得レハ五日內ニ其主ニ還シ其主分明ナラサレ
ハ之ヲ官ニ送ルヘシ官之ヲ榜示シ一年內其主ナキ時ハ之ヲ得者ニ
給ス

第三條 凡遺失者ハ其遺失スル物品ノ摸樣員數并ニ遺失ノ日時場所
等ヲ可成丈ケ詳細ニ記載シ速カニ官ニ届出ヘシ但得者ヨリ其返還
ヲ得ル時モ亦更ニ其旨ヲ届出ヘシ

第四條 凡遺失ノ物ヲ得レハ之ヲ其主ニ還スト雖モ其費用ヲ償ハシ
ムルヲ得且得者ニ報勞ノタメ其物價百分ノ五ヨリ少カラス貳拾
ヨリ多カラサル金圓ヲ給スヘシ若シ物主得者ト其價格ヲ爭フ時ハ
官之ヲ評價人ニ托シテ其價ヲ定ム

第五條 凡遺失物ヲ得ルニ物品盜賊ニ係ルモノハ直ニ官ニ送ルヘシ
官之ヲ其主ニ還シ止タ其費用ノミヲ償ハシム

第六條 官私ノ地内ニ於テ埋藏ノ物品ヲ掘得ルモノハ之ヲ官ニ送ル
ヘシ其主分明ナラサルモノハ地主ノ所有ニ歸スヘシ若シ借地人其
借地ヨリ掘得タルトキハ之ヲ地主ト中分セシム(十四年第二號布告)
ヲ以テ但書共改正
但盜賊ニ係ルモノハ此限ニアラス

第七條 凡遺失ノ物ヲ得ルニ若シ其物耐久シ難クシテ其主分明ナラ
サル時ハ迅速ニ之ヲ官ニ送ルヘシ官之ヲ公賣シ其代價ヲ領置シ榜
示シテ處分スルヲ第二條ノ如シ

第八條 凡家畜ノ類他所ニ逸走スルモノハ之ヲ遺失物ト稱スルヲ得

スト雖モ其主ヨリ之ヲ官ニ報シ及ヒ得者ニ其費用ト報勞金ヲ給與
スルヲ第三條第四條ニ同シ若シ他人ノ財産ヲ毀損スル時ハ律ニ照
シテ處分ス

十四年第七十二號布告第
例處斷方參看以下條之第
十二類ニ載ス

第九條 凡逸走スル畜類ヲ得タル者其主分明ナラサレハ之ヲ官ニ送
ルヘシ若シ八日內其主ナケレハ官之ヲ公賣シテ得者ニ其費用ヲ償
ヒ仍ホ代金ノ剩餘アルモノハ之ヲ官ニ領置シ榜示シテ處分スルヲ
第二條ノ如シ

第十條 凡遺失物及ヒ逸走畜類ノ官ニ係ルモノハ官ヨリ得者ニ其費
用ト報勞金ヲ給スルヲ私物ニ異ナルヲナシ

第十一條 凡警察官吏タル者ハ所部ノ内外ヲ問ハス遺失物ヲ得レハ
速ニ之ヲ官ニ送り全ク其主ニ還付シ其主ナケレハ之ヲ官ニ沒ス

第十二條 凡一切應禁ノ物ヲ得レハ遺失及ヒ埋藏ヲ論セス並ニ官ニ
沒ス

第十三條 凡公私債證書地券諸鑑札等ノ類ハ遺失物ヲ以テ論スルヲ

得スト雖モ物主ハ得者ニ其費用ヲ償フヘシ

第十四條 凡遺失物及ヒ逸走畜類ヲ得若クハ埋藏物ヲ掘得テ官私ニ
全ク送還セス或ハ物主ノ其主タルヲ證明スルニ冒認シテ返還セ
サル者ハ並ニ律ニ照シテ處分ス

十九年宮内省第十三號達
ヲ以テ十年內務省甲第二
十號達ノ件ハ宮内ニ届出
ルコトトナス

○埋藏物中古代ノ品物處分十年九月内務省甲第二十號布達
明治九年四月太政官第五拾六號ヲ以テ遺失物取扱規則中第六條埋
藏物掘得ル者處分ノ儀公布相成候處右物品ノ中古代ノ沿革ヲ徵
スルモノモ有之候ニ付處分前一應當省へ届出檢査ヲ可受其品ニ
ヨリ相當代價ヲ以テ購求シ官私中分ニ係ルモノハ其價格ノ半高
ク發掘人へ下附シ該物品ハ永ク博物館へ陳列可致候條此旨布達
候事

但物品ハ先ッ掘出地名及形狀等ヲ詳記シ及摸寫スルモノヲ郵
送シ其見込アルモノニテ遞送方相違候後本文ノ通り可取計候
事

○墓地及埋葬取締規則 明治十七年十月
第貳拾五號布達
墓地及埋葬取締規則左ノ通相定ム

墓地及埋葬取締規則

第一條 墓地及火葬場ハ管轄廳ヨリ許可シタル區域ニ限ルモノトス

第二條 墓地及火葬場ハ總テ所轄警察署ノ取締ヲ受クヘキモノトス

第三條 死體ハ死後二十四時間ヲ經過スルニ非サレハ埋葬又ハ火葬

ヲナスコトヲ得ス

但別段ノ規則アルモノハ此限ニアラス

第四條 區長若クハ戸長ノ認許證ヲ得ルニ非サレハ埋葬又ハ火葬ヲ

ナスコトヲ得ス

但改葬ヲナサントスル者ハ所轄警察署ノ許可ヲ受クヘシ

第五條 墓地及火葬場ノ管理者ハ區長若クハ戸長ノ認許證ヲ得タル
者ニ非サレハ埋葬又ハ火葬ヲナサシムヘカラス又警察署ノ許可證

ヲ得タル者ニ非サレハ改葬ヲナサシムヘカラス

第六條 葬儀ハ寺堂若クハ家屋構内又ハ墓地若クハ火葬場ニ於テ行
フヘシ

第七條 凡ソ碑表ヲ建設セント欲スル者ハ所轄警察署ノ許可ヲ受ク

ヘシ其許可ヲ得スシテ建設シタルモノハ之ヲ取除ケシムヘシ

但墓地外ニ建設スルモノ亦之ニ準ス

第八條 此規則ヲ施行スル方法細則ハ警視總監府知事「縣令」ニ於テ
便宜取設ケ「内務卿」ニ届出ヘシ

○墓地及埋葬取締規則違背者處分 第十七年十月
第貳拾五號布達
今般第二十五號ヲ以テ墓地及埋葬取締規則布達候ニ付此規則ニ
違背スルモノハ違警罪ノ刑ヲ以テ處分スヘシ此旨相違候事

○行旅死亡人取扱規則 明治十五年九月 第四十九號布告

沿革略記

明治四年四月脱籍無産ノ輩復籍遞送規則ヲ定ム○同年六月行旅病人ノ取扱規則ヲ定ム○同年十二月脱籍無産ノ輩郷里ニ復歸シ生計立テ難キ者ノ處置方ヲ示ス○十年十二月第九十五號達ヲ以テ犯罪決放ノ者并ニ脱籍無産ノ輩其本籍マテノ遞送ヲ廢シ寄留入籍等本人ノ望ニ任ス○十一年十一月第四十七號達ヲ以テ逃亡失踪者ノ永尋ヲ止ム○十五年九月第四十五號布告ヲ以テ行旅死亡人取扱規則ヲ制定ス是レ現行法ナリ○同年九月第五十號布告ヲ以テ脱籍無産ノ輩復籍遞送規則行旅病人取扱規則等四年以來ノ布告達等ハ都テ之ヲ廢止ス

行旅死亡人取扱規則左ノ通制定ス

行旅死亡人取扱規則

- 第一條 凡ソ引取人ナキ行旅死亡人アルトキ所在戸長ハ之ヲ最寄墓地へ假埋葬スヘシ其倒死變死等ニ係ル者ハ警察官ノ檢視ヲ受クヘシ
- 第二條 死亡人ノ本籍氏名詳ナルキ戸長ハ死亡ノ狀況並ニ埋葬其他

死亡人ニ屬スル費用ノ計算書ヲ本籍戸長へ通報スヘシ本籍戸長ハ之ヲ其家ニ通示シ費用ノ辨償ヲ要スルキハ三十日限差出サシメ埋葬地戸長ニ送付スヘシ若シ其家赤貧ニシテ辨償シ能ハサルキハ其本籍地方稅ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ

第三條 死亡人ノ本籍氏名詳ナラサルキ戸長ハ其相貌景狀附屬シタル物品場所年月日等ヲ詳記シ三十日間最寄揭示場へ揭示シ且兩度以上新聞紙ヲ以テ公告スヘシ公告ノ日ヨリ九十日ヲ過キ仍ホ本籍詳ナラサルキハ該費用ハ地方稅ヲ以テ支辨スヘシ

第四條 死亡人所持ノ金錢ハ埋葬其他死亡人ニ屬スル費用ニ供スヘシ又所持ノ物品ハ前條ノ期限ヲ過キ仍ホ本籍詳ナラサルキハ之ヲ公賣シ同上ノ費用ニ充ツヘシ

但本籍氏名詳ナル者其家赤貧ニシテ費用ヲ辨償スルヲ能ハサルキハ直ニ其物品ヲ公賣スルモ妨ケナシ

第五條 死亡人ノ遺財前條ノ費用ニ充テ餘贏アルキハ之ヲ本籍へ送

付スヘシ其本籍氏名詳ナラサルモノハ之ヲ五ヶ年間戸長役場ニ保管シ仍ホ本籍氏名詳ナラサルニ於テハ地方稅雜收入ニ組入ルヘシ

○第十四類 訴訟、民事

○治安裁判所及始審裁判所ノ權限 明治十四年十二月第八十三號布告

治安裁判所及ヒ始審裁判所ノ權限左ノ通制定ス

第一條 治安裁判所ハ訴訟事件ヲ勸解ス但諸官廳ニ對スル事件及ヒ

商事ニ係リ急速ヲ要スル事件ハ勸解スルノ限ニ在ラス

第二條 治安裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價額百圓未滿ノ訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス

第三條 治安裁判所ハ人事其他金額ニ見積ル可カラサルモノヲ裁判スルヲ得ス

第四條 始審裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價額百圓以上并ニ第三條ニ掲ケタル治安裁判所權外ノ訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス

第五條 始審裁判所ハ其管轄地内ノ治安裁判所ノ始審裁判ニ對スル控訴ニ付終審ノ裁判ヲ爲ス

十四年第五十六號布告ヲ以テ小笠原島裁判所ノ權限ヲ定メ同年第五十七號布告ヲ以テ伊豆七島ノ民事裁判權限ニ載ス

但控訴ノ手續ハ明治十年第十九號布告控訴手續ニ照準スヘシ

○西郷外十三ヶ所民事裁判ノ權限明治十五年一月
第五號布告

明治十四年十二月第八十三號ヲ以テ民事裁判權限ノ儀布告候處當分ノ内西郷相川豐岡洲本田邊脇町高山平戸福江嚴原天草大曲八戸大島治安裁判所ニ於テ民事ノ訴訟ハ始審裁判所ノ權限ヲ以テ裁判スヘシ

但請求ノ金額及ヒ價額百圓未滿ノ件ニ關スル控訴ハ管轄始審裁判所ニ之ヲ爲スヘシ

○裁判事務心得明治八年六月
第三百三號布告

今般裁判事務心得左ノ通相定候條此旨布告候事

第一條 各裁判所ハ民事刑事共法律ニ從ヒ遲滞ナク裁判スヘシ
疑難アルヲ以テ裁判ヲ中止シテ上等ナル裁判所ニ伺出ルヲ得ス但シ刑事死罪終身懲役ハ此例ニアラス

刑法治罪法實施以降刑事
ニ係ルモノハ治罪法ニ據
ル

第二條 凡ソ裁判ニ服セサル旨申立ル者アル時ハ其裁判所ニテ
辨解ヲ爲スヘカラス定規ニ依リ期限内ニ控訴若クハ上告スヘ
キヲ言渡スヘシ

第三條 民事ノ裁判ニ成文ノ法律ナキモノハ習慣ニ依リ習慣ナ
キモノハ條理ヲ推考シテ裁判スヘシ

第四條 裁判官ノ裁判シタル言渡ヲ以テ將來ニ例行スル一般ノ
定規トスルヲ得ス

第五條 頒布セル布告布達ヲ除クノ外諸官省隨時事ニ就テノ指
令ハ將來裁判所ノ準據スヘキ一般ノ定規トスルヲ得ス

○

○裁判所ノ呼出ヲ受ケ遲參又ハ不參スル者處分明治十年一月
第五號布告
凡ソ裁判所ノ呼出ヲ受タル者疾病等ノ事故アリテ遲參又ハ不參スル

裁判所ノ呼出ヲ受ケ遲參又ハ不參スル者處分

十四年第七十二號布告前
例處斷方參符第十二類ニ
載ス

時ハ其事故ヲ詳記シ呼出刻限迄ニ其裁判所ニ届出ヘシ若シ右刻限ヲ
過キテ届出ル歟又ハ無届ニテ遲參不參スル時ハ裁判官ニ於テ直ニ五
錢以上拾圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ
右布告候事

○身代限規則 明治五年六月
第百八十七號布告

今般華士族平民共身代限規則被相定候條左ノ通相達候事
但當壬申八月朔日ヨリ施行可致事

華士族平民身代限規則

平民身代限抵償トシテ差押フ可ラサル品類

一時服着替共男女共各一通宛

一夜具 男女共各一通宛

一本ノ職業ヲ爲スニ必要ナル諸物品但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商
等職業ニ必要ナル書類器械品物等其金額五十兩ニ至ル迄最モ本人
ノ擇ム所ニ任ス可シ其直段ハ貸主借主ヨリ監定ノ者_{道具屋}ノ類 一人宛
差出シ外入札人ト共ニ入札致サセ_村町役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高
札ヲ以テ其價ヲ定ム可キ事

一食料

家族ノ人口ヲ量リ一ケ月間用ヰル飯米ヲ殘シ置ク可キ事

但男丁ハ一日ニ五合麥ハ一升雜穀ハ一升五合婦女幼少ハ四合麥

ハ八合雜穀ハ一升二合宛ノ事

一鍋釜及炊具各 一通

華士族身代限抵償トシテ差押フ可ラサル品類

一(五年第三百廿七號布
告ヲ以テ本項取消)

一大小類 男子一人ニ付各一腰宛

一冠服 男子一人ニ付各一通宛

九年第三百十八號布告ヲ以
テ帶刀ヲ禁ス

一時服着替共男女共各 一通宛

一夜具 男女共各 一通宛

一本入職業ヲ爲スニ必要ナル諸物品

但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商等ノ職業ニ必要ナル書類及諸器械品物等其金額五十兩ニ至ル迄最モ本人ノ擇ム所ニ任スヘシ其直段ハ貸主借主ヨリ監定ノ者^{道具屋}ノ類 一人宛差出シ外入札人ト共ニ入札致サセ^村町役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ム可キ事

一鍋釜及炊具類各 一通

右身代限リノ節ハ六十日間裁判所門前高札場並ニ本人家宅へ揭示ヲ出シ其次第傳承日限中追願ノ者ハ取糺ノ上可處置事^(六年第七十テ揭示日數三十日トアルヲ六十日ト改ム)

但新聞紙ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘシ
一前條ニ記スル所ノ引殘スヘキ必要物件ノ内未タ代價ヲ拂ハサル分

ハ賣主ヨリ日限内訴出レハ現品ヲ取戻スコトヲ得ヘシ

但現在着用ノ衣服夜具ハ此限ニアラス

一身代限ノ物件ハ入札拂ニ出ス可シ尤金銀器等ノ定價判然タル物品ハ眞價ヨリ低ク賣拂フヘカラス且ツ賣拂金ノ總額ハ其者ノ負債及ヒ右一件ノ諸費用ヲ償フニ過ク可カラス

但入札拂ノ日ヨリ二日前ニ其品物及ヒ場所時刻ヲ裁判所門前并ニ其者ノ居宅及ヒ各地士民群集ノ所へ揭示シ及ヒ新聞紙ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘシ且ツ貸主借主ヨリ差出セシ監定ノ者モ他人ト共ニ入札致サセ^村町役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以其價ヲ定メ之ヲ現金ニテ取立裁判所へ差出スヘシ

○身代限ノ者ニ對シ貸金等約定期限内處分^{明治六年七月第二百五十二號布告}
負債者身代限ニ遇フ節其者へ對シ貸金穀其他義務ヲ得可キ者定約期限未滿内ノ分處置振左ノ通被定候條此旨相達候事

第一條 貸金穀又ハ義務ヲ得可キ者定期期限未滿内ニハ訴出ル
ヲ許サ、ル規則ナレモ其負債者又ハ義務ヲ行フヘキ者右期
限未滿内ニ身代限ニ遇フ時ハ訴出ルヲ得ヘシ

第二條 定期期限未滿内ニ訴出ル者ハ滿期後訴出ル者ト同一ノ
權利ヲ有シ身代限財産糶賣金ノ分配ヲ受ルヲ得ヘシ

第三條 請人證人等連印ニテ本人返濟相滯ルニ於テハ引受返濟
可致ノ明文之レアル證書ヲ取置タル者ハ本人身代限財産糶賣
金ノ分配ヲ受ケ尙ホ不足アラハ滿期ノ時ニ至請人證人ニ掛リ
之ヲ訴ルヲ得ヘシ

第四條 身代限ニ遇フ者期限未滿内ノ者ニハ滿期ノ時ニ至リ返
濟セント欲スル時ハ別段請人ヲ立請人ヨリ動不動産ヲ引當又
ハ質物ト爲シ違變ナキヲ證明シテ原告人ノ承諾ヲ求ルヲ必要トス
第五條 負債者滿期ヲ保スル爲メ改テ請人ヲ立請人ヨリ動不動
産ヲ引當又ハ質物ト爲シ違變ナキヲ證明シ原告人之ヲ承諾ス

ル時ハ其原告人ハ此回ノ身代限財産糶賣金ノ分配ヲ求ムルヲ
ヲ得ヘカラス

第六條 定期期限未滿内ノ債主ハ身代限ニ遇フ負債主ニ對シ期
限未滿内ニ訴フルモ滿期後ニ至リ訴フルモ其者ノ情願ニ任ス
ト雖モ身代限ニ遇フ者ノ動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取り置タ
ル債主ハ右動不動産ヲ身代限ノ糶賣ヲ爲スニ付己レノ受取ル
可キ金高ヲ求ルヲ得ヘキ而已ニテ糶賣ヲ爲ス事ヲ拒ムヲ得
可ラス

第七條 動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取置タル者ハ其財産糶賣金
ノ内ニテ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ其定約ノ證書ニ據
リ處分ノ時迄ノ金高ヲ算計シ受取ル可キノ求テ爲シ裁判所ニ
於テハ糶賣金分配ノ規則ニ從ヒ引當又ハ質物ヲ取置タル者ニ
分配ス可キ金高ヲ引渡ス可シ

第八條 引當又ハ質物ヲ取置カサル金穀ノ債主定期期限未滿内

ニ訴出ル時ハ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ定約ノ證書ニ據リ處分ノ時迄ノ金高ヲ算計シ受取ヘキノ求ヲ爲シ裁判所ニ於テハ糶賣金分配ノ規則ニ從ヒ處分ヲ爲ス可シ

○身代限財産中質入書入ノ地所處分明治八年四月第五十三號布告

地所ノ質入書入ハ尋常ノ私約ト違ヒ戸長役場ノ帳簿ニ記載シテ奥書割印モ之シアル公正ノ證書ニ付若シ身代限り財産中質入又ハ書入ノ地所アリテ其債主揭示中ニ訴出サル節ハ其地所糶賣代價ノ中ニテ債主受取ルヘキ元金高ニ糶賣金配當ノ日マテノ利息ヲ加ヘ第一番ニ引キ去リ裁判所ニ於テ之ヲ糊封シ掛リ官員兩名調印ノ上戸長役場ニ預ケ置キ後日債主願出次第相渡スヘク候條此旨布告候事

但質入書入ノ金高及ヒ利息等不分明ノ節ハ本人呼出シ取調可申事

○異産ノ子弟及隱居身代限處分明治五年九月第二百七十五號布告

父兄ト同居ノ子弟或ハ別居シテ財産ヲ異ニスルモノ又ハ父既ニ家督ヲ其子ニ譲リ隱居別宅シテ財産ヲ異ニスル者自今一己ニ金銀借受候分其證券中本家ノ戸主保證ノ調印無之上ハ貸主ニ於テ本家ノ財産ヲ目的トシ貸シ與フル筋無之候ニ付若シ右等ノ者共返金相滞訴訟ニ及ヒ候節同居ノ者ハ其身所持ノ品物ノミ分産異居ノ者ハ其財産ノミヲ以テ之ニ當テ身代限りニ裁判申渡候條爲心得此段相達候事

○僧侶身代限規則明治六年三月第八十八號布告

僧侶借財滯出入ニ付身代限規則左之通被相定候條此段相達候事
僧侶身代限規則

抵償トシテ差押フ可ラサル品類

一食料

寺内ノ人口ヲ量リ僧侶ハ一日ニ五合麥ハ一升雜穀ハ一升五合尼及婦女幼少ハ四合麥ハ八合雜穀ハ一升二合宛一ヶ月間

用フル飯米ヲ殘シ置クヘキ事
一建物

法用ニ必要ナル箇處

但本堂等へ建添候トモ榮耀ニ屬スル箇所ハ此限ニアラス

一寄附帳ニ記載スル部分

一什物帳ニ區別シテ記載スル古來傳承ノ寶物並法用ニ必要ナル部分

一法衣寺主並所化及尼共各一通宛

一時服着替共寺主並所化及婦女共各一通宛

一夜具寺主並所化及婦女共各一通宛

一鍋釜及炊具類各一通

一本人職業ヲ爲スニ必要ナル金額五十兩ニ至ル迄ノ物品ヲ差除ク等其他ノ方法ハ華士族平民身代限ニ同シ

○僧侶身代限ニ付寺院所有物處分明治六年三月
第八十九號布告

今般僧侶身代限規則被相定候ニ付テハ寺院所有ノ田園建造物諸器什檀家ヨリ寄附ノ分又ハ法用ニ必要ナル分並ニ古來傳承ノ寺寶等ノ部分判然相立不申候テハ差支候條左ノ規則ニ從ヒ寄附帳什物帳相綴リ置可申候

一寄附帳ニハ何年何月何誰寄附ノ田園反別建造物坪數諸器物ノ質分ニ至ルマテ詳細ニ記載スヘシ

一什物帳ニハ法用ニ必要ノ分並ニ寺寶ヲ區別シ記載スヘシ

一右二帳二部ツ、相綴リ檀家法類共兩人以上並ニ其地ノ戸長検査ノ上各姓名ヲ署シ之レニ調印シ一部ハ戸長役所ニ藏シ一部

ハ其寺院ニ藏シ置ク可シ

右之通相達候事

○身代限ノ者他ニ貸附ノ金穀證文アルキ處分七年九月
司法省第廿三號達金穀ヲ借リ返濟ヲ爲シ能ハサル者裁判所ノ處分ニ因リ身代限ニ遭ヒ候トキ所有物ノ内他人へ貸附置キタル金穀ノ證文之レアル

節ノ取扱振明治五年壬申第四十號ヲ以テ相違置候處詮議ノ次第有之左之通改正候條此旨相違候事

第一條 各裁判所ニ於テ身代限ニ處分ヲ爲スニ當リ身代限ニ遭フ者ノ物件ノ内ニ身代限ニ遭フ者ヨリ他人ノ貸附置キタル金穀ノ證文有之時ハ其證文ノ定期期限ノ満未滿ヲ論セス證文ニ記名シタル債主ニ眞偽ヲ尋テ無相違時ハ其債主ヨリ證文ニ面ノ通り可受取旨身代限ニ遭フ者ノ債主ニ申渡シ別紙離形ニ倣ヒ證文ニ裏書ヲ爲シ其債主ニ可相渡事

第二條 前條ノ場合ニ於テ債主其證文ヲ受取ルヲ好マサル時ハ其證文ハ身代限ニ遭タル者ニ所持致サセ置クヘキ事
但シ定期満期ノ證文ニテ債主ノ家産些少ナルモ身代限ニ遭フ者ノ債主ニ於テソノ債主ノ身代限ヲ以テ現金ノ割賦ヲ受度旨申立ルニ於テハ望ノ通處分スヘキ事

第三條 債主數名ニシテ身代限ニ遭フ者ヨリ他人ノ貸附置キタル金穀ノ證文一通又ハ數通ナル時ハ數名ノ債主ニ入札致タサセ落札ノ金員ヲ以テ其落札シタル債主ト其他ノ債主トハ金高ニ應シ配當シソノ落札ノ證文ニハ一通毎ニ第一條ノ方法ニ據リ處分スヘキ事
但シ數名ノ債主盡ク入札ヲ好マサル時ハ第二條ノ處分ニ及フヘキ事

第四條 證文ヲ落札シタル債主證文ニ記名シタル債主ヨリ金ヲ受取リタル時ハ其金員中ヨリ己レノ受取ルヘキ金高ト之レ

ヲ受取ルニ付テノ諸入費ノ金高ト引去リ其餘金ハ證文ニ記載シアル債主ニ返シ而シテ右ノ計算ヲ爲シタル明細勘定書ト餘金ヲ返シタル請取書トヲ以テ裁判所ニ届出ツヘキ事

第五條 若シ證文ヲ落札シタル債主證文ニ記名シタル債主ヨリ金ヲ受取ントスルニ證文ニ記名シタル債主モ亦身代限ニ遭ヒテ證文ニ記名シタル金員ノ全部又ハ幾部ヲ返シ能ハサルトキハ證文ニ記名シタル債主ヨリ證文ヲ落札シタル債主ニ對シ右ノ部分ノ金員ヲ身代持直次第返濟スヘキ旨ノ證文ノ裏書ヲ裁判所ヨリ受取ルヲ得ヘキ事
但此時裏書ニ身代限ニ遭ヒタル者ノ裏書證文ヲ持出ヘシ裁判所ニ於テハ之ニ金員ノ差引ヲ記載シ二通ノ證書ヲ一綴ニシテ下附スヘシ

第六條 證文ヲ落札シタル債主證文ニ記名シタル債主ヨリ金ヲ受取ルヘキ期限ニ至ラサル時證文ニ記載シタル債主即チ裏書ニ身代限ニ遭ヒシ人ニ身代ヲ持直シタルトキハ直ニ其人ニ對シ再ヒ金穀ノ返濟ヲ請求スルヲ得ヘキ事
(證文裏書離形略ス)

○利息制限法 明治十年九月 第六十六號布告

利息制限法左ノ通相定候條此旨布告候事

第一條 凡ソ金銀貸借上ノ利息ヲ分テ契約上ノ利息ト法律上ノ利息トス

第二條 契約上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ定メ得ヘキ所ノ利息ニシテ元金百圓以下ハ一ケ年ニ付百分ノ二十二^割百圓以上千圓以下百分ノ十五^{一分}千圓以上百分ノ十二^{二分}以下トス若シ此限ヲ超過スル分ハ裁判上無効ノモノトシ各其制限ニマテ引直サシムヘシ

第三條 法律上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ利息ノ高ヲ定メサル中裁判所ヨリ言渡ス所ノ者ニシテ元金ノ多少ニ不拘百分ノ六^分トス

第四條 第二條ニ依リ定限利息ノ外總テ人民相互ノ契約ヲ以テ禮金棒利等ノ名目ヲ用ル者アル中總テ裁判上無効ノ者トス

第五條 返還期限ヲ違フル中ハ負債主ヨリ債主ニ對シ若干ノ償金罰

金違約金科料等ヲ差出スヘキコトヲ約定スルコトアル中概シテ損害ノ補償ト看做シ裁判官ニ於テ該債主ノ事實受ケタル損害ノ補償ニ不當ナリト思量スル中ハ之レニ相當ノ減少ヲ爲スコトヲ得

○無利息貸金預ケ金地代手附金等利息請求方 六年三月 司法省 第四十三號 布告

預ケ金數	賣掛代金
諸職人手間代	地代
店賃	立替金數
敷金	證據金
受負金	手附金
小作金數	村入用ノ割合金數
雇人給金	飯料
諸品ノ損料	無利息貸金數

右ノ類ニテ金數等可相渡期限ニ臨ミ渡方延滞致候節ハ其期限ノ日且期限ナクシテ金數入用次第可相渡旨ノ約定ヲ爲シタル分ハ渡方ノ掛合ヲ受ケ候日ヨリ何レモ利足ヲ生シ可申筋ニ付其節ハ雙方示談ヲ以テ利足ノ歩合ヲ定メ證書受取渡シ致スヘシ若シ其儀ナクシテ遲テ訴訟ニ及フ時ハ明治六年第九十二號布告ニヨリ

處分致シ候條此旨可相心得候事
但債主利息ヲ請求シテ負債者承諾セサル時ニ限リ本文ノ處分
ニ及フ可シ若シ雙方示談整フカ又ハ債主ニ於テ請求ヲ爲サ
ル分ハ此例ニアラス(七年司法省第二十號
布達ヲ以テ但書追加)

○ 訴答文例 明治六年七月
第二百四十七號布告

今般訴答文例并附錄別冊ノ通被相定候ニ付來ル九月一日ヨリ原被告
人共訴答文式都テ此例ニ照準可致此旨相達候事

(別冊)

訴答文例

第一卷 原告人ノ訴狀

第一章 原告人ヨリ被告人住所身分ノ書付ヲ取ル事

第一條 訴訟ヲ爲サントスル原告人ハ其管轄ノ村役場ノ添翰ヲ以テ

第六百三十九號布告
ナリテ訴答文例ハ當分御
國人ノミ遵守セシム

被告人ノ現住管轄ノ村役場ニ至リ被告人ノ身分ノ書付ヲ取タル後
訴狀ヲ作ル可シ若シ住所氏名身分明瞭ナラハ其書付ヲ取ルニ及ハ
ス

住所トハ某府縣管下某國某郡某村住居又ハ寄留ト記スノ類身分トハ
官名役名華族士族神職僧尼百姓何職何商賣何渡世ト記スノ類
若シ一戸ノ本主ニ非スシテ子弟又ハ厄介ノ類ハ某ノ子弟又ハ某厄
介ト記ス可シ

第二條 原告人被告人ト管轄ヲ異ニシ道路隔絶ナラハ原告人我管轄
ノ村役場ニ願ヒ役場ノ文通ヲ以テ被告人ノ氏名住所身分ノ書付ヲ
取ルモ亦妨ケ無シトス但シ役場文通ノ入費ハ原告人ヨリ償フ可シ
但此章原告外國人ナル時ハ本人名前本國職分及寄留ノ處ヲ訴狀
中ニ記載シ次ニ被告ノ名前職分住所等委細記載ス可シ

第二章 (七年第七十五號布告ヲ
以テ代書人用ヒ方改定)

第三條

第四條
第五條

第三章 訴狀ノ定則ノ事

第六條 訴狀ヲ作ルニハ左ノ定則ニ循フ可シ

第一 訴狀ハ簡明確實ニシテ憑據ト爲ス可キ事件ヲ掲ケ文飾冗長ナラサルヲニ注意シ自己ノ想像ヲ以テ踪跡ナキ事件ヲ述ルヲ得ス

第二 一切ノ訴狀ハ首ニ原被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩書ニシ其末ニ年月日ヲ記シ原告人ト代書人トノ氏名連印スヘシ附錄第一號ヲ見合フ可シ

但外國人ノ爲ニハ第一章但シ書ヲ見ル可シ

第三 訴狀ノ末ニ署スル氏名ハ其本人自署ス可シ若シ自署スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記スヘシ

第四 狀訴ハ十六行ニシテ一行十五字詰ニ認メ正副ニ通テ具ス可

十七年三月司法省甲第壹號告示ヲ以テ訴訟用紙ハ

美濃又ハ同尺ノ紙ヲ用ヒ定數拾四行貳拾字詰ト

但外國人ノ訴狀ハ銘々英佛語ヲ以認ルヲ得ヘシ其日本翻譯ハ裁判所ニ於テ正副ニ通テ認メ其手数料ヲ取立ツヘシ

第五 被告人ノ住所呼出ヲ受ク可キ裁判所ノ八里ノ距離外ニ在ル時ハ其里數ヲ被告人ノ氏名ノ左側ニ記載ス可シ若シ八里以内ナル時ハ其里數ヲ記載スルニ及ハス

第四章 訴狀ノ書式ノ事

第七條 貸附米金等淹滞ノ訴狀

貸附米金等淹滞ノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ米金元利ノ計算ト貸渡シタル年月日トヲ標記シ次ニ證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ期ヲ過キテ返濟セサル事情ヲ書ス可シ附錄第二號ヲ見合フ可シ
田畠ヲ貸渡シタル小作米金又ハ物品ノ損料金又ハ諸種ノ立替金又ハ召抱人等ノ引資金又ハ職人等ノ前貸米金又ハ貸地貸家等ヲ受取ラントスルノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

但以下十九條迄原告外國人ナル時ハ其訴訟ノ趣意并願意ヲ簡明ニ記載ス可シ

但附錄第十八號ヲ見合ス可シ

第八條 預ケ米金淹滞ノ訴狀

預ケ米金淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ米金ノ員數ト預ケタル年月日トヲ標記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約シテ返濟セサル事情ヲ書ス可シ

借地等ノ敷金又ハ妻及ヒ養子女等ノ持參金又ハ實家若クハ親族等ノ仕送り金ヲ受取ントスルノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

第九條 賣掛代金淹滞ノ訴狀

賣掛代金淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ金高ヲ標記シ次ニ其帳面總計ノ高ヲ出シ之ニ被告人ノ證印アルヲ記入シ次ニ違約淹滞シタル事情ヲ書ス可シ附錄第三號ヲ見合ス可シ

賣掛代金又ハ旅籠代金賄代金等通帳附込帳等ニ被告人ノ證印ナキ

時ハ原告人ノ證據ト爲スヲ得ス

第十條 手附金賣買違約ノ訴狀

諸物品ヲ買ヒ手附金ヲ渡シ約定期限内ニ殘金ヲ渡サントスル時ニ至リ被告人違約シテ諸物品ヲ渡サ、ルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ買付タル物品ノ總高次ニ手附金ヲ渡シタル年月日及ヒ殘金ヲ渡シ物品ヲ受取可キ約定期限ノ年月日ヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ附錄第四號ヲ見合フ可シ

諸物品ヲ賣リ手附金ヲ受取り約定期限ニ至リ殘金ヲ受取ル可キ時ニ被告人違約シテ殘金ヲ渡サ、ルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ手附金ヲ受取りタル年月日及ヒ殘金ヲ受取り物品ヲ渡ス可キ約定期限ノ年月日ヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ附錄第五號ヲ見合ス可シ

第十一條 受負料淹滞ノ訴狀

諸職業受負淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ受負ヒタル年月日ト受負

ノ金高ト既ニ受取リタル金數ト未タ受取ラサル金數トヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ

第十二條 奉公人違約ノ訴狀

奉公人ニ年期ヲ約シ前金ヲ渡シ其年期未滿内ニ其家ヲ出テ還ラサル者ヲ取返サントスルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ抱入レタル年月日ト約定ノ年期ト前渡シノ金數トヲ標記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ

職業傳習ノ弟子職業練熟ノ後ハ禮奉公ノ年期ヲ約シ年期未滿内ニ其家ヲ出テ還ラサル者ヲ取戻サントスルノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

奉公人又ハ弟子奉公ノ者等其主人師匠ヨリ受取ル可キ給米金淹滞ノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

第十三條 專賣免許ヲ犯シタルノ訴狀

專賣ノ免許ヲ得タル者ヨリ他ノ模倣密賣スル者ヲ差留メントスル

ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ專賣免許ヲ得タル年月日ト免許ヲ受タル役所ノ名ト專賣免許ノ年限トヲ標記シ次ニ免許ノ證印又ハ證書ヲ寫載シ次ニ其密賣ノ事情ヲ書ス可シ

諸商工專賣ノ免許ナクシテ株式ト稱スル者ハ自己ニ妨アルヲ以テ他人ノ商業ヲ差留ル事ヲ訴ルヲ得ス

第十四條 商社中取引ノ訴狀

商社中甲ノ商人ヨリ乙ノ商人ニ對シ各種ノ取引ノ米金又ハ物品ノ類ニテ乘合商賣ト稱スル者モ證書確實ナル者ハ之ヲ訴ルヲ得可シ其訴狀ハ取引ノ模様ニ付キ各種ノ本條ニ照ス可シ

先ニ開キシ商社ニ後ニ開カントスル商社ノ妨クルヲアルヲ以テ之ヲ訴ルヲ得ス但シ專賣免許ヲ犯スヲ得サルノ法ト相抵觸スルヲナカル可シ第十三條ヲ見合ス可シ

第十五條 夫妻離別ノ訴狀

夫妻離別ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ夫妻ノ氏名生年及ヒ婚姻ノ年月

日ヲ標記シ次ニ其戸長役場へ届置キタル戸籍人別ヲ寫載シ次ニ離婚ヲ爲ス可キ理由ヲ書ス可シ

原告人夫ナレハ其父母若シ父母在ラサレハ祖父母祖父母在ラサレハ尊族ノ親尊族ノ親在ラサレハ同等ノ親同等ノ親在ラサレハ卑族ノ親卑族ノ親在ラサレハ近隣又ハ朋友ノ内二人以上ノ奥書連印ヲ爲ス可シ附録第六號ヲ見合ヌ可シ

原告人妻ナルモ前條ニ照シテ其父母親族等ヨリ訴フ可シ若シ事危急ニ出テ親族等ニ告ルニ暇ナキ時ハ自ラ訴フ事ヲ得可シ

第十六條 養子女ヲ離別スル訴狀

養子女ヲ離別スルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ養父母及ヒ養子女ノ生年ト其養子女トナシタル年月日ヲ標記シ次ニ原被雙方ノ戸籍人別ヲ寫載シ次ニ離別ス可キ理由ヲ書シ原告人親族在ラサレハ近隣又ハ朋友ノ内二人以上ノ奥書連印ヲ爲ス可シ
本生父母ヨリ養子女ヲ取戻サントスルノ訴狀モ本條ニ照ス可シ若

シ本生父母在ラサレハ其親族ヨリ訴ルヲ得ヘシ

養子女ヨリ養父母ヲ相手取りテ自ラ離別ヲ請フ訴ヲ爲スヲ得ス

第十七條 家督相續ノ訴狀

家督相續ヲ争フ訴狀モ住所氏名ノ次ニ亡父母ハ死亡ノ年月日生父母ハ其生年ト原告人生年トヲ標記シ次ニ其原被雙方ノ戸籍人別ト讓狀遺狀等ノ證書アレハ其全文ヲ寫載シ次ニ自己相續ス可キ條理ト被告人相續ス可キ條理ヲキコフヲ書ス可シ附録第六號ヲ見合ヌ可シ

第十八條 田畠山林等賣買違約ノ訴狀

田畠山林屋敷建家等ヲ買ヒ之ヲ受取ラントスルノ訴狀及ヒ貸地貸家ヲ取戻サントスルノ訴狀モ第十條ノ第一項ニ照ス可シ

田畑山林屋敷建家等ヲ賣リ之ヲ引渡シテ其代價受取ントスルノ訴狀モ第十條ノ第二項ニ照ス可シ

第十九條 經界ヲ争フノ訴狀

國郡鄉村山川田宅等ノ分界ヲ争フ訴狀モ住所氏名ノ次ニ其舊記繪

圖ノ枚數ヲ標記シ次ニ被告人ノ非理ヲ書ス可シ

舊記繪圖ノ寫ハ別冊ト爲シ目錄ヲ附シ各番號ヲ朱記ス可シ

繪圖ハ色ヲ以テ區別シ原告ノ區域ハ淺紅色ヲ用ヒ被告ノ區域ハ黃色ヲ用ヒ争フ所ノ區域ハ着色ヲ用ヒス其他ノ經界ハ別色ヲ用ユ可シ附錄第七號ヲ見合ヌ可シ

但第七條但シ書ヲ見ル可シ

第二十條 控告ノ訴狀

原被告人預審又ハ終審ノ裁判言渡ヲ受ケ其裁決ニ服セスシテ之ヲ上等ノ裁判所ニ控告セントスルノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ訴訟ノ題目ト其年月日ト裁判所ニ呼出サレタル度數其年月日ト認庭ニ臨ミタル裁判役ノ氏名ヲ知ルヲ得可キニ於テハ之ヲ記載シ次ニ其裁判言渡書ノ寫ト裁決ニ服セサルノ旨趣トヲ書シ且ツ前訴狀ノ寫ヲ別冊ト爲シ訴出可シ但シ控告人ノ住所ト控告ヲ爲ス裁判所トノ距離八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ得ルノ外裁決ノ言渡ヲ受タル日ヨリ三ヶ月

十年第十九號布告控訴上
告手續第五條第十五條參
看本類ニ載ス

ノ期限ヲ過ル時ハ控告ヲ爲スヲ得ス

預審又ハ終審ノ裁判以前ノ場合ニ於テ其裁判役ノ曲庇壓制等アルヲ以テ原被告人ノ上等ノ裁判所ニ申告スル者モ亦本條ニ照ス可シ

第五章 一冊ノ訴狀ハ一事件ニ止ル可キ事

第二十一條 原被告人共人員多少ニ拘ラス訴狀ハ一事ヲ一冊ニ書スルニ限ル可シ又原告人一名ニシテ同時ニ數件ヲ訴フルモ訴狀ヲ各冊ニ作ル可シ

第六章 一冊ノ訴狀ニシテ二件以上ヲ合ヌヲ得ル事

第二十二條 貸借二事以上ニシテ原被告人共別人ニ非レハ一冊ノ訴狀ニシテ二件以上ヲ合ヌヲ得可シ

第七章 原告人連名ノ訴狀ノ事

第二十三條 債主連名ノ證文ヲ以テ米金等ヲ貸附タル訴狀ハ連名ヲ以テ訴フ可シ若シ債主連名三人ナルチ一人ニシテ訴フル時ハ他ノ

一人ヨリ依頼ノ證書ヲ以テ訴フ可シ附第八號ヲ見合ヌ可シ

第二十四條 債主二人以上ニシテ管轄ヲ異ニスル者アラハ甲ノ管轄ニ訴ルモ乙ノ管轄ニ訴ルモ其便宜ニ從フ可シ

第八章 連名ノ被告人ヲ訴フル事

第二十五條 負債主連名ノ借用證文ヲ以テ貸渡シタル米金等ノ訴狀ハ連名ノ人數ヲ盡ク相手取ル可シ

第二十六條 負債主連名中若シ失踪死亡等ニテ相續人ナキ者アラハ連名ノ末ニ其人名ヲ記シ年月日失踪死亡等ノ事ヲ其者ノ管轄戸長某ヨリ承ルト附載スヘシ附錄第九號ヲ見合ヌ可シ

第二十七條 負債主ノ連名中管轄ヲ異ニスル者アラハ甲ノ管轄ニ於テ審判スルヲ願フモ乙ノ管轄ニ於テスルヲ願フモ原告人ノ情願ニ任ヌ可シ

第九章 讓證文ヲ以テ訴ル事

第二十八條 甲ヨリ乙ニ貸シ又ハ預ケタル米金ヲ甲ヨリ丙ニ讓リタ

九年第九十九號布告金穀借用證書他人へ讓渡手續參看本紙ニ載ス

ルニ乙ヨリ丙ニ返濟セスシテ丙ヨリ乙ヲ相手取り其米金ヲ受取ントスル訴狀モ住所氏名ノ次ニ甲ヨリ丙ニ讓リタル證文ヲ寫載シ若シ甲ヨリ丙ニ讓リタル證文無レハ甲ト乙ノ關係ニシテ乙ト丙トノ關係ナシトス故ニ丙ヨリ乙ヲ相手取ルヲ得ス附錄第十號ヲ見合ヌ可シ

第二十九條 父母祖父母等ノ貸附タル米金等ハ其家ノ相續ヲ爲シタル者ニ非レハ其子孫ニシテ貸附證文ヲ所持スト雖モ父母祖父母等ノ讓渡シタル證書ナキ時ハ之ヲ訴ルヲ得ス

第十章 (九年第十八號布告ヲ以テ代理人ノ條ヲ廢止ス)

第三十條

第三十一條

第三十二條

第二卷 被告人ノ答書

第一章 答書ノ定則ノ事

第三十三條 答書ヲ作ルニハ左ノ定則ニ循フ可シ

第一 被告人裁判所ノ呼出狀ト共ニ原告人ノ訴狀ヲ受取ル時原告人ノ陳述スル所條理アラハ速ニ熟議シ原告人之ヲ許諾セハ解訟ヲ請フ事ヲ得ヘシ其場合ニ於テハ代書人ヲシテ熟議解訟ノ答書ヲ作ラシメ之ヲ裁判所ニ呈ス可シ第四十七條及四十
八條ヲ見合ヌ可シ

第二 原告人ノ述ル所非理不實ニシテ辨解ス可キ確證アラハ其書類ノ全文ヲ寫載シ次ニ非理不實ノ事ヲ書ス可シ

第三 答書ノ首ニ被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩書ニシ答書ノ末ニ年月日ヲ記シ被告人ト代書人トノ氏名連印アル可シ附錄第
十三號
ヲ見合
ヌ可シ

第四 答書ノ末ニ署スル氏名ハ其本人ノ自筆ヲ用ユ可シ若シ本人自署スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記ス可シ

第五 答書ハ十六行ニシテ一行十五字詰ニ認メ正副二通ヲ具ス可シ

十七年三月司法省甲第一
號告示ヲ以テ訴訟用紙ハ
美濃又ハ同尺ノ紙ヲ用ヒ
定式式拾四行貳拾字詰ト

第二章 (七年第七十五號布告ヲ以テ代書人用ヒ方改定)

第三十四條

第三章 (九年第十八號布告ヲ以テ代書人ノ條ヲ廢止ス)

第三十五條

第三十六條

第三十七條

第四章 原告人ノ返リ證文ヲ所有シタル答書ノ事

第三十八條 負債主米金等ヲ返濟スルニ債主原ノ證書ヲ還付セサル

ヲ以テ二重ノ催促ヲナス訴訟ハ被告人其答書ニ返リ證文返證文ハ
原ノ證書ヲ還付セスシテ其米金
受取ノ證書ヲ交付スルヲ云フヲ寫載シ次ニ原告人二重ノ催促ヲ爲シタル旨ヲ書ス可シ

第三十九條 原告人米金等ヲ受取リタルノミノ證書ニシテ貸付ノ米金ヲ受取リタル確證ノ文字ナク又ハ他ノ憑據トス可キ證跡ナキ時ハ其米金ヲ受取タルノミノ證書ヲ以テ返リ證文ト看做ス可キ得ス

第五章 原告人ヨリ返済延期ノ約ヲ破リタル答書ノ事

第四十條 借用ノ米金等ヲ返済スヘキ期限ニ至リ負債主ヨリ債主ニ熟議シテ返済延期ノ約ヲ結ビ其證書ニ押印ヲ爲シタル債主ヨリ其約ヲ破リ本證文ニ據リ訴ヘタル答書ハ對談一札對談ニ札トハ返済延期ノ證書ヲ云フアルコトヲ記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ原告人ノ約ヲ破リタルコトヲ書ス可シ

第四十一條 負債主ヨリ返済延期ノ約ヲ破リタル事件ヨリ起リ債主本證文ニ據リ訴出タル原由アル時ハ負債主ナル者己レヨリ約ヲ破リタル返済延期ノ證書ヲ以テ原告人破約ノ證トナスコトヲ得ス

第六章 原告人證書ヲ偽造シタル答書ノ事

第四十二條 被告人ノ證書ヲ原告人偽造シタル答書ハ其偽造ヲ證スル爲ニ管轄町ノ役場ニ届ケ置タル年月日ノ人別帳ノ寫ヲ記載シ次ニ此人別帳ノ印ト證書ノ印ト相違シタル旨ヲ書ス可シ

第七章 經界ヲ爭フ答書ノ事

第四十三條 國郡鄉村山川田宅等ノ分界ヲ爭フ答書ノ方法ハ第十九條ヲ照ス可シ

第八章 既ニ訴ヘラレタル事件ニ未タ訴ヘサル事件ヲ接續スル事

第四十四條 負債主米金ヲ返済ス可キ期限ヲ過キテ返済セサルヲ訴ヘラレタルニ別ニ其債主ヨリ受取ル可キ米金アリテ其受取可キ期限モ亦タ過キ未タ訴ヘスト雖モ雙方均シク返済ノ約期ヲ破リタルヲ以テ兩件ヲ接續シ差引ノ計算ヲ爲サントスル答書ハ負債主ヨリ其別ニ受取ル可キ米金ノ證書ヲ寫載シ次ニ差引計算ヲ爲スノ旨ヲ書ス可シ

第四十五條 負債主甲某債主乙某ヨリ借用シタル米金ヲ返済スヘキ期限ヲ過キテ訴ヘラレタルニ當リ甲某其借用シタル米金ハ更ニ丙某ニ貸附ケ其期限ヲ過キ返済セサルヲ以テ既ニ訴ヘラレタル乙某ノ事件ト未タ訴ヘサル丙某ノ事件トヲ接續シテ丙某ノ返済

ヲ爲ス可キ米金ヲ以テ乙某ニ返濟セシメテ答ルヲ許サス何トナレ
ハ乙ノ貸ス所ノ者甲ニシテ丙ニ非ス丙ノ借ル所ノ者ハ甲ニシテ乙
ニ非ラサルヲ以テナリ

第九章 對決前熟議解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四十六條 被告人訴狀ニ對シ辨解スルヲ能ハサル者ハ速ニ原告人
ト熟議シ對決前ニ解訟ヲ爲シタル答書ハ原告人承諾ノ奥書連印ヲ
爲サシム可シ附錄第十四號

第四十七條 前條ノ場合ニテ貸借淹滞ノ訴ニ起ル解訟ノ答書ハ償ノ
既濟又ハ未濟ト雖モ更ニ延期ノ約ヲ結ヒタル等ハ前條ニ照ス可シ
各種違約ノ訴訟ハ原被雙方ノ熟和ニ至リ又ハ更ニ改定ノ條約ヲ立
テタル等モ亦前條ニ照ス可シ

第十章 對決前返濟延期ノ約定ヲ爲シタル答書ノ事

第四十八條 原被告人對決審判前ニ被告人ヨリ負債ヲ返濟スルノ延
期ヲ請ヒ原告人之ヲ承諾シ其審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至リ完ク返

濟スルノ後解訟ノ證書ヲ呈セントスル者ハ其答書ニ延期ノ旨趣ヲ
書シテ原告人承諾ノ奥書連印ヲ爲サシム可シ附錄第十五號

第十一章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償ノ延期ヲ約シテ
解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四十九條 原被告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告
人ノ負債ヲ延期代償センコトヲ請ヒ原告人之ヲ承諾セハ熟議解訟ノ
答書ニ其延期代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及ヒ原告人ノ奥書連印ヲ爲
サシム可シ附錄第十六號

第十二章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償延期ノ約定ヲ爲
シタル答書ノ事

第五十條 原被告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告人
ノ負債ヲ延期代償センコトヲ請ヒ原告人之ヲ承諾シテ其審判ヲ仰カ
ス延期ノ日ニ至リ完ク返濟スルノ後解訟ノ證書ヲ呈セントスル者
ハ其答書ニ延期代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及ヒ原告人ノ奥書連印ヲ

爲サシム可シ附録第十七號

ヲ見合ヌ可シ
(訴答文例附録雛形畧ス)

○訴答文例ハ御國人ノミ遵守明治六年十月
第三百三十九號布告

本年七月第貳百四十七號布告訴答文例ハ詮議ノ次第モ有之當分御國人ノミ遵守候儀ト可相心得此旨布告候事

○訴答文例中代書人用ヒ方明治七年七月
第七十五號布告

明治六年七月第百四十七號布告訴答文例中原告人被告人訴狀答書ヲ作ルニ必ス代書人ヲ用フヘキ旨記載候處自今左ノ通改定候條此旨布告候事

一原告人被告人訴狀答書及ヒ雙方往復文書ヲ作ルニ代書人ヲ撰

ミ代書セシムル共又ハ代書人ヲ用ヒスシテ自書スル共總テ本人ノ情願ニ任スヘキ事

一原告人被告人ニテ代書人ヲ用ヒサル時ハ親戚又ハ朋友ノ者ヲ

以テ差添人トナシ訴狀答書等ヘ連印セシムヘキ事

但訴答文例中本文ト相抵觸スル廉々ハ總テ廢止ノ儀ト可相心得事

○訴訟手續ニ差支サル者ハ差添人ニ及ハス明治八年二月
第十三號布告

明治七年七月第七十五號布告訴答文例中改定原告人被告人ニテ代書人ヲ用ヒサル時ハ親戚又ハ朋友ノ者ヲ以テ差添人トナシ訴狀答書等ヘ連印セシムヘキ旨記載候處自今原告人被告人訴訟手續ニ差支サル者ハ差添人ニ不及候條此旨布告候事

○詞訟勸解ニ付代人受任明治十七年一月
第一號布達

明治十三年五月司法省甲第貳號布達左ノ通改正ス
詞訟又ハ勸解ニ付已ムヲ得ス代人ヲ出サントスル者ハ親屬又ハ相當ノ者ヲ撰ミ管轄裁判所ノ許可ヲ受ク可シ但代人タル者同時ニ二人以上ヨリ二件以上ヲ受任シ其他不適當ノ所爲アリト認ムル時ハ裁判所ニ於テ之ヲ差止ムルコトアル可シ

○ 出訴期限規則 明治六年十一月 第三百六十二號 布告

金穀貸借ヲ始メトシ物品賣買ヨリ其外種々ノ取引等ニ至ルマテ雙方ノ者互ニ受取渡ノ期限ヲ定メ條約ヲ結ビ置キタルニ一方ノ者其條約ヲ破リタル時ハ早速裁判所へ出訴イタシ不苦候處延期ノ勘辨ヲ加ヘ出訴ヲ見合候者モ有之是亦慈愛ノ人情ニテ尤ノ事ニ付早速出訴イタシ候トモ又ハ勘辨ヲ加ヘ候トモ人民ノ自由ニ任セ出訴期限ノ法則不相定候處右延期勘辨中數多ノ歲月ヲ過去リ出訴致シ候時ハ貸方借方請人證人ノ内死亡又ハ轉住又ハ失踪等ノ者モ有之事理曖昧ニ立至リ裁判上不相合不少候ニ付訴訟ノ事柄ニ因リ夫々出訴ノ期限ヲ定候條來明治七年一月一日ヨリ後ニ結ビタル條約期限ニテ右出訴期限ヲ過去リ出訴セサル者ハ自分條約ヲ取消シタル者ト看做シ受取ルヘキ者

ハ受取ヘキ權利ヲ失ヒ引渡スヘキ者ハ引渡スヘキ義務ヲ免レ候事ト相定メ候ニ付若シ出訴致シ候トモ取上不致候此旨布告候事

出訴期限規則

第一條

- 一 學藝ノ授業料
- 一 旅籠料
- 一 運送賃
- 一 飲食料
- 一 手附金
- 一 商人互ノ賣掛金
- 一 職人ノ手間代金
- 一 日雇人ノ給料
- 一 請負金
- 一 芝居等ノ木戸錢又ハ棧敷錢等

一男女藝者ノ揚代金

右ハ六箇月限

第二條

一醫師ノ診診及ヒ藥料

一授業師ヨリ門弟ニ給與シタル飲食料

一商人ヨリ商人ニ非サル者ヘノ賣掛代金

一一箇年期マテノ奉公人給料

右ハ一箇年限

第三條

一期限ヲ定メタル貸附米金及ヒ利息アレハ其利息

一期限ヲ定メタル預米金及ヒ利息アレハ其利息

一家屋及ヒ土地ノ借賃

一小作米金

一證據金

一敷金

一物品ノ借賃又ハ損料

一養育料

一七ヶ年期マテノ奉公人給料

一期限ナキ年金及ヒ一生涯ノ年金

右ハ五箇年限

第四條 條約證書中期限ナキ者ハ出訴ノ日ヲ期限ト看做シ候故何時
出訴致シ候テモ苦カラサル事

第五條 従前取結ヒタル條約ニテ明治六年十二月三十一日以前ニ條
約期限ノ切レタル事件ハ右明治六年十二月三十一日ヲ條約ノ期限
ト看做スヘシ又従前取結ヒタル條約ニテ其期限ノ明治七年一月一
日後ニ及フ事件ハ條約期限ノ切レタル翌日ヨリ第一條第二條第三
條ノ種類ニ從ヒ出訴ノ期限ヲ起算致スヘキ事

但明治五年壬申第三百號布告第三條ニ定メタル規則ハ格別ナリ

トス

十四年第二號布達ニ依リ
府縣裁判所トアルヲ始審
裁判所ト改稱ス

○勸解中出訴期限満期者ノ處置九年四月十四號達
治安裁判所或ハ裁判所支廳ニ勸解願出候者勸解中出訴期限満期
ノ者處置方左ノ通可相心得此旨相達候事十四年第二號布達ヲ以テ區裁判所ヲ治安裁判所ト改稱ス

第一條 勸解出願ノ者勸解中ニ出訴期限ノ満期ニ至ル者ハ其勸
解不調ノ翌日ヨリ滿三十日迄ハ出訴期限ノ猶豫ヲ與フ可シ
第二條 勸解調ハサル時右滿三十日迄ニ始審裁判所ニ出訴ヲ爲
サ、ルニ於テハ其事件ニ付訴スルノ權利ヲ拋棄シタルト看
做ス可シ

○地所買入書入建物船舶書入質ノ公證ヲ受ケタルモノハ出訴期
限ナシ十八年六月二十號達
内務省甲第二十號達
地所買入書入建物船舶書入質ノ公證ヲ受ケタルモノハ出訴期限
無之旨今般太政官ノ裁令ヲ經候條爲心得此旨相達候事

○負債者失踪後ノ訴訟成例明治八年一月第六號布告

民法裁判上負債者失踪後ノ訴訟ハ失踪後三十六ヶ月ノ時間ハ採上ケ
サル成例ニ有之候處本年三月一日ヨリ以後ハ左ノ通相改メ候條此旨
布告候事

第一條 債主定約期限未滿内ニ負債者ノ失踪ヲ知ル時ハ定約満期ニ
至リ直ニ裁判所へ訴出ツ可キ事

第二條 債主未タ負債者ノ失踪ヲ知ラス定約満期又ハ出訴期限將ニ
盡ントスルヲ以テ裁判所へ出訴シ裁判所ノ奥書ヲ以テ負債者ニ
掛合始テ其失踪ノ事ヲ知ル時ハ右奥書訴狀ヲ再呈シ其旨届出ツ可
キ事

第三條 前條々ノ場合裁判所ニ於テハ一應訴狀採上ケ直ニ失踪者所
管ノ戸長へ申付失踪ノ年月日ヲ訊明シタル上債主差出シタル證書
ニ負債者何年何月何日家出ノ未行衛相分ラサルニ付追テ本人見當
ルカ又ハ三十六ヶ月ノ満月後跡相續ヲ爲ス可キ者ニ掛リ此裏書證

負債者失踪後ノ訴訟成例

六年第三百六十二號布告
出訴期限ハ本類ニ載ス

書ヲ以テ再訴致ス可キ旨ヲ記載シ訴狀下戻ス可キ事

第四條 債主於テ前條ノ裏書證書ヲ受取置キタル上ハ本人見當リ又
ハ搜索三十六ヶ月ノ時限ハ明治六年十一月 第三百六十二號布告出訴
期限ノ限内ニハ加算致サ、ル事

○控訴上告手續 明治十年二月
第十九號布告

沿革略記

明治五年十一月司法省第四十六號達ヲ以テ地方裁判
所及ヒ地方官ノ裁判ニ服セサル時ハ司法省裁判所ニ
訴ルヲ許ス○七年五月第五十四號布告ヲ以テ民事控訴略則
ヲ定ム○八年五月司法省第六號布達ヲ以テ五年同省第四
十六號達ヲ廢ス○同年同月第九十三號布告ヲ以テ控訴上告
手續ヲ定ム○同年同月第九十四號布告ヲ以テ前ノ民事控訴
略則ヲ廢ス○十年二月第十九號布告ヲ以テ前令ヲ改正ス是
レ現行法ナリ

明治八年五月 第九十一號布告大審院諸裁判所職制章程同年同月第九十三

大審院諸裁判所職制章程
ハ官制改革ニヨリ消滅

號布告控訴上告手續別冊ノ通改正候條此旨布告候事

但巡回裁判規則判事職制通則ハ刪除候事

(別冊)

控訴上告手續

第一章

控訴ノ事

第一條 凡ソ始審裁判所ノ初審ニ服セスシテ再ヒ控訴裁判所ニ訴ヘ
覆審ヲ求ムル者之ヲ控訴ト云(十四年第二號布達ヲ以テ地方裁判所
ルヲ控訴裁判所ト
改稱ス以下倣之)

第二條 控訴ハ民事ニ止マリ刑事ニ及ハス

第三條 控訴ハ一タヒスルヲ得再ヒスルヲ得ス

第四條 始審裁判所ニ於テ裁判ノ言渡ヲ爲シタル時原告被告ノ雙方

又ハ一方ノ者其裁判ニ不服ナル時ハ裁判言渡ヨリ第七日マテニ裁

官渡ノ翌日 裁判言渡ノ事理ヲ熟考シ其翌日ニ至リ控訴スルヲ得

ヘシ但シ訴訟ノ案件商事ニ係リ急速ニ控訴スルコトヲ要スルノ場合ニ於テハ七日内ト雖モ控訴スルコトヲ得

第五條 始審裁判所ノ裁判言渡ヨリ二箇月^{三十日ヲ以テ一月トス}ヲ過ルキハ控訴スルコトヲ許サス但シ始審裁判所ヨリ控訴裁判所ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キキハ期限二箇月ノ外八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ増スヘシ
(十五年第二十一號布告ヲ以テ三月月ヲニヶ月ト改ム)

第六條 控訴ヲ爲ス者ハ其初審ヲ受ケタル始審裁判所ニ届ケ出ツヘシ但シ添翰ヲ乞フニ及ハス

第七條 前條ノ届ヲ受ケ取リタル始審裁判所ハ裁判言渡ノ執行ヲ停止スヘシ若シ控訴裁判所ノ請求アル時ハ始審裁判所ニ於テノ訴狀答書口書裁判見込等ヲ差出スヘシ

第八條 控訴裁判所ニ捧クルノ訴狀ハ訴答文例ニ照準スヘシ

第二章

上告總則ノ事

六年第二百四十七號法律
答文例本類發着

第九條 各裁判所ノ終審ヲ不法ナリトシ大審院ニ向テ取消ヲ求ムル者之ヲ上告ト云

第十條 上告スルコトヲ得ルノ事件ハ

第一 裁判所管理ノ權限ヲ越ユ

第二 聽斷ノ定規ニ乖ク

第三 裁判法律ニ違フ

第十一條 大審院ハ上告ヲ受クルノ所ニシテ控訴ヲ受クルノ所ニアラス故ニ控訴スヘキノ事ヲ以テ誤テ上告スル者アルモ之ヲ斥ケテ理セス

第十二條 陸海軍ノ裁判權限ヲ越ル者ハ之ヲ大審院ニ上告スルコトヲ得

第十三條 凡ソ上告シタル者已ニ大審院ノ判決ヲ經レハ更ニ訴フルコトヲ得ス

第三章

刑事ノ上告ハ治罪法頒布ニ付消滅

陸海軍ノ上告ハ陸軍治罪法海軍治罪法頒布ニ付消滅

民事上告ノ事

第十四條 民事ノ上告スルヲ得ル者ハ已ニ控訴裁判所ニ控訴シ其審判ヲ經タル者ニ限ル

第十五條 上告ヲ爲ント欲スル者ハ裁判言渡ヨリ二月内ニ上告狀ヲ大審院ニ捧クヘシ而シテ同時被告人ニ通知スルヲ要ス若シ原裁判所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キ時ハ二月ノ外八里毎ニ一日ヲ増ス此定期ヲ過レハ上告スルヲ許サス
上告狀中ニハ必ス左ノ事實ヲ記載スヘシ

- 第一 原告人ノ住所身分氏名
- 第二 被告人アレハ其住所身分氏名
- 第三 被告人ノ住所身分氏名
- 第四 證人又ハ引合人アレハ其住所身分氏名
- 第五 始審裁判所ニ出訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日

第六 控訴裁判所ニ控訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日

上告狀ハ正本一冊及ヒ副本五冊ヲ差出スヘシ
上告狀ニハ必ス左ノ書類ヲ添ヘ差出スヘシ

- 第一 始審裁判所ニ於テノ訴狀并ニ答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫
- 第二 控訴裁判所ニ於テノ訴狀并ニ答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫
- 第三 上告狀中ニ憑據トナス書類ノ寫ノ各書類ニ番號ヲ朱書シ編シテ一冊ト爲シ又ハ葉數多ニ付編シテ幾冊ト爲シタル者
- 右ノ訴狀又ハ答書及ヒ憑據ノ書類ノ寫ヲ所持セサル者ハ原裁判所ニ出願シ裁判所ノ簿冊ヲ訟庭ニ取下ケ見坐ノ目前ニ於テ之ヲ寫シ取ルヲ得ヘシ

若シ原裁判所ニ於テ書類寫取ノ出願ヲ許サルニ因リ上告人其寫ヲ出シ能ハサル時ハ其旨ヲ上告狀中ニ記載スヘシ

第十六條 上告者ハ其上告狀ニ添テ金拾圓ヲ大審院ニ預クヘシ若シ其金高ヲ預ケサルキハ上告ヲナスコトヲ得ス

第一 若シ上告ヲ取上ケサルキハ其預リ金ヲ没入ス

第二 若シ上告ヲ取上ケ原裁判ヲ破毀シタル時ハ預リ金ヲ還付ス

第三 若シ上告ヲ取上ケ被告人ト對審シタルノ後之ヲ斥ケテ原裁判ヲ破毀セサル時ハ預リ金ヲ没入シ又訴訟入費規則ニ照シ

テ被告人ノ費用ヲ償ハシム 被告人トハ上告者ノ相手方ヲ云

第十七條 上告ヲ爲ス者ハ先ツ原裁判所ニ届出ツヘシ原裁判所ニ於テハ書類ヲ二日內ニ大審院ニ遞送スヘシ

第十八條 上告ニ付テハ裁判ノ執行ヲ停メス大審院已ニ原裁判ヲ破毀スルニ至レハ即日原裁判所ニ通報シテ 大審院ヨリ郵便ヲ發ス 執行ヲ止メ更ニ審判落着ノ日ニ至テ前ノ執行ヲ取消シテ後ノ裁判ヲ執行セシムヘシ

九年司法省甲第五號布達
訴訟入費規則參看本
類ニ載ス

但内國人ヨリ裁判外ノ人民ニ對シ又ハ裁判外ノ人民ヨリ内國人ニ對スル上告ハ原裁判ノ執行ヲ停ムヘシ

第十九條 上告狀ハ原告人自ラ之ヲ捧クルモ又ハ代理人ヲシテ之ヲ捧ケシムルモ本人ノ意ニ任ス

第二十條 大審院ニ於テ判事審聽シ不當ナル上告ナリト決スル時ハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ受理セサルノ旨ヲ言渡スヘシ

第二十一條 判事審聽シテ當然ノ上告ナリトシ之ヲ判決スヘキ旨ヲ言渡シタル時ハ其後二日內ニ被告人呼出狀ヲ仕出ス可シ此ノ呼出狀ニハ上告狀ノ副本ヲ添フヘシ

第二十二條 被告人ハ呼出狀ヲ受取リタルヨリ三十日內ニ答辨書ヲ作り自身又ハ代理人ヨリ之ヲ大審院ニ捧クヘシ但被告人ノ住所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キキハ八里毎ニ一日ヲ増スヘシ

第二十三條 大審院ニ於テ被告人ノ答辨書ヲ受取リシキハ院長ヨリ判事ノ中ニ於テ一人ノ主任ヲ命シ一件書類ヲ取纏メ遲緩ナク一件

始末書ヲ作ラシメ然ル後ニ原被對審ノ日ヲ豫定シ二日以前ニ原被對審ノ呼出狀ヲ原被雙方ニ送達スヘシ

第二十四條 原被對審ノ節ハ判事席ニ臨ミ最初ニ主任判事一件始末ヲ宣讀シ次ニ原告ノ陳述次ニ被告ノ陳述次ニ原被交互ノ論辯ヲ審聽シ而シテ後ニ原告人上告理アリト決スルキハ何々ノ理由ヲ以テ原裁判所ノ裁判ヲ破毀スルニ付更ニ某裁判所ニ於テ裁判ヲ受クヘキ旨又ハ大審院ニ於テ裁判スヘキ旨ヲ言渡スヘシ

第二十五條 若シ原告人ノ上告理ナシト決スルキハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ斥クル旨ヲ言渡スヘシ

第四章

刑事上告ノ事(刑事上告ハ治罪法ニ依リ消滅ス)

○外國人ニ係ル民事訴訟手續八年五月甲第三號布達
內國人ヨリ外國人ニ係ル民事訴訟手續九年三月布達
告候事(九年司法省甲第十號布達)
以下民事訴訟ノ手續ニ準テ之ヲ施行ス

內國人原告ニテ外國人ニ係ル民事ノ訴訟ハ原告人其事由ヲ各開港開市場ノ府縣廳ニ申出其廳ノ添狀ヲ得テ被告人管轄ノ各國領事ニ申訴スヘシ

○外國人ニ係ル刑事及民刑附帶ノ訴訟九年九月甲第十二號布達
明治八年當省甲第三號ヲ以テ布達候內國人ヨリ外國人ニ係ル民事刑事ノ訴訟手續中今般左ノ通相定候條此旨布達候事

第一條 內國人原告ニテ外國人ニ係ル民事并ニ民刑附帶ノ訴訟ハ檢事其他ノ警察官東京ニテハ警視廳其ニ於テ之ヲ承ケ直ニ被告人管轄ノ外國領事ニ照會シ裁判ヲ求ムヘシ
第二條 前條ノ場合ニ於テ犯罪ノ爲メ損害ヲ受タル者其償ヲ求ル民事ノ訴ハ總テ本人ノ望ニ任スヘシ

○民事訴訟用印紙規則明治十七年二月第五號布告

沿革略記 明治八年十二月第百九十六號布告ヲ以テ訴訟用印紙規則ヲ制定ス○十七年二月第五號布告ヲ以テ前令ヲ廢シ民事訴訟用印紙規則ヲ制定ス是レ現行法ナリ

民事訴訟用印紙規則別紙ノ通制定シ明治十七年四月一日ヨリ施行ス

但明治八年^{十二月} 第百九拾六號布告訴訟用罫紙規則ハ右施行ノ日ヨリ廢止ス

(別紙)

民事訴訟用印紙規則

第一條 凡ソ民事訴訟ノ書類ニハ此規則ニ從ヒ印紙ヲ貼用スルモノトス

第二條 訴狀ニハ正本一通ニ付請求ノ金額若クハ價額ニ應シ左ノ區別ニ隨ヒ其受付ノ時ニ於テ印紙ヲ貼用ス可シ

金額 價額	五圓マテ	貳拾錢
同	拾圓マテ	三拾錢
同	貳拾圓マテ	六拾錢
同	五拾圓マテ	壹圓五拾錢
同	七拾五圓マテ	貳圓貳拾錢
同	百圓マテ	三圓

同 二百五拾圓マテ 六圓五拾錢

同 五百圓マテ 拾圓

同 七百五拾圓マテ 拾三圓

同 千圓マテ 拾五圓

同 貳千五百圓マテ 貳拾圓

同 五千圓マテ 貳拾五圓

同 五千圓以上ハ千圓マテ毎ニ貳圓ヲ加フ

控訴ニ於テハ右半額上告ニ於テハ全額ノ印紙ヲ加貼ス可シ

第三條 人事其他金額ニ見積ル可ラサルモノハ三圓ノ印紙ヲ貼用ス可シ其控訴上告ニ於テ加貼スルハ前條ニ同シ

但人事ニ於テハ極貧ノ者ニシテ戶長ノ證書ヲ所持スル者ハ裁判官ニ於テ印紙ノ貼用ヲ免スルコトアル可シ

第四條 左ノ書類ニハ正本壹通ニ付貳拾錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

答辯書證據物寫辯駁書辯論書上申書陳述書等

證人鑑定人評價人引合人等ノ呼出ヲ請求スル願書

審判ノ延期ヲ請求スル願書

第五條 左ノ書類ニハ正本壹通ニ付五拾錢ノ印紙ヲ貼用スヘシ

官吏ノ臨檢ヲ請求スル願書

財産差押又ハ物品公賣ヲ請求スル願書

執行命令書ヲ請求スル願書

身代限ノ處分ヲ請求スル願書

第六條 裁判言渡書ノ謄本ヲ下付スル時差出ス受取書ニハ其謄本壹枚五錢其他ノ謄本ヲ下付スル時差出ス受取書ニハ其謄本壹枚三錢ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用ス可シ

但裁判言渡書ノ謄本ハ壹枚十二行一行十二字詰其他ノ謄本ハ壹枚二十行一行十八字詰トス

第七條 勸解ニ於テハ一件毎ニ勸解表ニ署名ノ時貳拾錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第八條 此規則ニ依リ貼用シタル印紙ノ代價ハ曲者ヨリ直者ニ辨償ス可キモノトス

第九條 印紙ノ種類定價及ヒ貼用方ハ布達ヲ以テ之ヲ定ム

第十條 印紙ハ管轄廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣セシム其他ニ於テ賣買スルコトヲ得ス

第十一條 官許賣捌所外ニ於テ印紙ヲ販賣シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス其情ヲ知テ之ヲ買取シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス

第十二條 前條ノ規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不論罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

○印紙ノ種類定價及貼用方第十七年二月四號布達
今般第五號布告ヲ以テ訴訟用印紙規則制定候ニ付印紙ノ種類定價及ヒ貼用方左ノ通之ヲ定ム

淡黑色印紙	一枚	三錢
黑色印紙	同	五錢
赭色印紙	同	拾錢
茶褐色印紙	同	五拾錢
黃色印紙	同	壹圓
青色印紙	同	五圓
橙黃色印紙	同	拾圓
綠色印紙	同	拾五圓
嬌栗色印紙	同	貳拾圓
印紙ハ訴狀其他書類ノ正本ニ貼用シ貼用者ノ印章ヲ以テ消印ス可シ		

○訴訟入費償却規則 明治九年四月 司法省甲第五號布達

沿革略記 明治五年九月司法省第十四號布達ヲ以テ訴訟入費償却假規則ヲ定メ從來ノ訴訟入費原被共自費或ハ町村費ヲ以テ充用シ來ルヲ向後一切曲者ノ負擔ニ歸セシム○同年同省無號達ヲ以テ右施行日限ヲ定ム○同年同省第十七號布達ヲ以テ訴訟入費償却假規則定限ヲ定ム○同年

十一月一月司法省丁第一號達ヲ以テ本規則ハ當分外國人民ヘハ施行セズ但各國ノ内ニ該規則施行ノ分ハ此限ニテス

十七年司法省甲第五號達示ヲ以テ一枚拾四行一ト爲ス

訴訟入費償却規則左ノ通改正候條此旨布達候事

第一條 訴狀其外書類認料 一枚十六行十五字詰ニ付拾錢 但シ一枚以下モ同價

右定限

- 第一 原告人ノ訴狀ノ正本副本
- 第二 被告人ノ答書ノ正本副本
- 第三 訴狀亦ハ答書中ニ記載シ難キ證據ノ書類ノ寫
- 第四 審判中ニ原告又ハ被告ヨリ差出シタル證據ノ書類ノ寫
- 第五 訴訟中訴狀ニ關係スルノ事件ニ付原被雙方往復ノ文書
- 第二條 證人并ニ引合人手當 一日ニ付五拾錢(十二年司法省甲第二號布達ヲ以テ引合人ノ下差添人ノ三字ヲ刪ル)

但シ八里以外ヨリ罷出止宿ノ者ハ貳拾五錢ヲ増ス

右定限

九年四月司法省甲第六號
布達ヲ以テ第三條ハ追テ
相達スルマテ執行ニ及ハ
ス

裁判所ニ出席ヲ爲シタル日

第三條 證人并引合人滿八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手當

一日ニ付五拾錢(十二年司法省甲
第二號布達ヲ以
テ引合人ノ下差添
人ノ三字ヲ刪ル)

第四條 證人并引合人旅費

滿八里ニ付拾錢歸路モ同斷(十二年司
法省甲第二號布達ヲ以テ引合
人ノ下差添人ノ三字ヲ刪ル)

但シ八里ヲ越レハ每滿一里ニ付拾錢

右定限

第一 兩線ノ官道甲路ハ遠ク乙路ハ近キ時ハ現ニ甲路ヲ經ルト雖
モ乙路ヲ以テ計算ス可シ

第二 本條ハ日本國管内ヲ通行スル者ノ爲メ設ク

第五條 原告人又ハ被告人直ナル者ノ手當

一日ニ付五拾錢

但シ八里外ヨリ罷出止宿スル者ハ貳拾五錢ヲ増ス

九年四月司法省甲第六號
布達ヲ以テ第六條ハ追テ
相達スルマテ執行ニ及ハ
ス

右定限

第二條ニ同シ

第六條 原告人又ハ被告人直ナル者八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ
手當 一日ニ付五拾錢

第七條 原告人又ハ被告人直者旅費

滿八里ニ付拾錢歸路モ同斷

但シ八里ヲ越レハ每滿一里ニ付拾錢

右定限

第四條ニ同シ

第八條 通辨雇料

一日ニ付三圓

右定限

第二條ニ同シ往返旅費ヲモ定額ノ通計算スヘシ

第九條 翻譯料

一枚ニ付十六行十五字詰二圓
但シ一枚以下モ同價

右定限

十七年司法省甲第一號告
示ヲ以テ一枚廿四行一行
貳拾字詰一枚金四圓ト爲
ス

第一條ニ同シ

第十條 測量繪圖認料

右定限

- 第一 長三百間ニテ盡ル時ハ
百間ニ付一尺ノ割 西ノ内一枚ニ付拾錢
- 第二 長六百間迄
百間ニ付五寸ノ割 同 拾貳錢
- 第三 長千貳百間迄
百間ニ付三寸ノ割 同 拾四錢
- 第四 長六千間迄
百間ニ付二寸ノ割 同 拾七錢
- 第五 長一萬二千間迄
百間ニ付一寸ノ割 同 貳拾錢
- 第六 長一萬二千間以上

百間ニ付五分ノ割 同

廿四錢

一測量ニ及ハサル見取繪圖ハ間數ノ長短ヲ論セス大凡見積ヲ以テ簡便ニ圖引致ス可シ

但西ノ内一枚ニ付拾錢

第十一條 使賃

滿一里毎ニ拾錢一里未滿ハ五錢

但歸路モ同斷

右定限

第一 裁判所ニテ示談中雙方承諾ノ上原告被告雙方又ハ一方ノ者

ヨリ遣シタル使賃

第二 裁判所ニテ示談中原告又ハ被告一方ノ者掛裁判役ノ檢印ヲ

經タル使賃

第三 原告又ハ被告一方ノ者出訴中違約シテ出席セサル時掛裁判

役ノ檢印ヲ經テ違約ヲ責ムル使賃

第四 原告被告雙方ノ爲メ又ハ一方ノ爲メニ雙方又ハ一方ノ者ノ

申立ニ因リ裁判所ヨリ臨時ニ遣シタル使賃

第十二條 郵便并ニ電信料 定價

右定限

第十一條ニ同シ

第十三條 身代限ヲ爲スニ付裁判所又ハ縣廳又町役場ニ納ム可キ評
價人監定人等ノ日雇賃金ノ諸入費及ヒ身代限諸雜費 臨時計算ヲ
以テ定ム

右ハ前數條ノ入費ニ先ツテ取立ツ可シ

○民事訴訟書類認メ方明治十三年三月司法省甲第一號告示
今般第五號布告ヲ以テ訴訟用紙規則廢セラレ候ニ付テハ本年
四月一日以後民事訴訟ニ關シ大審院又ハ裁判所へ差出ス書類ハ
都々美濃紙又ハ之レト同尺度ノ紙ヲ用ヒ一枚貳拾四行一行貳拾
字詰ニ書スヘキモノトス
但訴訟入費ハ明治九年當省甲第五號布達第一條第九條ニ定メ
タル割合ニ依リ書類認料ハ一枚金貳拾錢翻譯料ハ一枚金四圓
ト相成ル義ト心得ヘシ

○代言人規則明治十三年五月司法省甲第一號布達

沿革略記

明治九年二月司法省甲第一號布達ヲ以テ代言人規則
ヲ設ケ免許ヲ經サル者へ代官依頼スヘカラサルモノ
トス○十三年五月同省甲第一號布達ヲ以テ改正ス是レ現行
法ナリ

明治九年當省甲第一號代言人規則左ノ通改正候條此旨布達候事

但該規則ニ抵觸スル從前ノ布達ハ總テ廢止タル可シ

代言人規則

第一款 總則

第一條 代言人ハ法令ニ於テ代言ヲ許サレタル詞訟ニ付テ原告又ハ
被告ノ委任ヲ受ケ其代言ヲ爲ス者トス

第二條 代言ノ業ヲ爲サント欲スル者ハ第四款ニ掲クル所ノ手續ニ

依り定式ノ試験ヲ經テ「司法卿」ノ免許ヲ受ク可シ

第三條 免許ヲ受ケシ代言人ハ大審院及ヒ諸裁判所ニ於テ代言ヲ爲スヲ得

第四條 代言人ノ免許ヲ得ル能ハサル者左ノ如シ

- 一 未丁年者
- 二 身代限リノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者
- 三 盜罪詐偽罪ニ付刑ヲ受ケタル者
- 四 懲役禁獄一年以上ノ刑ニ處セラレタル者(十四年司法省甲第二號布達ヲ以テ改正)
- 五 官吏准官吏及ヒ公私ノ雇人

第五條 免許ヲ受ケシ者ハ必ス第二款ニ掲クル所ノ代言人ノ組合ニ入リテ其規則ヲ守ル可シ若シ一時他管ニ出テ代言ヲ爲スハ其地組合ノ規則ヲ遵守ス可シ

第六條 代言人新ニ免許ヲ受ケシ時及ヒ他ノ地ニ轉住セント欲スル時ハ其業ヲ爲ス所ノ裁判所及ヒ檢事檢事ナキ地ハ檢事ノ職務ヲ兼行スル者以下之ニ倣フ并

ニ議長長ニ其旨ヲ届ケ廢業ノ時ハ免許狀ヲ檢事ニ返納ス可シ

第七條 代言免許ハ滿一年月ヲ以テ以テ限トシ免許料ハ金拾圓トス其業ヲ繼續セント欲スル者ハ毎年免許料ヲ納ムヘシ既ニ納メタル免許料ハ廢業停業除名ノ時ト雖モ之ヲ還付セス

第八條 新規出願ノ者ハ免許狀ヲ受ル時免許料ヲ直チニ檢事ニ納ム可シ

引續出願ノ者ハ必ス免許期限ノ盡ル前願書ニ免許料ヲ添ヘ檢事ニ差出ス可シ但右手續ヲ爲シタルキハ期限後ニ係リ未タ免狀ノ下付有ラサルモ其儘代言ヲ爲スヲ得可シ

第九條 免許料ヲ納メサルヲ以テ免許ヲ得ス又ハ期限前ニ於テ引續願ヲ爲サスシテ免許ノ効ヲ失ヒシ者再ヒ代言ヲ爲サント欲スル時ハ新規出願ノ手續ニ循フ可シ

第十條 免許狀ヲ紛失シ又ハ氏名ヲ改メシ者ハ更ニ免許狀下付ノ願ヲ檢事ニ出ス可シ但願書ノ副本ニ檢事ノ檢印ヲ受ケ置キ引替免許

狀下付迄ハ之ヲ以テ免許代言人タルノ證ト爲ス可シ

第十一條 代言人ヲ爲スニハ必ス詞訟本人ノ委任狀ヲ受ク可シ

第十二條 代言人ノ懲罰ハ第三款ニ依テ處分ヌ可シ

第十三條 代言人ノ所業ニ因リ生シタル詞訟本人並ニ相手方關係人ノ損害ハ其代言人ニ於テ之ヲ償フ可シ

第二款 議會

十四年第二號布達ヲ以テ
地方裁判所ヲ始審裁判所
ト改ム

第十四條 代言人ハ各地方裁判所本支廳所轄毎ニ一ノ組合ヲ立テ議會ヲ設ケ左ノ目的ヲ以テ規則ヲ定メ契約ヲ固クス可シ但組合ハ各裁判區ノ廣狹遠近ニ依リ檢事ノ見計ヲ以テ之ヲ分合スルコトアル可シ

一 互ニ風儀ヲ矯正スル事

二 名譽ヲ保存スル事

三 法律ヲ研究スル事

四 誠實ヲ以テ本人ノ依頼ニ應スル事

五 強テ本人ノ權利ヲ捏造セサル事

六 妄ニ言詞ヲ變改セサル事

七 故ナク時日ヲ遷延セサル事

八 相當謝金ノ額ヲ定ムル事

但該規則ハ必ス檢事ノ照閱ヲ經可シ其改正増補モ亦之ニ同シ

第十五條 組合毎ニ會長一名副會長一名又ハ二名ヲ毎年第一次會ニ於テ投票ノ多數ヲ以テ定ム可シ若シ投票ノ數相均シキ時ハ先キニ免許ヲ得タル者ヲ以テシ其時日相同シキ時ハ年長ノ者ヲ以テ之ニ充ツ可シ

第十六條 會長ハ議會ノ管理ヲ爲シ副會長ハ會長ヲ補助シ會長差支アル時ハ之カ代理ヲ爲ス可シ其任期ハ各滿一年トス但每期投票多數ヲ得ル者ト雖モ其職務ヲ繼續スルハ三期ヲ以テ限リトス

第十七條 第二十二條ニ記載シタル條件ヲ犯ス者アル時ハ各代言人ハ之ヲ會長ニ報告シ會長ハ之ヲ檢事ニ告發ス可シ

若シ會長告發ヲ遷延シ又ハ其所犯會長ニ係ル時ハ各代言人ヨリ直
テニ檢事ニ告發ス可シ

第十八條 議會ヲ開クハ毎年二次ヲ以テ定例ト爲シ其日數一次十五
日ヲ過クルヲ得ス若シ已ムヲ得サル場合ニ於テ期日ヲ延サントス
ルカ又ハ臨時會ヲ開カントスル時ハ必ス檢事ノ認可ヲ受ク可シ但
其會費ハ各代言人ニ於テ之ヲ擔當スル者ト爲ス

第十九條 會長ハ組合總員ノ名簿ヲ作り其本貫族籍住所年齢及ヒ代
言免許ノ年月日ヲ記シ轉住廢業懲罰ノ事アル毎ニ其旨ヲ記ス可シ
第二十條 議會中詞訟事件ニ付參會スルヲ得サル場合ニ於テハ其旨
ヲ會長ニ届出ツ可シ

第二十一條 會長及ヒ副會長ト雖モ代言ノ職業ニ付テハ一般ノ代言
人ト異ナルナシ

第二款 懲罰

第二十二條 代言人左ノ條件ヲ犯ス時ハ輕重ヲ量リ第二十三條及ヒ

第二十四條ニ依テ懲罰ス可シ

- 一 訟廷ニ於テ現行ノ法律ヲ誹議スル者
 - 二 訟廷ニ於テ官吏ニ對シ不敬ノ所業ヲ爲ス者
 - 三 訟廷ニ於テ相手方ヲ凌辱罵詈シタル者
 - 四 詞訟ヲ教唆シタル者
 - 五 證據ト爲ル可キ者ヲ捏造シタル者
 - 六 他人ノ詞訟ヲ買取リ自己ノ利ヲ圖ル者
 - 七 強テ謝金ヲ前收シ又ハ過當ノ謝金ヲ食リタル者
 - 八 故ヲニ時日ヲ遷延シ詞訟本人并ニ相手方關係人ノ妨害ヲ爲シ
タル者
 - 九 議會組合ノ外私ニ社ヲ結ビ號ヲ設ケ營業ヲ爲シタル者
 - 十 議會ニ於テ定メタル取締規則ヲ犯シタル者
- 第二十三條 懲戒ノ目次左ノ如シ
- 一 謹責

二 停業

三 除名

第二十四條 所犯法律ニ該ル者ハ法律ニ依テ處斷シ仍ホ第二十三條ノ罰目ヲ併科スルコトアル可シ

第二十五條 譴責ハ止タ呵責シテ業ヲ停メス停業ハ一月以上一年以上以下其業ヲ停メ除名ハ代言人名簿ノ名ヲ除キ三年ヲ經ルノ後ニ非サレハ復タ代言人タルヲ得ス若シ其所犯ノ情狀重キ者ハ終身之ヲ許サス

第二十二條ノ懲罰ヲ受ケタル者アルキハ其旨ヲ裁判所ノ扣所ニ掲示ス可シ

第四款 出願

第二十六條 代言免許ヲ願フ者ハ第二十九條ノ書式ニ倣ヒ願書ヲ作リ現住戸長又ハ區長ノ奥印ヲ受ケ履歷書ヲ添ヘ其所轄ノ檢事ニ差出シ定式ノ試験ヲ受ク可シ

第二十七條 出願定月

二月 八月 各上半ケ月ヲ以テ限リト爲ス

第二十八條 試験ノ課目左ノ如シ

- 一 民事ニ關スル法律
- 二 刑事ニ關スル法律
- 三 訴訟ノ手續
- 四 裁判ニ關スル諸規則

第二十九條 願書及ヒ履歷書書式

(書式略之)

○

○代人規則 明治六年六月 第貳百拾五號 布告

人民一般商業及ヒ其他ノ事ニ因リ代人ヲ以テ契約取引等致シ候規則

別紙ノ通被定候條此旨相達候事

(別紙)

代人規則

第一條 凡ソ何人ニ限ラス已レノ名義ヲ以テ他人ヲシテ其事ヲ代理セシムルノ權アルヘシ

但シ本人幼年等ニテ其事理ヲ辨シ難キ時ハ其後見人及ヒ親族ノ者協議ノ上代人ヲ任スルヲ得ヘシ

第二條 凡ソ他人ノ委任ヲ受ケ其事件ヲ取扱フ者ハ代人ニシテ其事件ヲ委任スル者ハ本人ナリ故ニ代人委任上ノ所行ハ本人ノ關係タルヘシ

第三條 凡ソ代人ハ心術正實ニシテ滿貳拾歳以上ノ者ヲ撰ムヘシ(九百十四號布告ヲ以テ改正)

第四條 代人ハ總理代人部理代人ノ別アリ總理代人ハ其本人身上諸般ノ事務ヲ代理スル者ニシテ部理代人ハ特ニ其委任スル部内ノ事

務ヲ代理スルヲ得ル者トス

第五條 凡ソ本人ヨリ代人ヲ任シ他人ト契約取引等ヲ爲サント欲スル時ハ必ス實印ヲ押シタル委任狀ヲ與フ可シ

但シ其家業取扱フ場所ニ於テ通常ノ事務ヲ取扱ハシムルノ類ハ別段委任狀ヲ與フルニ及ハス

第六條 委任狀ハ總理代人又ハ部理代人タル事及ヒ其委任シタル權限ヲ明白ニ記載スヘシ

第七條 委任狀書式左ノ通
拙者共 儀某ノ事件ニ付何誰ヲ以テ總理代人ト定メ拙者ノ名義ニテ

左ノ權限ノ事ヲ代理爲致候事
一何々ノ事但權限ノ次第ヲ分條記載ス可シ

右代理ノ委任狀仍而如件
年號何年何月何日

住所身分姓名印
後見人等ハ住所身分何誰ノ後見人何誰ト記ス可シ

第八條 代人ヲ任スルノ期限ハ豫メ規定シ難キモノト雖モ其本人幼弱疾病事故等ニテ長ク委任セントスル時ハ其地方ニ新聞紙アラハ之ニ記入セシメ世上ニ公布スヘシ

○登記法明治十九年八月法律第一號

沿革略記

明治五年正月大藏省ヨリ東京府ニ地券發行地租收入規則ヲ達シ新規並書換地券印稅ヲ定ム○同年二月大藏省第二十五號ヲ以テ地所賣買讓渡ニ付地券渡方規則ヲ達シ新規並書換ノ證印稅ヲ定ム○同年同月第五十號ヲ以テ地所永代賣買ヲ許シ人民ニ其所有權ヲ附ス○六年一月第十八號布告ヲ以テ地所買入書入規則ヲ定メ戸長ヲシテ證文ニ與書證印セシム○同年十二月第三百九十六號布告ヲ以テ代替授與並水火盜難ニヨリ地券書換證印稅ヲ定ム○七年十月第四百四號布告ヲ以テ地所買受ケ代金受取ノ證文アルモ地券申受ケサレハ買主ニ所有權ナキモノトナシ是レカ罰例ヲ定ム○八年六月第六號布告ヲ以テ七年第四百四號布告ヲ改正ス

○同年九月第四百四十八號布告ヲ以テ建物書入質規則並建物賣買讓渡規則ヲ定メ書入質並賣讓渡證文ニ戸長ヲシテ與書割印セシム○同年十月第五百五十三號布告ヲ以テ家督相續贈還等ノ地所地券書換手續ヲ定ム○九年五月地租改正事務局甲第一號布達ヲ以テ六年第三百九十六號布告ノ稅額及荒地其他無代價券狀授與書換ノ證印稅ヲ改正ス○十年三月第二十八號布告ヲ以テ船舶賣買書入質手續ヲ定ム○同年九月地租改正事務局甲第二號布達ヲ以テ荒地起返及開墾鐵下年季明地其他一筆地ヲ數筆ニ分裂數筆地ヲ一筆ニ合併等ニテ所有主變換セサル地券書換證印稅ヲ定ム○十三年十一月第五十二號布告ヲ以テ八年第六號及第五百五十三號布告ヲ廢シ更ニ土地賣買讓渡規則ヲ定ム○十四年五月第三十號布告ヲ以テ從前ノ證印稅則ヲ廢止シ更ニ地券證印稅則ヲ制定ス○十五年十二月第六十號布告ヲ以テ地所建物船舶賣買讓渡及質入書入ノ戸長公證猶豫ノ時機ヲ示ス○十九年八月法律第一號ヲ以テ十年第二十八號布告船舶賣買書入質手續十三年第五十二號布告土地賣買讓渡規則十四年第三十號布告地券證印稅則其他從前ノ法律規則中抵觸スルモノヲ廢シ登記法ヲ定ム是レ現行法ナリ

朕登記法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

登記法

第一章 總則

第一條 地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ノ登記ヲ請ントスル者ハ本法ニ從ヒ地所建物ハ其所在地船舶ハ其定繫場ノ登記所ニ登記ヲ請フ可シ

第二條 地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ノ登記ハ始審裁判所長之ヲ監督ス可シ

第三條 登記事務ハ治安裁判所ニ於テ之ヲ取扱フモノトス治安裁判所遠隔ノ地方ニ於テハ郡區役所其他司法大臣指定スル所ニ於テ之ヲ取扱ハシム

第四條 登記所ノ位置及其管轄ノ區域ハ司法大臣之ヲ定ム

第五條 登記官吏ハ登記事務取扱ニ付テハ始審裁判所長ノ監督ヲ受クルモノトス

第六條 登記簿ニ登記ヲ爲サ、ル地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入

ハ第三者ニ對シ法律上其効ナキモノトス

第七條 地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ニ付キ登記ス可キ概目左ノ如シ

第一 地所ハ郡區町村名、字、番地、地目、反別若クハ坪數、地券面ノ價格

第二 建物ハ郡區町村名、字、番地、地目、構造ノ種類、建坪、造作ノ有無

第三 西洋形船舶ハ汽船、風帆船ノ區別、船名、番號、登簿噸數、公稱馬力、汽機及汽罐ノ種類、端船其他必要ノ所屬品

第四 日本形船舶ハ船名、番號、積石數、間數、端船其他必要ノ所屬品

第五 登記ノ事由

第六 金額

第七 質入書入ハ其期限及利息

第八 所有者及登記ヲ受クル者ノ氏名住所

第九 一筆ノ地所又ハ一棟ノ建物ヲ區別シ賣買讓與質入書入ヲ爲ストキハ其事實

第十 二番以後ノ書入ヲ爲シ又ハ書入ニ爲シタルモノヲ質入ト爲シ質入ニ爲シタルモノヲ書入ト爲ストキハ其事實

第十一 登記ノ年月日

第八條 登記ヲ請フ者アルトキハ登記官吏直ニ前條ノ概目ヲ審査シテ登記簿ニ登記シ本人ニ之ヲ示シ又ハ讀聞セタル上本人ヲシテ署名捺印セシメ且之ニ署名捺印ス可シ

第九條 地所建物船舶ニ關スル差押假差押差留假差留假處分及地所建物ノ收益差押ニ付テハ裁判所ノ命令書ニ依リ登記簿ニ其記入ヲ爲ス可シ

前項ノ記入ハ裁判所ノ命令アルトキニ非サレハ之ヲ取消スコトヲ得ス

第十條 登記ハ第十五條第二項及第十六條第十七條第十八條ヲ除クノ外契約者雙方ノ請求若クハ裁判所ノ命令アルトキニ非サレハ之ヲ爲シ又ハ變更シ又ハ取消スコトヲ得ス

第十一條 登記ノ謄本又ハ拔書又ハ一覽ヲ要スル者ハ其登記所ニ出頭シテ之ヲ請求スルコトヲ得

第十二條 登記官吏ノ職務執行上ニ關シ不服アル者ハ管轄始審裁判所ニ抗告スルコトヲ得

第十三條 登記ニ關スル取扱ノ手續及登記簿ノ書式ハ司法大臣之ヲ定ム

第二章 賣買讓與

第十四條 地所建物船舶ノ賣買讓與ニ付キ登記ヲ請フトキハ契約者雙方出頭シ其證書ヲ示ス可シ

前項ノ場合ニ於テ其物件質入書入中ニ係ルトキハ買受人讓受人ニ於テ之ヲ了知セル旨ヲ申出其記入ヲ請フ可シ

第十五條 家督相續ニ因リ地所建物船舶ノ登記ヲ請フトキハ雙方出頭シ其證書ヲ示ス可シ

死亡者失踪者若クハ離縁戸主ノ遺留シタル地所建物船舶ヲ相續スル者登記ヲ請フトキハ親屬又親屬ナキトキハ近隣ノ戸主二名以上連署ノ書面ヲ差出シ且證明書類アルモノハ之ヲ示ス可シ

第十六條 行政官廳ノ公賣處分ニ因リ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者登記ヲ請フトキハ落札達書及其代金完納ノ證書ヲ示ス可シ

第十七條 官有ノ地所建物船舶ノ拂下又ハ無代價下渡ヲ受ケ登記ヲ請フトキハ其指令ノ本書若クハ達書ヲ示ス可シ

第十八條 民有ノ地所建物船舶ヲ官有ト爲シタルトキハ其管廳ハ第七條ノ概目ヲ示シテ登記ヲ求ム可シ

第十九條 裁判執行上ノ糶賣若クハ入札ニ因リ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者アルトキハ裁判所ノ命令ニ依リ其登記ヲ爲ス可シ

第二十條 地所船舶賣買讓與ノ登記ヲ受ケ地券鑑札ノ下付若クハ書

換ヲ請ントスル者ハ登記所ヨリ登記濟ノ證ヲ受ク可シ

第三章 質入書入

第二十一條 地所建物船舶ノ質入書入ニ付キ登記ヲ請フトキハ契約者雙方出頭シ其證書ヲ示ス可シ

貸借ノ爲メニ非スシテ義務ヲ果ス可キ保證ノ爲メ地所建物船舶ヲ質入書入ト爲シ其登記ヲ請フ者モ亦前項ノ規定ニ依ル可シ

第二十二條 書入ノ地所建物船舶ヲ重テ書入ト爲ストキハ第二債主ニ於テ之ヲ了知セル旨ヲ申出其記入ヲ請フ可シ書入ト爲リタル地所ヲ質入ト爲シ又ハ質入ト爲リタル地所ヲ書入ト爲ストキ亦同

第二十三條 質入書入契約ノ全部若クハ一部ノ解除又ハ變更ニ付キ登記ヲ請フトキハ契約者雙方出頭シ其證書ヲ示ス可シ

第二十四條 同一ノ地所建物船舶ニ付數個ノ登記ヲ爲ストキハ其登記ヲ請フ日時ノ前後ニ因リ登記ノ順序ヲ定ムルモノトス

第四章 登記料及手數料

第二十五條 地所建物船舶賣買ノ登記ニ付テハ其買受人左ノ賣買代價ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其登記料ヲ納ム可シ

賣買代價

登記料

五圓未滿	五錢
拾圓未滿	拾錢
拾圓以上	貳拾五錢
貳拾五圓未滿	五拾錢
貳拾五圓以上	壹圓
百圓未滿	貳圓
百圓以上	三圓
貳百圓未滿	四圓
貳百圓以上	五圓
三百圓未滿	六圓
三百圓以上	
四百圓未滿	
四百圓以上	
五百圓未滿	
五百圓以上	
七百五拾圓未滿	
七百五拾圓以上	

七百五拾圓以上	七圓
千圓未滿	八圓
千圓以上	九圓
千五百圓未滿	拾圓
千五百圓以上	拾貳圓
貳千圓未滿	
貳千圓以上	
五千圓未滿	
五千圓以上	
壹萬圓マテ	
以上五千圓マテ毎ニ貳圓ヲ增加ス	

第二十六條 地所建物船舶讓與ノ登記ニ付テハ其讓渡人讓受人ニ於テ時價相當ノ價格ヲ定メ前條ニ掲クル金額ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其讓受人ヨリ登記料ヲ納ム可シ

第二十七條 地所建物船舶質入書入ノ登記ニ付テハ其質入人書入人ハ第二十五條ニ掲クル金額ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其登記料ノ半額ヲ納ム可シ但一件ニ付キ金五錢ヨリ下スコトヲ得ス

第二十八條 第二十一條第二項ノ登記ニ付テハ價格ヲ定メ前條ノ例ニ依リ其登記料ヲ納ム可シ

第九條第一項ノ記入ニ付テハ其價格ノ定マリタル物件ハ其價格又其價格ノ定マラサル物件ハ時價相當ノ價格ヲ定メ前條ノ例ニ依リ其登記料ヲ納ム可シ

第二十九條 第十五條ノ登記ニ付テハ時價相當ノ價格ヲ定メ第二十五條ニ掲クル金額ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其登記料ノ五分一ヲ納ム可シ但一件ニ付キ金五錢ヨリ下スコトヲ得ス

第三十條 左ニ掲クル者ハ手數料トシテ金五錢ヲ納ム可シ

- 第一 登記事件ノ取消又ハ其變更ノ登記ヲ請フ者ハ每一件
- 第二 登記ノ謄本若クハ拔書ヲ請フ者ハ每一枚
- 第三 登記ノ一覽ヲ請フ者

第三十一條 左ニ掲クルモノハ登記料及手數料ヲ要セス

- 第一 官廳ノ請求ニ係ル登記
- 第二 公立ノ學校病院公園及養育院ニ係ル登記
- 第三 社寺堂宇及墳墓地ニ係ル登記

第四 人民共有ノ用惡水路溜池敷、堤敷、井溝敷及公衆ノ用ニ供スル道路ニ係ル登記

第三十二條 登記所ニ於テ第二十五條第二十六條第二十八條第二項及第二十九條ニ從ヒ届出タル價格ヲ不相當ト認ムルトキハ其事件ニ關係ナキ者三名ヲ選ビ之ヲ評價人ト爲シテ其價格ヲ評定セシム可シ

第三十三條 評價人ノ評定シタル價格届出ノ價格ヨリ増加スルトキハ其評價ニ關スル費用ハ其登記料ヲ納ムル者之ヲ負擔ス可シ若シ其價格届出ノ價格ト同價又ハ低下ナルトキハ該費用ハ其登記所ニ於テ之ヲ支辨ス可シ

第三十四條 評價人ニ選ハレタル者ハ正當ノ事由ナクシテ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第三十五條 評價人ノ日當ハ登記所ノ見込ヲ以テ一日金貳拾錢ヨリ五拾錢マテヲ給ス可シ

第五章 罰則

第三十六條 詐偽ノ所爲ヲ以テ登記料ヲ減脫シ及之ニ通謀シタル者ハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十七條 本法ニ依リ罰金ニ處スル者ハ刑法ノ不論罪及減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

附則

第三十八條 明治十年第二十八號布告船舶賣買書入質手續同十三年第五十二號布告土地賣買讓渡規則同十四年第三十號布告地券證印稅則其他從前ノ法律規則中本法ニ牴觸スルモノハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

第三十九條 地所賣買讓與荒地起返開墾缺下年期明等總テ地券下付書換ニ係ル手續及其手数料ハ大藏大臣之ヲ定ム

第四十條 登記所ノ登記簿ニ未タ登記セサル地所建物船舶ニ付キ登記ヲ請フ者ハ地所建物ハ其所在地船舶ハ其定繫場ノ戸長ノ證書ヲ以テ其所有者タルコト及其物件ニ故障ナキコトヲ示ス可シ

第四十一條 本法ハ明治二十年二月一日ヨリ之ヲ施行ス

○登記所位置及管轄區域十九年十二月司法省令甲第四號
登記所ノ位置及ヒ管轄區域別表ノ通之ヲ定ム
(別表略之)

○登記請求手續十九年十二月司法省令甲第五號
本年八月法律第一號ヲ以テ登記法創定ニ付キ明治二十年二月以後登記ヲ請フ者ハ左ノ手續ニ依ル可シ

第一條 登記ヲ請フ者ハ第一號書式ニ準シ登記ノ件目等ヲ記載シ實印ヲ押シタル名刺ヲ登記所ニ差出ス可シ
登記簿ノ原本若クハ複書又ハ登記簿ノ閱覽ヲ請フ者亦同シ

第二條 後見人ヨリ登記ヲ請フトキハ後見人タルノ證書ヲ登記所ニ差出ス可シ
代人ヲ以テ登記ヲ請フトキハ代理ノ委任狀ヲ付與シ之ヲ登記所ニ差出サシム可シ

第三條 初テ登記ヲ請フ者ハ第二號書式ニ準シ區戸長ノ證明シタル印鑑ヲ登記所ニ差出ス可シ
第四條 地所ニ付キ初テ登記ヲ請フ者ハ地券ヲ登記官ニ示ス可シ但現ニ質入中ノ地所ニ付テハ此限ニ在ラス
船舶ニ付テハ鑑札ヲ示ス可シ但船舶ニ釘付シタルモノハ此限

ニ在ラス
 第五條 建物ニ付キ登記ヲ請フトキハ其圖面ヲ登記所ニ差出ス可シ
 建物ノ圖面ハ邱地ノ形狀坪數(段別)方位及ヒ建物ノ形狀間尺位置等ヲ記シ登記ヲ受ク可キ建物ノ圖ハ墨引墨字ト爲シ登記外ナル建物アルトキハ其圖ハ朱引朱字ト爲ス可シ
 建物ノ圖面ニハ登記法第九條第十六條第十七條第十八條第十九條ノ場合ヲ除クノ外結約者雙方之ニ署名捺印ス可シ但同第十五條第二項ノ場合ニ於テハ親屬又ハ近隣戶主之ニ連署ス可シ
 地所船舶ニ付キ圖面アルトキモ亦前項ニ定メタル署名捺印若クハ連署ヲ要ス
 第六條 地所ヲ分割シテ賣買讓與シ又ハ質入書入ト爲ストキハ前條ニ準シ其圖面ヲ差出ス可シ
 第七條 裁判執行上ノ糶賣若クハ入札ニ因リ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者其登記ヲ請ヒ又ハ地所建物船舶ニ關スル差押假差押差留假差留假處分及地所建物ノ收益差押ニ付キ記入若クハ取消ヲ請フニハ裁判所ヨリ其命令書ヲ受ケ之ヲ登記所ニ示ス可シ
 裁判官渡ニ依リ登記變更若クハ取消ヲ請フトキ亦前項ニ同シ
 第八條 登記法第三十二條ニ依リ評價ヲ要スルトキハ登記所ノ命令ニ從ヒ登記料ヲ納ムル者ヨリ評價費用ノ見積金額ヲ豫納ス

スニシ

第九條 登記濟ノ證ヲ請フ者ハ第三號書式ニ準シ物件等ヲ記載セル願書ヲ登記所ニ差出ス可シ
 第十條 登記ヲ受タル物件ノ全部若クハ一部毀壞燒失流亡等ニ依リテ消滅シタルトキハ其物件ノ所有者ヨリ登記ヲ爲タル登記所ニ書面ヲ以テ其旨ヲ届出ツ可シ但其物件質入書入又ハ差押差留等ニ係ルトキハ債主又ハ差押差留等ノ權利者ノ連印ヲ要ス
 地目變換ノ場合ニ於テモ亦前項ノ例ニ準シ届出ヲ爲ス可シ
 第十一條 船舶ノ定繫所ヲ更改シタルトキハ原登記所ヨリ登記簿ノ原本ヲ受ケ之ヲ轉入地ノ登記所ニ差出シ其登記ヲ請フ可シ
 同一ノ登記所ニ屬スル町村ニ轉入シタル場合ニ於テハ其登記所ニ登記ノ變更ヲ請フ可シ
 (書式略之)
 ○地券下附書換手續及手数料二十年一月一號
 法律第一號登記法第三十九條ニ基キ地券下附書換手續及ヒ手数料左ノ通相定ム
 第一條 地券下附書換ニ係ル事務ハ郡區役所ニ於テ之ヲ取扱フ
 第二條 左ノ場合ニ於テハ土地所有者ヨリ地券下附又ハ地券書換ヲ郡區役所ニ願出ヘシ

土地所有ノ移轉荒地免租年期明開墾下年期明地目變換免租地ノ有租地成有租地ノ免租地成荒地免租開墾合併分裂地券ノ水火盜難ニ罹リタルモノ地券面ノ反別地價地租ニ異動ヲ生シタルモノ所有者姓名ノ變更シタルモノ郡區長ハ前項ノ願書ヲ受ケタルトキハ遅クモ五日以内ニ地券ノ下附又ハ書換ヲ爲スヘシ

第三條 地券ノ下附又ハ書換ヲ願フモノハ願書ニ戶長ノ與印ヲ受クヘシ但登記法ニ據リ登記ヲ經タルモノハ登記濟ノ證書ヲ戶長ニ示スヘシ

第四條 戶長役場ナキ地方ニ於テハ地券ノ下附又ハ書換願書ヲ直ニ區役所ニ差出スヘシ但登記濟ニ係ルモノハ其證書ヲ區長ニ示スヘシ

第五條 地券ノ下附又ハ書換ヲ願フモノハ手数料トシテ壹枚ニ付金三錢ヲ納ムヘシ

第六條 手数料ハ戶長役場ニ於テ願書ニ與印ヲ爲ストキ之ヲ徵收スヘシ但第四條ノ場合ニ於テハ區役所ニ於テ願書ヲ受クルトキ之ヲ徵收スヘシ

第七條 地券手数料徵收官區役所會計主務ハ其徵收シタル手数料ヲ十日毎ニ取總メ納付書ヲ添テ所在地ノ金庫現金仕拂所ニ送付スヘシ但金庫ナキ地方ニ於テハ毎月一回取總メ納付書ヲ添テ便宜ノ金庫ニ送付スヘシ

第八條 前項納付書ハ歲入歲出納規則書式第五號ニ據ル

第九條 戶長ニ於テ第七條ノ手續ヲ爲シタルトキハ金庫ノ領收ヲ證シタル納付書ニ納人ノ明細内譯書ヲ添テ之ヲ郡區役所ニ送付スヘシ

第十條 第二條ノ場合ニ於テハ所有ノ移轉又ハ指令濟屆濟ノ日ヨリ六十日以内ニ地券下附又ハ地券書換ヲ願出ヘシ若シ其期限ヲ經過スルトキハ金一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

○登記官吏及公證人ハ關シ抗告手續十九年十一月今般法律第一號第二號ヲ以テ登記法及ヒ公證人規則制定相成候ニ付其抗告手續左ノ通之ヲ定ム

抗告手續

第一條 登記官吏又ハ公證人ノ職務執行ニ關シ抗告ヲ爲ス者ハ抗告狀ヲ其登記官吏又ハ公證人ニ差出ス可シ

第二條 登記官吏又ハ公證人抗告狀ヲ受取リタルトキハ其翌日ヨリ三日以内ニ意見ヲ附シ且ツ關係書類ノ寫ヲ添ヘ抗告狀ヲ管轄始審裁判所ニ送致ス可シ

第三條 登記官吏又ハ公證人若シ前條ノ期限内ニ抗告狀ヲ管轄始審裁判所ニ送致セサルトキ又ハ急速ヲ要スル場合ニ於テハ抗告者ハ直ニ管轄始審裁判所ニ抗告狀ヲ差出スコトヲ得

始審裁判所ハ抗告ヲ受ケタル登記官吏又ハ公證人ヲシテ意見書ヲ差出サンメ及ヒ關係書類ヲ求ムルコトヲ得

第四條 登記官吏又ハ公證人ハ其職務執行上ニ關シ抗告ヲ受ケタルトキハ其處分ヲ停止ス可シ

第五條 抗告狀ヲ受取タル管轄始審裁判所ハ書面ニ依リ判定ヲ爲ス可シ

始審裁判所ハ必要ナリト認ムル場合ニ於テハ抗告者其他關係人ニ書面ヲ以テ答辯セシムルコトヲ得

第六條 始審裁判所ハ抗告ノ判定書ヲ管轄治安裁判所ニ送致シ之ヲ登記官吏又ハ公證人及ヒ抗告者ニ送附セシム可シ

始審裁判所ニ於テ抗告ヲ正當ナリト判定シタルトキハ登記官吏又ハ公證人ハ其判定ニ依リ處分ヲ更正ス可シ

第七條 公證人懲罰處分ニ對シ不服アル者ハ其處分ノ翌日ヨリ起算シ七日内ニ其處分ヲ爲シタル管轄始審裁判所ニ抗告狀ヲ差出ス可シ

裁判所ハ其抗告ヲ正當ナリト認ムルトキハ速ニ其不服ノ點ヲ更正ス可シ若シ之ヲ正當ナラスト認ムルトキハ第二條ノ期限内ニ意見ヲ附シ關係書類ヲ添ヘ抗告狀ヲ管轄控訴院ニ送致ス可シ

第八條 公證人懲罰處分ニ對スル抗告ニ付テモ亦第三條ノ手續ニ依ルコトヲ得

第九條 公證人懲罰處分ニ對スル抗告狀ヲ受取タル控訴院ハ第五條ノ手續ニ從ヒ判定ヲ爲ス可シ

第十條 控訴院ハ其判定書ヲ處分ヲ爲シタル始審裁判所ニ送致シ之ヲ言渡サシム可シ

控訴院ニ於テ抗告ヲ正當ナリト判定シタルトキハ處分ヲ爲シ

タル始審裁判所ハ其判定ニ依リ處分ヲ更正ス可シ

第十一條 抗告ノ判定ニ對シテハ總テ上訴ヲ爲スヲ得サルモノトス

○地所建物船舶ニ對シ假差押請求方十九年十二月七號
司法省告示第七號

本年法律第一號ヲ以テ登記法創定セラレタルニ付テハ明治十五年第六十號布告公證猶豫願ノ手續ハ明治二十年二月一日以後消滅スヘキヲ以テ地所建物船舶ニ對シ假差押ヲ爲サント欲スル者ハ管轄裁判所ニ其請求ヲ爲ス可キモノトス

○公證人規則明治十九年八月
法律第二號

朕公證人規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

公證人規則

第一章 總則

第一條 公證人ハ人民ノ囑託ニ應シ民事ニ關スル公正證書ヲ作ルヲ以テ職務ト爲ス

第二條 公證人ハ法律命令ニ背キタル事件ノ公正證書又ハ他ノ官吏ノ作ル可キ公證書類ヲ作ルコトヲ得ス若シ之ヲ作りタルトキハ公正ノ効ヲ有セス

第三條 公證人ノ作りタル公正證書ハ完全ノ證據ニシテ其正本ニ依リ裁判所ノ命令ヲ得テ執行スルカアルモノトス但刑事裁判所ニ偽造ノ訴アルトキハ其證書ノ執行ヲ中止ス可シ又民事裁判所ニ偽造ノ申立アルトキハ其證書ノ執行ヲ中止スルヲ得

第四條 公證人ハ治安裁判所ノ管轄地ヲ以テ受持區トシ其區内ニ於テ司法大臣ノ認可ヲ受ケタル町村内ニ住居シ其居宅ニ役場ヲ設ケ役場ニ於テ職務ヲ行フ可シ但役場外ニ住居セントスルトキハ管轄始審裁判所ノ認可ヲ受ク可シ

已ムヲ得サル事件ニ付テハ受持區内ニ限り役場外ニ於テ其職務ヲ行フ可シ

第五條 各區内公證人ノ員數ハ司法大臣之ヲ定ム

第六條 公證人ハ司法大臣ニ隸屬シ控訴院長始審裁判所長ノ監督ヲ受クルモノトス

第七條 公證人其受持區内ニ於テハ區外人ノ爲メニモ職務ヲ行フ可シ但受持區外ニ於テハ何人ノ爲メニモ職務ヲ行フコトヲ得ス若シ之ヲ行ヒタルトキハ其書類ハ公正ノ効ヲ有セス

第八條 公證人ハ理由ナクシテ人民ノ囑託ヲ拒ムコトヲ得ス若シ之ヲ拒ミタルトキ囑託人ノ求アレハ其理由ヲ記シテ渡ス可シ

第九條 公證人ノ職務執行上ニ關シ不服アル者ハ管轄始審裁判所ニ抗告スルコトヲ得

第十條 公證人ハ公證人何某ト刻シタル方六分ノ役印ヲ作り其印鑑ニ氏名ヲ手書シ之ヲ管轄始審裁判所及治安裁判所ニ差出ス可シ前項ノ印鑑ヲ差出サ、ル間ハ職務ヲ行フコトヲ許サス若シ之ヲ行ヒタルトキハ其書類ハ公正ノ効ヲ有セス

第十一條 公證人已ムヲ得サル事故アリテ職務ヲ行フコト能ハサル

トキハ近隣ノ公證人ニ代理ヲ囑シ管轄始審裁判所ニ其旨ヲ届出可シ

第十二條 公證人ハ筆生ヲ置キ書類ヲ作ル補助ヲ爲サシムルコトヲ得

第十三條 公證人ノ作ル證書及謄本ノ用紙ハ某始審裁判所管内公證人役場ト刻シタル野紙ヲ用フ可シ

第十四條 公證人ノ取扱フ可キ書類左ノ如シ

第一 原本 證書ノ本紙ニシテ公證人ノ保存スルモノ

第二 正本 原本ノ全文ヲ記シタルモノニシテ本文義務ノ執行ヲ裁判所ニ願出可キ旨ヲ其末尾ニ記載シタルモノ

第三 抄録正本 原本ノ一部ヲ記シ其末尾ニ前項ト同一ノ記載アルモノ

第四 正式謄本 原本ノ全文ヲ寫シタルモノニシテ原本ニ代ヘ得可キモノ

第五 抄録正式謄本 原本ノ一部分ヲ抄寫シタルモノニシテ原本ニ代ヘ得可キモノ

第六 謄本 原本ノ全文ヲ寫シタルモノ

第七 抄録謄本 原本ノ一部分ヲ抄寫シタルモノ

第八 見出帳 日々授受シタル書類ノ番號種類等ヲ順次ニ記入スルモノ

第十五條 原本其他書類ノ本書ハ役場ニ之ヲ保存シ他ノ官吏ノ公證ヲ受クル爲メノ外裁判所ノ命令ニ依ルニ非サレハ役場外ニ出スコトヲ得ス

第十六條 裁判所ノ命令ニ依ルノ外關係外ノ者ニ書類ノ謄本ヲ渡ス可カラス

第十七條 公證人ハ其取扱ヒタル公證事件ヲ漏洩ス可ラス

第二章 公證人ノ選任及試験

第十八條 公證人タル可キ者ハ左ノ件々ヲ具備スルヲ要ス

- 第一 滿二十五歲以上ナル事
- 第二 身元保證金ヲ管轄始審裁判所ニ差入ル、事
- 第三 定式試験ノ及第證書ヲ有スル事但裁判官檢察官タリシ者及法學士法科大學卒業生代言人ハ此條件ヲ要セス
- 第四 丁年者二名以上ニテ其品行ヲ保證スル證書ヲ有スル事
- 第十九條 保證金ノ額ハ土地ノ狀況ニ從ヒ貳百圓以上五百圓以下ニ於テ豫メ司法大臣之ヲ定ム
- 第二十條 左ニ掲クル者ハ公證人タルコトヲ得ス
 - 第一 公權剝奪若クハ停止中ノ者
 - 第二 盜罪詐僞罪賄賂收受ノ罪及贓物ニ關スル罪ヲ犯シ刑ヲ受ケタル者
 - 第三 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者
 - 第四 官吏懲戒令ニ依リ免職セラレタル者
- 第二十一條 公證人ヲ試験スル場所及期日ハ司法大臣之ヲ定メ少ク

凡二箇月前ニ告示ス可シ

- 第二十二條 試験委員ハ控訴院若クハ始審裁判所ノ裁判官二名檢察官一名トシ司法大臣臨時之ヲ命ス
- 第二十三條 試験ノ科目ハ公證人規則、民法、訴訟法、商法其他公證人ノ職務ニ關スル法律命令トス
- 第二十四條 公證人タラント欲スル者ハ願書ニ試験及第證書ノ寫ヲ添ヘ管轄始審裁判所若クハ控訴院ヲ經テ司法大臣ニ差出ス可シ但裁判官檢察官タリシ者ハ其官記法學士ハ其學位記法科大學卒業生ハ其卒業證書代言人ハ其免許狀ヲ以テ及第證書ニ代フルコトヲ得
- 第二十五條 公證人ハ司法大臣之ヲ任ス
- 第二十六條 試験ノ方法ハ筆記口述ノ二種トス筆記試験ニ合格セザル者ハ口述試験ヲ受クルコトヲ得ス
- 第二十七條 試験及第者ニハ及第證書ヲ授與ス

第三章 證書

第一節 證書ノ原本

第二十八條 公證人證書ヲ作ルニハ其囑託人ノ氏名ヲ知り面識アル
ヲ必要トシ且丁年者一名ノ立會人ヲ要ス之ニ違ヒタルトキハ其證
書ハ公正ノ効ヲ有セス

公證人囑託人ノ氏名ヲ知ラス面識ナキトキハ其本籍或ハ寄留地ノ
郡區長若クハ戸長ノ證明書又ハ公證人氏名ヲ知り面識アル丁年者
二人以上ヲ以テ其人ヲ證セシム可シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ
公正ノ効ヲ有セス

第二十九條 左ニ掲クル者ハ立會人タルコトヲ得ス

第一 公證人及囑託人ノ親屬雇人又ハ公證人ノ筆生

第二 第二十條ニ掲ケタル者

第三十條 證書ニハ其本旨ノ外左ノ件々ヲ記載ス可シ

第一 囑託人及立會人ノ族籍住所職業氏名年齢

第二 囑託人代理人ナルトキハ委任狀ヲ所持シタルコト及其本人

ノ族籍住所職業氏名年齢

第三 囑託人後見人ナルトキハ後見人タルノ證書ヲ所持シタルコ

ト及其本人ノ族籍住所職業氏名年齢

第四 郡區長戸長ノ證明書ヲ以テ證シタルトキハ其旨又證人ヲ要
シタルトキハ其族籍住所職業氏名年齢

第五 證書ヲ作リシ場所及其年月日若シ場所ヲ記セス又ハ年月日
ノ記入ヲ遺脱シタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十一條 證書ヲ作ルニハ普通平易ノ語ヲ用ヒ字畫明瞭ナルヲ要
ス

接續ス可キ字行ニ空白アルトキハ墨線ヲ以テ之ヲ接續ス可シ
數量並ニ年月日ヲ記スルニハ壹貳參肆伍陸漆捌玖拾陌仟萬ノ字ヲ
用フ可シ

第三十二條 度量衡貨幣ノ數量名稱及曆法ハ法律ノ定ムル所ニ從
ヒ之ヲ記ス可シ

既ニ廢シタル度量衡、貨幣、曆法又ハ外國ノ度量衡、貨幣、曆法ヲ記セサルヲ得サル場合ニ於テハ之ヲ用フルコトヲ得

第三十三條 證書ニ追加改正ヲ爲ストキハ其文字並ニ何行ニ追加改正ヲ爲シタルコトヲ欄外又ハ末尾ノ餘白ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ又文中消字ヲ爲ストキハ其原字ノ尙ホ明カニ讀得可キコトヲ要ス且何行ニ若干字ヲ消シタルコトヲ欄外又ハ末尾ノ餘白ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ追加改正、消字ノ効ヲ有セス

第三十四條 證書ヲ作りタルトキハ關係人ニ讀聞セ其旨ヲ記入シ然ル後ニ公證人並ニ關係人各自署名捺印シ公證人ハ某治安裁判所管内某地住居ト肩書ス可シ

公證人並ニ關係人ノ署名捺印ナキトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス
若シ署名スル能ハサル者アルトキハ明治十年第五十號ノ布告ニ從

十年第五十號布告ハ本類ニ載ス

フ可シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十五條 證書ノ綴目合目ニハ公證人並ニ囑託人之ニ捺印ス可シ

第三十六條 公證人ハ自己及親屬ノ爲メニ證書ヲ作ルコトヲ得ス其親屬他人ノ代理人タルトキモ亦同シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十七條 公證人若シ囑託人ノ爲メ訴訟代人若クハ代言人ト爲リ又ハ爲リタルコトアルトキハ其訴訟事件ニ付キ證書ヲ作ルコトヲ得ス之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十八條 公證人ハ自己親屬立會人又ハ證人ノ爲メニ利益アル條件ヲ證書中ニ記ス可カラス若シ之ヲ記シタルトキハ其條件ハ無効トス

第三十九條 公證人ハ證書ノ原本ヲ保存ス可シ若シ之ヲ保存セス又ハ亡失シタル場合ニ於テ第四十七條ノ手續ヲ爲サ、ルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第四十條 囑託人若シ代理人又ハ後見人ナルトキハ其委任狀又ハ其證書ノ寫ヲ原本ニ連続ス可シ其寫ニハ本書ト對照シ相違ナキ旨ヲ附記シ公證人並ニ關係人署名捺印シ其寫ト本書トニ割印ス可シ

第四十一條 證書ニ關係ノ書類ハ之ヲ原本ニ連続スルコトヲ得之ヲ連続シタルトキハ其旨ヲ原本ノ欄外又ハ末尾ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ

第四十二條 原本ニハ證券印稅規則ニ定メタル印紙ヲ貼用ス可シ

第二節 正本及謄本

第四十三條 正本ハ數量ノ定リタル金錢其他換用物若クハ有價證券ノ支辨ニ限リ權利者ノ請求ニ依リ之ヲ渡ス可シ之ニ違ヒタルトキハ正本ノ効ヲ有セス

正式謄本及抄録正式謄本ハ權利者ノ請求ニ依リ之ヲ渡ス可シ

第四十四條 正本又ハ正式謄本ハ原本ト同時ニ又ハ原本ヲ作リタル後ニ於テ之ヲ作ルコトヲ得原本ト同時ニ作ルトキハ關係人ノ面前ニ

於テシ原本ヲ作リタル後ニ作ルトキハ更ニ義務者ノ立會ヲ以テス可シ義務者出席セサルトキハ正本又ハ正式謄本ヲ求ムル者ヨリ管轄始審裁判所ニ出願シ其命令ニ依テ他ノ公證人一員又ハ裁判所ノ裁判官檢察官又ハ書記一員ノ立會ヲ以テ之ヲ作ル可シ之ニ違ヒタルトキハ其効ヲ有セス

裁判所ノ命令ニ依テ正本又ハ正式謄本ヲ作リタルトキハ其末尾并ニ原本ノ末尾ニ其旨ヲ附記シ其命令書ハ之ヲ原本ニ連続ス可シ

第四十五條 正本又ハ正式謄本ヲ作ルトキハ第三十一條第三十三條第三十四條第三項及第三十五條ノ規定ニ依ル可シ

正本又ハ正式謄本ニハ權利者ノ氏名並ニ之ヲ作リタル年月日及場所ヲ記シ公證人並ニ義務者署名捺印ス可シ前條第一項ノ場合ニ於テハ公證人及他ノ公證人又ハ裁判所ノ官吏署名捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ其効ヲ有セス

第四十六條 正本又ハ正式謄本ヲ渡シタルトキハ原本ノ末尾ニ其旨

ト年月日トテ附記シ權利者ヲシテ署名捺印セシム可シ

第四十七條 正本又ハ正式謄本ハ原本ノ亡失シタルトキ管轄始審裁判所ノ認可ヲ經之ヲ原本トシテ保存ス可シ

第四十八條 數事件ヲ列記シ數人各自ニ關係ヲ異ニスル證書ハ權利者ノ請求ニ依リ其有用ノ部分ヲ抄録シテ正本又ハ正式謄本ヲ作ルコトヲ得

正本又ハ正式謄本ヲ渡シタル者ニハ更ニ抄録正本又ハ抄録正式謄本ヲ渡ス可カラス又抄録正本又ハ抄録正式謄本ヲ渡シタル者ニハ更

ニ正本又ハ正式謄本ヲ渡ス可カラス之ヲ渡スト雖モ其効ヲ有セス
第四十九條 正本又ハ正式謄本ハ管轄始審裁判所ノ命令アルニ非サ

レハ再度之ヲ渡スコトヲ得ス之ヲ渡スト雖モ其効ヲ有セス

再度以上正本又ハ正式謄本ヲ得ント欲スル者ハ其事由ヲ具シテ管轄始審裁判所ニ願出ツ可シ管轄始審裁判所ハ原本ヲ保存スル公證人ニ其正本又ハ正式謄本ヲ渡スコトヲ命スルコトアルヘシ

其正本又ハ正式謄本ニハ幾度ノ正本又ハ正式謄本ナルコトヲ末尾

ニ附記シ公證人署名捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ其効ヲ有セス

第五十條 抄録正本又ハ抄録正式謄本ハ總テ正本又ハ正式謄本ト同一ノ手續ニ依リ之ヲ作ル可シ其効力モ亦同シ

第五十一條 證書ノ謄本及其附屬書類ノ寫ハ關係人ノ求メニ應シ之ヲ渡ス可シ

第五十二條 謄本ニハ原本ノ全文ヲ寫シ其末尾ニ謄本ト記シ公證人署名捺印ス可シ

第五十三條 抄録謄本ニハ原本ノ年月日及囑託人ノ族籍住所職業氏名ヲ記シ末尾ニ抄録謄本ト記シ公證人署名捺印ス可シ

第五十四條 管轄始審裁判所ノ命令ニ依リ關係外ノ者ニ謄本ヲ渡シタルトキハ其命令書ヲ原本ニ連綴シ末尾ニ命令書ヲ受ケタル旨並ニ年月日ヲ附記シ受取人ヲシテ署名捺印セシム可シ

第三節 見出帳

第五十五條 公證人ハ見出帳ヲ作り記入前管轄始審裁判所ニ差出シ
綴目合目ニ其所長ノ官印ヲ受ク可シ

第五十六條 見出帳ニハ日々取扱ヒタル書類中ヨリ第二十一條及第
三十三條ノ規定ニ從ヒ左ノ件件ヲ記入ス可シ

第一 囑託人ノ住所氏名

第二 書類ノ番號種類

第三 書類ヲ取扱ヒタル年月日

第四節 兼任及書類ノ授受

第五十七條 公證人死去失踪免職辭職轉職又ハ他ノ役場ニ轉シテ直
ニ後任者ノ命セラレサル場合又ハ停職ノ場合ニ於テハ管轄始審裁
判所ハ近隣ノ公證人ニ命シテ其事務ヲ兼任セシム可シ

役場ヲ廢シタルトキハ書類ノ引繼ヲ近隣ノ公證人ニ命ス可シ

第五十八條 前條ノ場合ニ於テ兼任者ナキトキ其他必要ト見認ムル
場合ニ於テハ管轄始審裁判所ハ直ニ其役場ノ書類ニ封印ヲ爲ス可

シ

第五十九條 公證人免職辭職轉職又ハ他ノ役場ニ轉シタル場合ニ於
テハ後任者又ハ兼任者ハ前任者ト立會ヒ書類ノ提要目錄ヲ作り共
ニ署名捺印シテ授受ス可シ

死去失踪其他ノ事故ニ因リ引渡人ナキ場合ニ於テハ後任者又ハ兼
任者ハ管轄始審裁判所ノ官吏ト立會ヒ提要目錄ヲ作り受取ル可シ
書類封印後ニ命セラレタル後任者又ハ兼任者ハ管轄始審裁判所ノ
官吏ト立會ヒ封印ヲ解キ提要目錄ヲ作り受取ル可シ

後任者又ハ兼任者ハ提要目錄ヲ作りタル日ヨリ一月以内ニ其目錄
ノ寫一通ヲ管轄始審裁判所ニ差出ス可シ

第六十條 公證人停職ノ場合ニ於テハ兼任者ハ第五十九條ノ手續ヲ
爲スニ及ハス書類ノ保存ハ停職者之ヲ擔當ス可シ

兼任者ハ停職者ノ役場ニ於テ其職務ヲ行フ可シ

第六十一條 兼任者引繼ノ書類ヲ更ニ他ノ公證人ニ引渡ストキハ其

命ヲ受ケタル日ヨリ三日以内ニ自己ノ引繼キタルトキノ目錄ニ依
テ引渡ヲ爲シ其始末書ヲ作り受繼人ト共ニ署名捺印ス可シ
受繼人ハ始末書ヲ作りタル日ヨリ一月以内ニ其寫一通ヲ作り管轄
始審裁判所ニ差出ス可シ

第六十二條 停職者復任スルトキハ管轄始審裁判所ヨリ兼任者ニ解
任ヲ命ス可シ

第六十三條 前任者ノ作りタル原本ニ依テ後任者正本又ハ謄本ヲ渡
ストキハ其受繼人タル旨ヲ附記ス可シ

本任者ノ作りタル原本ニ依テ兼任者正本又ハ謄本ヲ渡ストキハ兼
任者タル旨ヲ附記ス可シ

第四章 手数料及旅費日當

第六十四條 公證人ハ此章ニ定メタル程限ニ從ヒ囑託人ヨリ手数料
及旅費日當ヲ受クルコトヲ得

第六十五條 手数料ハ原本一枚ニ付キ貳拾五錢正本及謄本ハ一枚ニ

付キ拾錢但一行二十字二十行ヲ以テ一枚トシ十行以上ハ一枚十行
以下ハ半枚ヲ以テ算ス

第六十六條 囑託人ノ求メニ依リ先ツ證書ノ草案ヲ渡シ後其原本ヲ
作りタルトキハ草案ノ手数料ヲ別ニ請求スルコトヲ得ス但其原本
ヲ作ラサルトキハ原本手数料ノ半額ヲ受クルコトヲ得

第六十七條 公證人其役場ヨリ一里以外ノ地ニ往テ職務ヲ行フトキ
ハ往返トモ旅費トシテ一里毎ニ貳拾錢ヲ受クルコトヲ得其職務ヲ
行フ爲メ或ハ災變ノ爲メニ其場所又ハ途中ニ滞留スルトキハ日當
七拾錢ヲ受クルコトヲ得

第六十八條 兼任者本任者ニ代リテ其職務ヲ行フトキハ其手数料ハ
總テ兼任者之ヲ受ク可シ

第六十九條 手数料ノ外證券印紙並ニ郵紙ノ代價ハ囑託人ヨリ之ヲ
受クルコトヲ得

第七十條 囑託人ノ求メアルトキハ手数料等ノ計算書ヲ與フ可シ

第七十一條 手数料等ニ係リ争ノ生シタルトキハ其金額ニ拘ハラヌ
管轄始審裁判所ニ訴フ可シ

第五章 懲罰

第七十二條 公證人此規則ヲ犯シタル時ハ管轄始審裁判所ニ於テ第
七十二條ヨリ第七十六條マテニ定メタル規定ニ依リ處分ス可シ

第七十三條 左ノ違犯ハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ過料ニ處ス
第八條ニ違ヒタル時

第十一條ニ違ヒタル時

第十三條ニ違ヒタル時

第三十條ノ第一第二第三第四ノ規定ニ違ヒタル時

第三十一條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時

第三十二條ノ第一項ニ違ヒタル時

第三十四條ノ第一項ニ違ヒ讀聞セシコトヲ記入セス又ハ肩書ヲ爲
サ、リシ時

第三十五條ニ違ヒタル時

第四十條ニ違ヒタル時

第四十一條ニ違ヒタル時

第四十二條ニ違ヒタル時

第四十四條ノ第二項ニ違ヒタル時

第四十六條ニ違ヒタル時

第五十二條ニ違ヒタル時

第五十三條ニ違ヒタル時

第五十四條ニ違ヒタル時

第五十五條ニ違ヒタル時

第五十九條ノ第四項ニ違ヒタル時

第六十一條ニ違ヒタル時

第六十三條ニ違ヒタル時

第七十四條 左ノ違犯ハ二圓以上五圓以下ノ過料ニ處ス

第四十三條ニ違ヒタル時
 第四十四條ノ第一項ニ違ヒタル時
 第四十五條ノ第二項ニ違ヒタル時
 第四十八條ノ第二項ニ違ヒタル時
 第四十九條ノ第一項又ハ第三項ニ違ヒタル時
 第七十五條 左ノ違犯ハ五圓以上三十圓以下ノ過料ニ處ス
 第二條ニ違ヒタル時
 第七條ニ違ヒタル時
 第十條ノ第二項ニ違ヒタル時
 第二十八條ニ違ヒタル時
 第二十條ノ第五ノ規定ニ違ヒタル時
 第三十三條ニ違ヒタル時
 第三十四條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時
 第三十六條ニ違ヒタル時

第三十七條ニ違ヒタル時
 第三十八條ニ違ヒタル時
 第三十九條ニ違ヒタル時
 第七十六條 左ノ違犯ハ一月以上四月以下ノ停職ニ處ス
 第四條ノ第一項ニ違ヒタル時
 第十五條ニ違ヒタル時
 第十六條ニ違ヒタル時
 第十七條ニ違ヒタル時
 第七十七條 公證人前數條ニ掲ケタル懲罰處分ニ對シ不服アルトキハ管轄控訴院ニ抗告スルコトヲ得但抗告ハ其處分ノ執行ヲ停止スルノ効力ナキモノトス
 第七十八條 公證人停職ニ當ル所爲三度ニ及ビタルトキハ司法大臣其職ヲ免ス
 第二十條ノ第一第二第三ニ記載シタル處分ヲ受ケ又ハ身許保證金